

戦姫絶唱シンフォギア
GX ～破・壊・神・
転・生～

GGG@ハーメルン

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

初めまして。GGG@ハーメルンと申します。

本作は、「戦姫絶唱シンフォギア」の世界に平成VSシリーズの《ゴジラ》が人間として転生する2次創作になります。

2015年10月14日からPixivにて連載している物を、この度ハーメルンでも投稿させて頂くことに致しました。

主人公はゴジラが転生した青年、黒銀轟くろがね しょう。

ゴジラの心と力、そして僅かに残る人としての記憶を持つ彼とシンフォギアを纏い戦う少女達との物語です。

新たな生を得ても人間を憎悪するゴジラ、壮絶な運命に翻弄される少女達。決して交わる事の無い筈だった彼等が紡ぐのは、新たな破壊神伝説か？それとも……。

誰も見たことの無いゴジラ神話^{サガ}が、今ここに幕を開けます！

目次

序章—プロローグ—

#00 消滅—Meltdown—

1

第一章

#01 転生—FUKKATU—

11

#02 撃震—Irregular—

① ————— 54

#02 撃震—Irregular—

② ————— 79

#03 覚醒—HENSHIN—

105

#04 革新—Symphogear

#05 異質—Stranger—

213

179

序章—プロローグ—

#00 消滅—M e l t d o w n—

1996年 東京都臨海副都心—

大都会、東京。

日本という国の中心であるこの都市が策定した、7番目の副都心。更なる発展に向けて開発が進んでいた業務指定地区は、現在は見るも無残に破壊し尽くされ、異様な緊迫感に包まれている。

時刻は深夜。あと数時間もすれば明け方という時間帯。

しかし、この街には二度と朝はやって来ないかも知れなかった。

その理由は、世紀末の様相を呈する廃墟の街に佇む、黒く巨大な存在にあった。

《ゴジラ》

別名、怪獣王。

科学という人間の傲慢が生んだ、地球史上最強の生物。

原水爆の放射能によって古代恐竜の生き残りが突然変異を遂げた、身長100m、体重6万tの大怪獣は、10000mを超える深海や1500℃のマントルの中でも平然

と活動できる強靱な肉体を持ち、口から吐く放射能熱線はあらゆる物を破壊する。

そんな“生物”という概念すら超越した『神』に等しき存在が、今その生涯に幕を下ろそうとしていた。

『ガアアアアオオオオオオオオオオオオ……！』

まるで悲鳴を上げるかのような、恐ろしく苦しげな咆哮。今のゴジラは通常の黒い身体に白い背鰭ではなく、身体は炎のように燃える赤に染まり、背鰭は赤熱して先端が融け落ち、全身から白い蒸気を噴き上げる異様な状態となっていた。

ゴジラは、体内の核炉心に異常をきたし、核エネルギーを制御できない状態まで核分裂が暴走していた。一時は地球規模の核爆発を引き起こすと人類を戦慄させたが、自衛隊の尽力で何とかその危機は脱した。

しかし、既にゴジラの異常は人類の予想を遥かに上回る次元に達していた。

ゴジラの炉心温度は900℃を超えており、尚も上昇を続けていたのだ。炉心温度が1200℃を超えれば原発事故など比較にならない規模の炉心溶解メルトダウンを起こすことを知った人類は、ゴジラの地球上でただ1頭の同族である《ゴジラジュニア》を利用し、40年前のゴジラ抹殺の際に覚醒、現代の大气に触れて異常進化した完全生物《デストロイア》によってゴジラを葬り去ろうと画策した。

人類側の思惑通り、ゴジラとゴジラジュニアとの戦いを経て完全体へと進化を遂げた

デストロイアは、命の限界を超えた死闘を繰り広げる。

しかし、ジュニアを殺されたゴジラは怒りの臨界点を突破。逆鱗に触れたデストロイアを完膚なきまでに打ちのめし、恐怖のあまり逃走に至らせる程の力を発揮した。

デストロイアは待機していた自衛隊に討たれるが、ゴジラも力を使い果たしていた。そして――

「メルトダウン……!」

G対策センターの作戦室でゴジラの炉心温度をモニタリングしていた山根健吉が緊迫した様子で叫ぶ。

それが合図となつたかのように、時折苦しげな唸り声を上げ、血反吐の様に熱線を吐いていたゴジラが全身から眩い光を放ち始めた。

「全弾発射!」

自衛隊の特殊戦闘機《スーパーXⅢ》の機内で、メルトダウンの兆候を察知した黒木翔特佐は、搭載した全冷凍兵器をゴジラに向けて開放した。それに倣つて、地上部隊もメルトダウンの被害を最小限に抑えようと持てる限りの冷凍兵器をゴジラに向ける。

「……物凄い放射能だ!」

原発事故等への対策を目的作られたスーパーXⅢの放射線カウンターが振り切れる

のを見て、黒木特佐は戦慄する。

更に激しさを増した自衛隊の攻撃によって、ゴジラの周囲に細氷が降り注ぎ、激しい光と蒸気によって幻想的な風景を作り出す。——そして、遂にゴジラ最期の時が訪れた。

『ガアアアアアアアアア……!』

顔が蟻のように融けだしたのを皮切りに、屈強な筋肉に覆われていた身体が崩れ出す。そして、天に向かって断末魔の咆哮を上げると、胸と背鰭から血のように炎を噴き上げ、骨まで残さず融け落ちていった。

「……ゴジラが、東京を死の街にして融けていく……」

「……これが私達の償いなの？……科学を、核を弄んだ私達人類の……」

その光景を見る全ての者が、似たような想いを抱いていた。

自分達が豊かになる為に他者を、自分達の地球（ま）さえも犠牲にしてきた人類。ゴジラは、そんな愚かな人類に地球が突き付けた罪の化身だったのかもしれない。

自らが犯した愚行は、いつの日か必ず自分達を滅ぼす。溢れ出した放射能は、東京を文字通りの死の世界に変えるだろう。

ゴジラという戒めから解放されても、人類はより大きな十字架を背負わされることになる。

「私の役目は終わった……っ！」

ジュニアの死を看取った女性、三枝未希さえぐさみきはヘリの中で嗚咽混じりに独りごちた。

長年ゴジラを見守り、最もゴジラに近い位置にいたといっても過言ではない彼女。様々な想いが胸に溢れる中、光となって天に召されるゴジラから片時も目を離さない。

ゴジラの最期を見届けることが、自分に課せられた最後の使命と理解しているが故の振る舞いだった。

こうしてゴジラの、長く激しい戦いの歴史は幕を閉じた――

――筈であった。

……

……

……

小笠原諸島 大戸島近海――

大戸島。

東京都に属するも、都心から約1000kmの洋上に点在する小笠原諸島の一つにして、ゴジラが初めて人類の前に姿を現した地。

しかし、この世界にそんな歴史は存在しなかった。そもそも、ゴジラという存在自体、知り得る者は誰もいない。

【並行世界】

パラレルワールド

今いる世界とは時空・次元を隔てて存在する、別の歴史を辿った世界。時間の流れは不可逆であるが、流れる方向は一定ではなく、時代の転換期ターニングポイントが訪れる度、異なる歴史を辿る世界が誕生する。

そう、ここはゴジラが誕生しない歴史を辿った世界。

破壊神のいない海。夕焼けに染まる水面みなもは、それを証明するかのようによろこばかであった。

「……クツソ、また入ってねえ」

不意にそんな呟きが聞こえたのは、海上に浮かぶ一隻の漁船からだった。

声の主は、日に焼けた浅黒い肌をした、まだ成人前の青年。彼の船以外に他の漁船の

姿は無い。

それもそのはず、この時間帯は漁に出始める船はいても、本格的に漁をする時間では無かった。

「今日もこれだけか。こんなんじや燃料代も払えねえ……」

最後の仕掛けを巻き上げた青年は、その日の成果を確認し肩を落とす。そもそも、彼が一人でこんな時間に漁に出ているのにはワケがあった。

彼には元々大きな夢があった。

しかし、夢へ向かってひた走っていた最中、漁師をしていた父が突然の海難事故で他界した。残されたのは、船を買い換える為にこさえた借金と、身体の弱い母親だけだった。

借金の返済と日々の生活を支えるため、父の漁師の仲間の温情でその人が漁に出ない時間帯に船を借り、こうして毎日孤独な海へと繰り出していった。

「しゃあねえ、帰るか。遅くなると申し訳無いしな」

また明日がある。そう思って帰港の準備を始めようとした時だった。

突然、空から激しい爆発のような音が轟き、驚いた青年は手にしたロープを落としてしまった。

「なっ、何——!?!」

反射的に音のした方を見た青年は言葉を失った。

青年の視線の先には、水平線から面おもてを上げたばかりの月があつた。今日は満月の大潮、故にそこにある月は真円を描いている筈だつた。

しかし、月は不自然な形に『欠け』ていた。まるで、本当にその部分が無くなつたかのように。

信じられない光景に立ち尽くす青年だつたが、異変はそれだけに留まらなかつた。

欠けた月が浮かぶ空を、無数の赤い筋が流れている。

まるで、流星群のように絶え間なく降り注ぐそれが欠けた月の破片であることを青年は知る由も無かつた。

「スゲー……」

青年は圧倒的な光景に見入っていた。自分に危機が迫っているとも知らずに。

そして、気付いた時には、もう手遅れだつた。

「えっ——？うおっ!?!」

先程まで風いでいたのが嘘のように、突風が船を揺さぶつた。それに伴い波も高くなり、立っているのもままならない状態になる。

月の破片の一部が地球に落ち、衝撃波を発生させたのだ。

そして、彼の近くにも一際大きい『青』い光が落ちてきていた。

「や、ヤバイー！」

ふらつきながら操縦席に滑り込む。エンジンを吹かせ、全速力でその場を離れようとした。しかし、無情にも青い光は海面に激突し、先程とは比較にならない規模の衝撃波と高波を発生させた。

「うわあああああああああああつ?!?!」

青年は、為す術なく船ごと波に呑み込まれた。

衝撃によって船はバラバラに分解され、成年は海中で揉みくちやにされる。

船の破片が身体を傷付け、その度に口から空気を吐き出す。

漸く身体が流れから解放された時には、青年には泳ぐ力はおろか、体勢を立て直すことも出来なくなっていた。

(……身体の、感覚が無え。苦しいはずなのに、それすらも分からねえ……)

今にも閉じそうになる瞼を必死で開き、徐々に遠ざかっていく海面の光を見つめる青年の脳裏にあったのは、諦めた筈の夢のことだった。

(こんな筈じゃ、なかったんだけど……)。どんなに苦勞しても、何年かかっても良かった……。あの二人みたいに、成りたかった……)

青年の夢。

それは、ミュージシャンとしてデビューし、大舞台で何千・何万という観客の前で自

分の歌を歌うことだった。

(……もう、歌えねえの、かな？……いや、だ。しにたく、ね……よ……)

想いも虚しく、青年の命は今ここに尽きた。亡骸は太陽の光も届かない深淵へと沈んでいく。

——その時、青年の前に眩い青白い光が灯った。

光は巨大な生き物のような形となり徐々に青年に近付くと、その身体を包み、吸い込まれるように消えていった。

後に「ルナアタック」と呼ばれるこの事件は、地球の一部に甚大な被害を与えながらも、3人の少女達の活躍により終息された。

しかし、この事件は後に様々なパラダイムシフトを引き起こす特異点トリガーとなり、世界を更なる騒乱の渦に巻き込んでいくことになる。

そしてその影響は、並行世界との隔たりにも影響し、まつろわぬ怪獣の王をもこの世界に招き入れていた。

ドクンツ……

青年の身体が闇に消える直前、海中に重く力強い鼓動が響いたことを知る者は誰もいなかった——。

第一章

#01 転生—FUKKATU—

太平洋上空、成層圏——

「6人じゃない……！あたしが束ねるこの歌は、70億のお、絶唱——！！！」

【ルナアタック】から3ヶ月後。

当事件を終息させたシンフォギア装者、立花響たちばな ひびきは、仲間の装者達と共に己が全てを賭して奇跡の歌を紡ぎ出す。

地球人類70億人の想いを束ねた歌の力は、たった一人の身勝手が生み出した悪鬼の如き完全聖遺物《ネフィリム》を打ち破り、《バビロニアの宝物庫》と呼ばれる魔窟より現れては人類を脅かしてきた先史文明の負の遺産《ノイズ》を全滅させた。

聖遺物に選ばれし6人の少女が世界を破滅から救ったこの戦いは、後に「フロンティア事変」と名付けられ、【ルナアタック】事件と共に歴史に刻まれることとなった。

同時刻——

伊豆・小笠原海溝。

千葉県房総半島沖から小笠原諸島に沿って南東へ伸びるこの海溝は、北を日本海溝、南をマリアナ海溝に挟まれ、最深部は海面下9780mに達する。

そんな日の光など到底届かない深淵にも、6人の装者が紡いだ奇跡の歌は射し込んだ。

静寂が支配する闇の世界に、美しき旋律が響き渡る。世界を救う程のエネルギーを秘めた歌。

だが、その力が予期せぬ副作用をもたらしたことなど、装者達を含めこの世界の誰も予想しなかっただろう。

『……グウルウウウ』

海溝最深部より、鳴り響く歌を掻き消すような唸り声上がる。直後、海底の堆積物が一斉に巻き上がり、まるで噴煙のように海底を覆い尽くした。

その中心から、遙かなる海面の更にその先を見上げる黒い影。

その視線の先にいたのは、天使のような聖なる鎧に身を包んだ6人の少女。

黒い影は本能的に理解する。

彼女達が、自分を目覚めさせた。彼女達の『歌』が、自身の内から底知れぬ力を湧き

上がらせるのだと。

ほどなくして、巻き上がった堆積物は再び海底に降り積もる。だが既に、謎の黒い影は、跡形も無くその姿を消していた。

.....

.....

.....

〔フロンティア事変〕の終息から1000日余り。

《バビロニアの宝物庫》が破壊されて以降、世界にノイズ災害が発生することは無くなった。

これにより、対ノイズの剣たる〔シンフォギア・システム〕と、その装者達が所属する〔特異災害対策機動部二課〕は、国連直轄の超常災害対策機動部タスクフォース〔Squad of Nexus Guardians〕、通称〔S.O.N.G〕として再編成され、世界各地で発生する災害救助活動に従事していた。

熾烈を極めた二度の大きな騒乱を経て、世界は漸く安寧を取り戻した筈だったが、世界は、今また新たな脅威に曝されている。……

横須賀【S. O. N. G】指令室——

「《アルカ・ノイズ》の反応を検知！」

「座標は……ッ!？」

鳴り響いた警報と管制官の切迫した声に続き、【S. O. N. G】の移動本部である潜水艦の指令室は外部からの衝撃によって激しく揺れた。メインモニターが切り替わり、外の様子が映し出される。

現在【S. O. N. G】は補給の為、大きな発電施設を備える横須賀の海上自衛隊基地に寄港していた。その敷地内を、色鮮やかな異形の軍勢が闊歩している。

敵勢力は大きく分けて3タイプで構成されていた。人の形をしたもの、イモムシのようなもの、はたまたパイプオルガンを模したもの。

襲撃者の名はアルカ・ノイズ。

『世界の分解』を企てる新たな敵、錬金術師キャロル・マールス・デインハイムがノイズをベースに錬金術によって生み出した、ノイズの亜種と言える存在だった。

【緒川】

「まさか、敵の狙いは——ッ!？」

指令室で懸念を口にしたのは、日本政府のエージェントで【S. O. N. G】主要メンバーの一人、緒川^{おがわ}慎次^{しんじ}であった。メインモニターでは、パイプオルガン型のアルカ・ノ

イズが、電力供給施設のソーラーパネルに向けて頭部の管から砲撃を行った。

【緒川】

「やはり、この基地の発電施設！」

【藤堯】

「ここだけではありません！都内複数個所で、同様の被害を確認！」

男性メインオペレーターの藤堯ふじたか朔也さくやが手元のコンソールを操作すると、サブモニターに新たに5つの施設が映し出された。各施設は、それぞれ所々が破壊され、炎や煙を上げている。

【あおい】

「被害により各地の電力供給が大幅に低下……このままでは……！」

補足するように、女性のメインオペレーター、友里ともさとあおいが、別のデータを見ながら叫ぶ。それと同時に再び指令室が衝撃で揺さぶられる。

【緒川】

「……ここもこれ以上被害を受ければ、電力供給が断たれるのも時間の問題でしょう。内蔵電源もそう長くは保ちませんからね」

緒川の言葉に、指令室に緊張が走る。【S・O・N・G】にとって電力が断たれることは、二重の意味で看過できなかつた。

【翼】

「今、本部への電力が断たれば、ギアの改修への影響は免れない！」

1つ目の気掛かりを口にしたのは、シンフォギア装者の中でも最古参ツフモノの兵にして世界的な歌姫、風鳴翼かざなりつばきだった。

普段は美しい歌声で万人を魅了している彼女だが、今はその美しい顔立ちには似つかわしくない触れれば切れるような鋭い雰囲気を放っていた。

敵の襲撃を受けながらも戦士である彼女が迎撃に出られないのには理由があった。

翼を始めとした6人の装者は、それぞれアルカ・ノイズ及びそれを操る存在と交戦したのだが、翼を含む3人のシンフォギアはアルカ・ノイズによって『分解』されてしまったのである。

アルカ・ノイズには、キャロルの悲願である『世界の分解』を体現するように、対象を《解剖器官》と呼ばれる部位によって、有機物・無機物、果てはシンフォギアに至る全ての物を赤き塵へと分解してしまいう能力がある。

これにより、本来ならノイズの侵食を防ぐシンフォギアのバリアコーティング機能が全く役に立たず、アルカ・ノイズに対してシンフォギアは切り札に成り得なくなってしまうのだ。

だが、光明が無くなったわけではない。

アルカ・ノイズの脅威に曝された装者達の前に、キャロルの元から脱出してきたホームクルス、エルフナインによってシンフォギアの改修計画《プロジェクト・イグナイト》が始動。現在も改修作業が進められている最中であつた。

【クリス】

「おいつーギアの改修はまだ終わらないのかよ?！」

苛立ちを隠し切れない口調で怒鳴つたのは、翼と同じシンフォギア装者の一人、雪音クリス。彼女も、逃亡中のエルフナインを保護する任務に当たっていた際、不覚を取つてギアを分解されていた。

可愛らしい外見とは裏腹に口調や態度は悪いが、それは幼少期を紛争地域でゲリラの捕虜として過ごした暗い過去を持つが故であり、そんな経験から、悪意を持って力を振るう者達を何より許せない強い正義感を持っている。今も、戦うべき時に戦えない自分への苛立ちが表に出てしまつていた。

クリスの声に、指令室へ別室から通信が繋がる。通信元は、開発室^{ラボ}で彼女と翼のギアの改修に当たっているエルフナインであつた。

【弦十郎】

「エルフナインくん、改修完了まであとどのくらいだ?！」

【S. O. N. G】司令、風鳴弦十郎^{かざなりげんじゅうろう}。赤い髪を逆立てた筋骨隆々の偉丈夫で、風鳴

翼の叔父に当たる人物である。

彼が改めてモニターに映し出された少女（実際はホムンクルスのため性別は無い）に訊ねるも、あどけなさを残すエルフナインの表情が申し訳なさそうに曇る。

【エルフナイン】

『さ、最低でも30分は……！す、スママセンッ！』

【弦十郎】

「30分——！自衛隊の戦力では、5分保つかどうか……」

敵に攻め入られている状況で、それはあまりにも長過ぎる時間だった。

弦十郎は再び外部モニターに目を向ける。外では、自衛隊の歩兵部隊がアルカ・ノイズを迎撃をしていた。

アルカ・ノイズは、優れた攻撃性能を獲得する代わりに、本来持っていた《位相差障壁》という通常兵器に対する絶対防御を失っている。

よって、自衛隊の保有する装備でもアルカ・ノイズに対して打撃を与えることができ、今もアサルトライフルや対戦車砲で侵攻を遅滞させていた。

しかし、超常的能力を持つ相手に対してそれは気休めにしかならず、今も側面に回り込んだイモムシ型の攻撃によって防衛線が崩されつつあった。

【未来】

「そんなっ！じゃあ、メデイカルルームも!？」

白いリボンで髪を留めた学生服の少女が泣きそうな顔で緒川とその隣に座す弦十郎を見た。

彼女、小日向こひなた未来みくは厳密には【S. O. N. G】の間人では無いのだが、装者の一人、立花響の親友として過去二度の騒乱に関わってきた。今では響だけでなく、他の【S. O. N. G】メンバーの協力者として彼女達の戦いを見守り、時にサポートしている。そんな彼女が泣きそうになった理由は、2つ目の気掛かりに起因していた。

現在メデイカルルームでは、彼女の親友である響が治療を受けている。響も翼とクリス同様、戦いの中でギアを破壊され、自身も意識不明の重傷を負い、未だ目を覚ましていなかった。

今、電力が失われれば、ギアの改修だけでなく響の命まで危険に曝されることになる。

【マリア】

「……ただやられるのを見ていることしか出来ないなんて。私に力さえあればっ——」

【未来】

「マリアさん……」

翼の隣でモデル顔負けの美貌とスタイルを持つ女性が、拳を握り締め、絞り出すように呟いた。

彼女の名はマリア・カデンツァ・ヴナ・イヴ。装者の中で最年長に当たり、翼と並ぶ人氣歌手でもある彼女だが、「フロンティア事変」では自分を慕う二人の少女と共に響たちと敵対していた。

紆余曲折を経て響たちと和解、共に世界の危機を救ったものの、自身のシンフォギアは響に受け継がれ、今は戦う術を失っている。

【あおい】

「地上部隊の損害拡大！撤退を開始します！」

【藤堯】

「アルカ・ノイズ、施設への攻撃を再開！本部への電力供給率40%に低下！」

自衛隊の必死の抵抗も、僅かばかり侵攻を遅らせるに留まった。アルカ・ノイズは敗走する人間達には目もくれず、破壊活動を再開する。基地施設が爆発・炎上する度、指令室にいる全員の胸に無力感が広がっていった。

海上自衛隊敷地内――

自衛隊を蹴散らし、発電施設への進撃を再開するアルカ・ノイズ。

そんな異形の群れを建物の屋上から見下ろす二つの影があった。

【調】

「良かった。まだ、発電所は動いてるみたい」

【切歌】

「自衛隊の人達が頑張ってくれたお陰デス！」

所々が壊れながらも送電が断たれていないことを確認し、つくよみしらべ月読調とあかつききりか暁切歌は胸を撫で下ろした。

シンフォギアを纏う者達の中で最年少である彼女たちは、マリアと共に世界を敵に回した過去を持つ。しかし、幼さの中にしつかりとした信念を胸に宿す彼女達は、自らの過ちを認め、【S・O・N・G】メンバーと同じ道を歩み始めた。

そして今も、自分達の意味で、自分達にできることを成そうとこの場にいる。

【調】

「……次は私たちの番だね、切ちゃん」

最も小柄で人形のように可憐な容姿の少女は、決意に満ちた強い眼差しで並び立つ親友に目を向ける。

その視線を真正面で受け止め、自身の金髪のように明るい心根の少女は、特徴的な口調で応じた。

【切歌】

「そうデスね、調！行くデス、一緒に！」

【調】

「うんっ！」

二人は互いに頷き合い、首から下げた赤いペンダントを握り締め目を閉じると、それぞれの胸に浮かんだフレーズを口ずさんだ。

【調】

「Various shul shagana tron……」

【切歌】

「Zeios igallima raizen tron……」

静かだが、心に響く清らかな祈り。その祈りに共鳴するように、胸のペンダントが光を放った。

ペンダントはエネルギーを放出し、調と切歌を包み込む。彼女たちの着ていた未来と同じ制服は光によって分解され、代わりに露出度の高めの戦装束が各部を覆う。

調はピンク、切歌は緑の鎧とそれぞれの固有武器を携え、胸に共通の赤い結晶を輝かせる姿へと『変身』した。

これこそが人類を二度も救済したFG式回天特機装束、「シンフォギア・システム」。神話や伝承に由来する《聖遺物》の欠片をコアとし、装者の《聖詠》によって起動・装着して戦う力とする。

元となった聖遺物によって異なった特性や固有武装《アームドギア》を持つが、その全てが『歌』によって生成される《フォニックゲイン》をエネルギー源とする点で共通していた。

調と切歌の二人も、それぞれのギアから流れてくる旋律に合わせて歌いながらアルカ・ノイズに向かっていった。

♪ジエノサイドソウ・ヘヴン

【調】

「やあああああつー！」

《α式 百輪廻》

調は、黒髪ของ ツインテールに装着されたアームドギアから小型の鋸を無数に放ち、地上を這い回るアルカ・ノイズを伐り刻んだ。

彼女のシンフォギア、塵鋸《シウルシャガナ》は、シユメール神話の戦女神ザババが振るいし『紅き刃』を起源に持つ。

このギアの特徴は、脚部ローラーを用いた高速滑走とアームドギアから展開される回転鋸であり、高速機動で攪乱しつつ、対象を轢断する戦法を得意とする。

調は着地すると、今度はアームドギアを大きな回転鋸に変えて近くの敵を裁断する。

その後方では、切歌がアームドギアの大鎌から3枚の刃を飛ばし、3方向の敵を同時

に切り伏せた。

《切・呪りeツTお》

緑の獄鎌、《イガリマ》。

調のシウルシャガナと同様、ザババの振るつたもう一つの武器『緑の刃』を起源とする。

アームドギアは身の丈以上になる大鎌で、その一振りは複数の敵を同時に切り払う。また、肩部アーマーにはワイヤーアンカーとブラスターを備え、これを用いた空中機動も可能であった。

切歌が新たな刃で以て別の敵を切り倒すと、同じく敵を伐り捨てながら近寄ってきた調とピツタリ背中を合わせる。

【切歌】

「悪くないデスッ！」

【調】

「うんっ」

二人はお互いの調子を確認し頷き合うと、施設から自分達に攻撃対象を変更した異形の群れに再び突っ込んでいった。

【マリア】

『調！切歌！』

【調】 【切歌】

「マリアア！」

更なる出力を引き出す為、歌を紡ごうとした時、ギアの通信機能を介して二人の『家族』の声が聞こえた。敵を倒しながら通信に耳を傾けると、マリアだけでなく指令室にいる彼女の仲間たちの声が流れてくる。

【弦十郎】

『お前達！自分が何をしているか分かっているのか!?!』

【切歌】

「もちろんデスともっ！」

【調】

「私達が時間を稼いでいる間に、強化型シンフォギアの完成をお願いします！」

弦十郎の怒鳴り声に、切歌と調は即答した。

勝手なことをしているのは承知の上。黙って出撃した以上、帰ったらキツイお説教が司令や先輩から下されるだろう。にも関わらず二人がここにいるのは、何かなんでも助きたい人がいるからだった。

立花響。

同じシンフォギアを纏う仲間にして学園の先輩。そして、二人とマリアの心を救ってくれた人。

今、彼女は戦いの果てに傷付き、いつ覚めるとも分からない眠りに就いている。発電施設がやられたら、彼女の命に関わるかもしれない。

【調】

「だから、退く訳にはいかない！」

調と切歌は、気合を刃に乗せて戦場を駆け抜ける。

そんな二人をアルカ・ノイズの解剖器官による攻撃が襲うが、ギアの特性を活かしたキレのある動きで躲し、反撃に転ずる。

調はヘッドパーツから分離したギアをヨーヨーのように操り、変幻自在の軌道でアルカ・ノイズを伐り裂いた。

【フロンティア事変】の折り、調は心無い言葉で響を傷付けた。

何も分かっている綺麗事だけの偽善者と。……本当に何も分かっているなかったのは自分だとも気付かずに。

そんな調に、響は心からの言葉で向き合ってきた。敵であった時も、仲間となった今も。

それに救われながらも、改めてお礼を、謝罪を出来ない自分に、調は後ろめたさを感じ

じていた。だからこそ、彼女の窮地にいてもたつてもいられず、親友の切歌と共に、今戦場に立っている。

【調】

「……強くならなければ。大切な人達を守れるように！」

調は2つのヨーヨーをライフル弾のように射出し、敵の戦列に穴を開けると、間隙を縫うように密集地帯に入り込みフィギュアスケーターのように回転した。

《艶殺 Δアクセル》

回転によって舞い上がったスカートが伸び、硬質な刃となって周囲のアルカ・ノイズを伐り刻む。

四散したアルカ・ノイズの赤い霞みが漂う中を、調はまるでスケートリンクを優雅に舞うように滑り出た。

【調】

（あと20分、絶対に持ち堪える！響さんの為にも！）

指令室——

【クリス】

「バカッ、早く戻れ！またギアからのバックファイアで——」

【あおい】

「二人のバイタル、安定？ギアからのバックファイアが低く抑えられています！」

モニターで切歌と調の戦いを見守っていた面々は、あおいの報告に驚きを隠せなかった。

調・切歌・マリアの3名は、本来ならシンフォギアを纏えるだけの適合係数を持つていない。適合係数が基準に満たない者が無理にギアを纏えば、ギアからの深刻な負荷バックファイアによって身体を蝕まれ、最悪纏ったシンフォギアによって殺されることになる。

【クリス】

「どういうことだよ!?!あいつらの適合係数じゃ、LINKER無しじゃ——ツ!まさかっ!?!」

二人が平然とギアを纏って戦っている様を見て、クリスはある可能性に思い至り、言葉詰まらせた。他の者も同じ考えに至ったらしく、緒川が緊張した心当たりを口にした。

【緒川】

「……さっきの警報、そう言うことでしたか」

【弦十郎】

「ああ。……あいつら、メディカルルームからLINKERを持ち出しやがった」

【翼】

「まさか、モデルKを？奏の遺したLINKERを……」

《LINKER》。

適合係数が基準値に満たなくても、ある程度の素質さえあれば、ギアを纏えるレベルまで適合係数を上昇させる、云わばドーピング剤。

それ故に代償も大きく、耐性の低い者に投与すればショック症状に見舞われ、最悪廃人となるか死亡する。

嘗て翼とデュオを組み、共に歌い戦った天羽奏はあもうかなでこの忌まわしき薬剤の被験者であり、シンフォギアを纏うことに成功したモデルケースであった。

彼女の遺した観測データを元にLINKERは開発・量産され、調達、後天的適合者を生み出した。

当初に比べれば幾らか危険性は減ったとは言え、効果時間に限りがあり、使用後は体内洗浄等のリカバリを必要としている。

【マリア】

「あの子たち……っ」

【調】

『ギアの改修が終わるまで！』

【切歌】

『発電所は守ってみせるデス!』

決意の刃を携えた二人の少女は、アルカ・ノイズの赤き血霞の中を舞い踊るように駆け抜けた。

【響】

「……調ちゃん? 切歌ちゃん?」

そんな声が聞こえ、全員が指令室の扉に注目する。

扉の前には、病人服に身を包み、腕や頭に痛々しい包帯を巻いた少女が立っていた。

【未来】

「響っ!」

未来は親友の名を呼びながら一目散に駆け寄り、目の前にいる彼女が本物か確かめるように勢い良く抱き着いた。

響は自分を心配して涙してくれる親友を気遣うように、優しく頭を撫で、抱き返す。

【響】

「……ごめん、未来。心配かけて……」

【翼】

「立花!」

【弦十郎】

「響くん、もう良いのか？」

自分を心配してくれるかけがえのない人達に頷き応えようと、響は強い光を帯びた瞳で弦十郎を見る。

【響】

「……状況、教えてください」

【あおい】

「……見ての通りよ。現在、調ちゃんと切歌ちゃんがアルカ・ノイズと交戦中」

【クリス】

「LINKERまで持ち出して勝手に……！」

悔しそうに唇を噛み締めながら絞り出すクリスに、響も胸が締め付けられる思いだった。

戦うことへの迷いから一時はギアを纏うことができなくなり、未来のお陰で迷いを振り切った矢先、敵によってギアを破壊されてしまった。そのせいで、自分よりも小さい二人に辛い想いをさせることになってしまっている。

【響】

「……やっぱり、私の拳じゃ何も守れないのかな？」

【未来】

「響……」

響の心の内を悟り、今度は未来も励ましの言葉をかけることが出来なかった。

響は心配する親友の視線を知ってか知らずか、頭を振って気持ちを無理矢理切り替えると、奮戦する後輩達に目を向けた。

【藤堯】

「アルカ・ノイズ、残存数僅かです！このまま行けば——」

オペレーターの藤堯が、見えてきた希望を口にしようとした時、

【??】

『そおおりヤアアアアッ！』

奇妙な声が聞こえた瞬間、アルカ・ノイズを切り伏せた切歌に向かって何者かが奇襲を仕掛けてきた。

切歌は素早く反応して敵の攻撃を受け止めも、もう片方の腕に持った鈍器の一撃に吹き飛ばされ、助けに入ろうとした調共々近くの建物に激突した。

【調】【切歌】

『うああああああああつ!?!』

【マリア】

「調！切歌！」

【翼】

「新手か!？」

切歌の立っていた場所に降り立った存在は、まるでピエロのような振る舞いで、手に持つ赤い結晶状の武器を弄んでいた。

切歌や調と大差無い小柄な身体に、熊手のような手と燃えるような赤いロール髪。その姿に、【S. O. N. G】のメンバーは見覚えがあった。

【響】

「あれは……！」

響は拳を握り締める。あれこそ、自分のギアを破壊した張本人。

キャロル・マールス・デインハイムの従える4体の自動人形オートスコアラの一体、ミカ・ジャウ

カーン。エルフナインの言によれば、戦闘に特化した最強の自動人形オートスコアラだ。

【ミカ】

「ジャリンコども。私は強いゾ！」

自身の戦闘能力を誇示するように余裕の態度で宣うミカ。その視線の先で、調と切歌が瓦礫を押し退けながら立ち上がる。

【調】

『子供だと馬鹿にして……!』

【切歌】

『目にももの見せてやるデスよ!』

言うなり二人は懐から緑色の液体の入った拳銃のような物を取り出す。それを見た指令室の面々は一様に息を飲んだ。

【未来】

「更にLiNKERを!」

LiNKERの投与量を増やせば、適合係数が更に上昇しギアの出力も増大する。しかしそれ以上に、身体に掛かる負担はLiNKER一本とは比較にならず、仮に敵に勝利できても自分の身体も朽ち果ててしまうかもしれない。

【弦十郎】

「二人を連れ戻せ!これ以上は——」

【マリア】

「やらせてあげてください!」

【未来】

「マリアさん!?!」

弦十郎の声を遮ったのは他でもない、二人と幼い頃から辛苦を共にしてきたマリア

だった。

【マリア】

「これはあの日道に迷った臆病者達の償いでもあるんです」

【弦十郎】

「臆病者達の償い？」

【マリア】

「……誰かを信じる勇気が無かったばかりに、迷ったまま独奏した私達」

「だから、エルフナインがシンフォギアを蘇らせてくれると信じて戦うこと。それこそが、私達の償いなんです！」

【クリス】

「トンチキなこと抜かすな！それであいっらに何かあつたら——ッ!？」

可愛い後輩を想うあまりマリアの胸ぐらを掴み上げたクリスは、マリアが血を流すほど唇を噛み締めているのを見て言葉を詰まらせた。

できることなら自分が代わりにその責を負いたいのには、戦う術を持たぬ故にそれも叶わない。

それでも、今為さねばならない最善の為に、必死に屈辱に耐えようとしている。

【切歌】

『ありがとうデス、マリア……』

通信で成り行きを聞いていた切歌の言葉に、全員の視線がモニターに戻る。

調と切歌は向かい合い、互いの首筋に無針式シリンダーを押し当てた。

【調】

『二人でなら……』

【切歌】

『怖くないデス！』

トリガーを引くと、緑の薬液が二人の身体に注入されていった。するとすぐに薬が全身に回り、二人はよろめく身体を支え合う。

何かが込み上げてくる感覚に鼻を押さえると、掌に鮮血が付着していた。

【調】

『過剰投与……』
オーバードーズ

【切歌】

『鼻血がなんぼのもんかデス！』

【調】

『行こう切ちゃん。一緒に！』

【切歌】

『切り刻むデス！』

二人は、L i N K E Rを投与する間も高みの見物を決め込んでいたミカに向き直る。

切歌は両肩のアーマー内から二振りの鎌を新たに取り出すと、2本を合体させ、三日月を背中合わせにしたような形状の大鎌を作り出した。

《対鎌・螺Pうん痛エる》

調もツインテールのギアから大型の回転鋸を展開、高速回転によつて威嚇するような音を響かせる。

〔ミカ〕

『オオッ！面白くしてくれるノカ〜!?』

言うなりミカは赤い結晶状のカーボンロッドを投擲してくる。それを合図に、二人はミカに向かって突撃した。

♪J u s t l o v i n g X | E d g e

迫り来るカーボンロッドの砲弾を、切歌は合体鎌で弾き飛ばし、間合いに入るなり横一文字の斬撃を放った。一瞬受け止められはしたものの、その威力はカーボンロッドを粉碎し、ミカは後退する。

その隙に、今度は調が大型化した回転鋸2本を投擲した。

《γ式 卍火車》

回転刃の連撃は野球のバットののように振り回したカーボンロッドに弾かれるも、調は間を開けず、ギアを自身を中心に回る車輪状に変形させ、そのまま敵に突っ込む。

その膂力は小柄の調のものとは思えず、ミカも今度は弾けずカーボンロッドを破壊された。

【藤堯】

「更なる適合係数の上昇で、ギアの出力も上がっています！」

【あおい】

「二人のユニゾンが数値以上の効果を発揮しています！」

《シウルシヤガナ》と《イガリマ》は同じ神格武装を起源とする。故に同時運用、歌を共鳴させることで更なる力を発揮することができる。

【弦十郎】

「だが、この輝きは時限式だ」

【マリア】

「それでも調と切歌なら、目の前の茨を切り刻み、道を拓いてくれる！」

二人はその後も一糸乱れぬコンビネーションでミカを攻め立てた。同時攻撃で防御を崩すと、調は2つのヨーヨーを合体させ、巨大な2枚刃の回転刃に変えてミカに叩き付ける。

《β式 巨円断》

ミカは掌から発生させた炎の障壁でそれを弾くも、二人は既に次の攻撃に移っていた。

《巨円断》は囹。真の切り札は、親友二人の合体攻撃。

調と切歌は手を取りながら跳躍し同時に回転すると、それぞれの脚部アーマーから鋸と鎌を出現・巨大化させ、落下の勢いを乗せて同時に蹴り込んだ。

【切歌】【調】

『ハアアアアアアアアアアツ!!』

【ミカ】

『ドッカーン!!』

二人は更なるユニゾンで敵の障壁を突破しようとするも、ミカは球体状に膨張させた障壁内に炎を溢れさせ、内側から炸裂させた。

大爆発が起こり、余波が基地の施設を壊していく。停泊中の本部にまで衝撃が届き、指令室の面々も近くにあるものに掴まって何とかやり過ごしていた。

【クリス】

「クツソオ! あいつらは!? 無事なんだろうな!」

【マリア】

「調！切歌！」

藤堯とあおいが急いで乱れたモニターを復旧させる。そこには、爆発に巻き込まれ、真っ黒になりながら倒れ伏す調と切歌の姿があつた。

【響】

「調ちゃん！切歌ちゃん！」

【調】

『うっ……、響、さん……？』

【切歌】

『……良かった。無事だったんデスね？』

【響】

『——ッ。うんっ、うんっ！二人が守ってくれたお陰だよ！』

響の声に気付き、二人は互いを支えながら何とか立ち上がる。

しかし、二人の身体とギアは既に限界を迎えつつあつた。

【弦十郎】

「もういい！二人とも下がれ！」

【切歌】

『まだ、デス！』

【調】

『まだ、もう一つの目的が果たされていません。強化型シンフォギアの完成までは……！』

【翼】

『その身体でこれ以上の防衛は無理だ！後は我々に任せて——』

【調】【切歌】

『『それじゃ、嫌なんです（デス）！』』

弦十郎と翼の説得、調と切歌は悔しげな顔で首を振った。

【調】

『折角、響さんが目覚めてくれたのに、発電所が守れなかったら意味がない。結局、何も変えられない……！』

【切歌】

『こんなに頑張っているのに……どうしてデスカ？こんな嫌デスよ！変わりたいデス……！』

切実な二人の叫び。だが命の無い戦闘人形は、二人の想いをただ嘲笑う。

【ミカ】

『なかなかだったゾ。でも、そろそろ遊びは終わりだゾ！』

【切歌】

『遊び?……ふざけるな、デス!』

【調】

『切ちゃん?!ダメッ!』

ふざけた調子で今までの戦いはお遊びと断じたミカに、ふらついていた切歌は足に鞭打ち、がむしやらに突っ込んでいった。

【切歌】

『でやあああああああ!』

【ミカ】

『……ニヒヤ』

気合いとは裏腹に、切歌の突進はミカにとっては止まっているのと同義だった。

相変わらずの道化師のような笑みを浮かべた後、ロール髪内に搭載されたブースターを点火し、一気に切歌に迫った。

【ミカ】

『バイナラ〜!』

一瞬で目の前に現れたミカに驚き、目を見開く切歌。

動きが鈍った彼女に向かって突き出した腕から高硬度カーボンが飛び出し、切歌の胸

に命中する。痛烈な一撃はイガリマのコアを的確に捉えていた。

コアはまるでガラス細工のように粉々に砕け散り、切歌の身体も道端の小石のように軽々と飛ばされ、何度も地を跳ねた。

【切歌】

『あぐっ!?!……がはっ』

漸く止まった瞬間、切歌のギアは解除され、一糸纏わぬ姿となってしまうた。

【調】

『切ちゃん!!』

【響】

「切歌ちゃん!!」

一部始終を見ていた全員が切歌の安否に固唾を飲む。響の時のように重傷ならすぐに救助しなければ命に関わる。

調は親友のいち早く駆け寄ろうとシユシヤガナを駆った。しかし、その進路はミカの放ったカーボンの砲弾に阻まれる。

【ミカ】

『余所見してると後ろから狙い撃ちだゾ〜?』

【調】

『邪魔をしないで!』

親友を危機に陥れた相手を涙が滲んだ瞳で睨みながら、調はギアから4本もの回転鋸を展開した。

【ミカ】

『仲良し小好しでオマエのギアも壊してやるゾォ〜!』

【切歌】

『……うっ。しら、べ……?』

【調】

『——ッ! 切ちゃん!……良かった』

【切歌】

『調……、早く、逃げるデス……』

【ミカ】

『逃がさないゾ〜。マスターから好きにしていって言われたし、コイツらで可愛がってやるゾ!』

ミカは両手一杯にアルカ・ノイズ召喚用ジエムを取り出すと、全てバラ撒いた。

ジエムは地面に落ちると赤い召喚陣を描き、そこから無数のアルカ・ノイズが競り出してくる。

【翼】

「これ以上は危険だ！」

【マリア】

「逃げなさい、調！」

傷付いた身体にはあまりに絶望的な物量差。

切歌だけでなく仲間達全員が撤退を指示するが、調は頑としてその場を離れようとしなかった。

【調】

『切ちゃんを置いて逃げるなんてできない！私の命は切ちゃんに救われた命だもの！』

『切ちゃんを救う為に全部使うんだ!!』

【ミカ】

『始まるゾ……。バラバラ解体ショー!!』

ミカの叫びを合図に、一方的な蹂躪が始まった。

調は寄せ来るアルカ・ノイズを片っ端から伐り刻む。だが、伐つても伐つても異形の波は収まる事が無かった。

解剖器官による攻撃で回転鋸の一つが破壊される。調は代わりにヨーヨー鋸を手に取り、攻撃の手を補おうとしたが、敵が調のギアを破壊するスピードの方が遥かに速

かった。

【クリス】

「やめろお!!それ以上、あたしの後輩を傷付けたらぶつ殺すぞ!」

【未来】

「お願いっ!もう逃げてよお!」

【弦十郎】

「クソツ、緒川!!」

【緒川】

「はいっ!!」

ボロボロになっていく小さき背中を見て、悲痛な叫びが指令室に溢れる。

弦十郎の指示で緒川が救援に向かおうとした時、ドアが開き、肩で息をしたエルフナインが入ってきた。

【エルフナイン】

「お、お待たせしました!翼さん、クリスさん!これを!」

彼女が差し出したのは2つの赤い結晶。修復・強化を終えた翼の《天羽々斬》とクリスの《イチイバル》のコアだった。

【エルフナイン】

「これならアルカ・ノイズの分解能力を無効化できます！」

【翼】

「良くやった、エルフナイン！行くぞ、雪音！」

【クリス】

「おうっ！待つてろよ！今すぐ——」

【マリア】

「調!!」

マリアの悲鳴にも似た声に、飛び出していこうとした翼とクリスは慌てて振り返る。

視線の先では、アルカ・ノイズの攻撃でコアを破壊され、群れの真ん中に倒れる調の姿が克明に映し出されていた。

アルカ・ノイズは自分達の前に転がる弱った獲物を見下ろしながら、主の命令を待っている。

【ミカ】

『すぐに壊しちやダメだゾ。……虫みたいに手足を一本一本千切つてから殺るんだゾ！』

無邪気に放たれた残酷な命令。それ聞いた色鮮やかな解体者達は、その魔手を生まれのままの姿で横たわる少女に伸ばした。

【響】

「調ちゃん!!」

この場にいる誰にも彼女を救うことは叶わない。ただ何もできない自分達を呪いながら、仲間が無慈悲に陵辱される様を見ているしかない。

指令室が絶望感に包まれようとした——その時、

【あおい】

「な、何?これ……」

手元のモニターを見ながら、あおいが呟いた。その声には明らかな戸惑いの色が滲んでいる。

【弦十郎】

「何だ!？」

【あおい】

「な、何かがこの基地に急速接近中です!」

【緒川】

「何か?」

【藤堯】

「まさか、別の自動人形オートスコアラじゃないだろうな!？」

【あおい】

「違うわ！この反応は——《アウフヴァツヘン波形》!？」

それは、シンフォギアが発する特殊なエネルギーを示すものだった。

海上自衛隊敷地内——

切歌は傷付いた身体をおして、無情にも命を刈り取られようとしている親友を助けようともがいた。しかし、身体は言うことを聞いてくれず、辛うじて上体を持ち上げるに留まった。

【切歌】

「誰か、助けて欲しいデス……。私の、大好きな調を……」

切歌は必死で助けを乞う。

調を喪いたくない。誰よりも側にいてくれて、これからもずっと隣にいるはずの彼女を誰でもいいから助けて、と。

だが、彼女の懇願を聞き届ける者は誰もいない。

脳裏に浮かぶのは、月の光のように儂くも美しい笑みを自分に向けてくれる親友の顔。自分の命を捨てても守りたい笑顔。

それが、永遠に喪われようとしていた。

【切歌】

「誰かあああ!!」

切歌の絶叫が戦場に木霊する。あまりにも非情な運命に、閉じた彼女の目からは涙が止まらなかった。

……

……

……

【切歌】

「……………え?」

固く目を閉じ、目の前で繰り広げられるであろう惨劇から目を背けていた切歌だったが、微かな物音すら聞こえてこないことを疑問に思い、恐る恐る目を開け唾然とした。

調に襲いかかったはずのアルカ・ノイズが、1体残らずその場で停止していたのである。まるで石にでもなってしまったかのようにピクリとも動かない。

【切歌】

「一体、どうしたデスか?……調!?!」

呆気にと取られていた切歌は、調の安否を確認しようと視線を巡らせる。すると、立ち並ぶアルカ・ノイズの足の間から、怯えて蹲る少女の姿が目にと留まった。

【切歌】

「調っ!!」

生きていた。親友が無事だったことに、切歌は安堵しながら涙する。

その声が届いたのか調もおずおずと涙の溜まった目を開き、何が起こったのか分からないといった顔で、自分を取り囲む敵を見上げていた。

【ミカ】

「オマエ等どうしたんだ!?!何で勝手に止まるんだゾ!?!」

ミカも流石に困惑し、アルカ・ノイズへ近付いていった。

その時、突如として全てのアルカ・ノイズが動き出し、ミカの方を振り向いた。……

正確には、ミカの後方を。

【ミカ】

「オワツ?!いきなり動くな、びっくりしたゾ——!?!」

言い終わるか終わらないかといったそんなタイミングで、基地敷地内に激しい衝撃音が響いた。ミカはビクツと身体を跳ねさせ、上半身だけを真後ろに向ける。

音がしたのは、海に面した岸壁だった。

だが、そこは綺麗に舗装・整備されていたのが嘘のように抉り上がっており、東京湾の奥の方に位置する土地とは思えない高さの水柱が立っていた。

予想だにしない光景に、ミカも調も切歌も固まっていた。

そんな彼女達の前で、水柱がアスファルトに向かって滝のように叩き付けられ、当たりに海水が散乱する。

その丁度中心に、『ソレ』は佇んでいた。

【切歌】

「きよう、りゆう……?」

現れた存在を見た切歌は、調と響と未来、そしてその友達と一緒に観に行った映画に出てきた遙か昔の生き物を思い浮かべていた。

彼女の言は半分正しい。ソレは嘗て恐竜だった存在なのだから。

海から現れた存在は、身長約2mと恐竜にしても小型な体躯だった。

その身体は不気味な赤黒い霧のようなもので覆われ、輪郭がハッキリしていないが、その色合いは奇しくも、死ぬ間際のそれと同じであった。

小さめの頭部にかっしりした手足を備えた直立二足歩行骨格を持ち、背中には3列の鋭い背鰭が身長以上の強靱な尻尾まで連なっている。

この特徴を聞けば、元いた世界の人間は誰もがこの存在を思い浮かべるだろう。

《ゴジラ》

不死身の生命と無双の強さを誇る怪獣の王。本来ならばこの世界には存在しないは

ずの破壊の神。

半年前の「ルナアタック」。この世界に様々なパラダイムシフトをもたらしたかの大事件は、並行世界との境界線までもを歪め、この大いなる者の魂をこの世界に呼び込んでいたのだ。

『ガアアアアオオオオオオンッ!!』

天を仰ぎゴジラは咆哮する。雄々しく高らかに、己が存在をこの新世界に誇示するよ
うに。

何者にもまつろわぬ王の咆哮は、以前と変わらず地海空、全ての領域に轟いた――。

#02 撃震—I r r e g u l a r—①

『ガアアアアオオオオオオオオオオッ!!』

海から突然現れ、聞くもの全てを震え上がらせる咆哮を轟かせた赤黒い影に、指令室は困惑の渦に呑み込まれていた。

【クリス】

「な、何なんだよ、あれは!？」

【緒川】

「アウフヴァツヘンを放つということは、あれも聖遺物なのでしょうか?」

【あおい】

「こちらのデータに該当するパターンはありません!」

【弦十郎】

「俺達の管理下に無い未知の聖遺物だということのか?」

【マリア】

「まさか、《ネフィリム》のような自律行動型?」

【フロンティア事変】で猛威を振るった、自らの意思で行動し他の聖遺物を喰らう悪鬼

の如き完全聖遺物。

現れた謎の存在は、確かに《ネフィリム》と類似した部分が見られたが、次の藤堯の報告でその予想は覆される。

【藤堯】

「対象から生体反応を検知！」

【未来】

「じゃあ、あれも誰かが変身したシンフォギアなんですか!？」

【翼】

「触れば切れるような殺気に、戦慄すら覚える底知れぬ怒り。これはまるで——」

【エルフナイン】

「僕の持ち得る知識の中にも、似たような事象があります」

【響】

「……暴走」

全員の視線が響に集中した。

響は、元々正規のシンフォギア適合者だったわけではない。過去のある事件で重傷を負った折り、当時の装者である天羽奏の《ガングニール》の破片と肉体が融合したことで生まれた特殊な適合者であった。

聖遺物との融合体となった響は、翼やクリスをも凌ぐ適合係数を叩き出した。しかし、それは同時に聖遺物の持つ闇の部分も引き出すことになった。

破壊衝動に突き動かされ、闘争本能のままに味方にも牙を剥く。赤黒い殺意の波動に包まれたその姿を、シンフォギアを知る者はこう呼んだ。

——暴走、と。

響は自分の胸に手を当てる。心臓そごに、もう奏の忘れ形見は無い。

親友の未来のお陰で聖遺物は取り除かれ、近い将来生きた聖遺物と化すという呪いは消え去った。

しかし、暴走に吞まれた時のどうしようもない怒りと哀しみは、今も胸の奥に楔となつて残っている。

【響】

(……あなたも私と同じなの?)

複雑な心境を抱いて、響はモニターを見つめる。咆哮を終えたゴジラは、低く唸りながら視線を巡らせていた。

まるで何かを探しているように。

そして、その視線がアルカ・ノイズとミカを捉えた時、

『ゴアアアア!!』

猛烈な敵意を込めた威嚇を放った。

【ミカ】

『な、何だ、コイツ!?こんなのがいるなんて聞いてないゾ!』

射殺するような視線に、オートスコアラー自動人形であるミカさえもたじろぐ。

ゴジラは興奮した様子で尻尾を振り回し、体勢を低くする。そして、尻尾が抉れたアスファルトを打ち砕いたのを合図に、ミカとアルカ・ノイズに向かって猛然と突進を開始した。

【ミカ】

『コイツやる気か!?オマエら、まずはアレから解体だゾ!』

ミカの命令に従い、アルカ・ノイズは壁のように隊列を組み、謎の存在を迎え撃つ構えを取った。

パイプオルガン型が最前列に並び、頭部の発射管から分解能力を持つ弾丸を斉射する。弾幕を躲すには上に逃げるしかない。

しかし、ゴジラは逃げる素振りを見せず、迫り来る弾幕に向かって驀進し続けた。

【マリア】

「避けない!?!」

【エルフナイン】

「いくら暴走状態のシンフォギアでも、アルカ・ノイズの干渉破砕効果には耐えられませんか!」

エルフナインの言葉に、誰もが赤黒い暴走の鎧が剥ぎ取られる姿を思い浮かべた。

だが、その予想は大きく裏切られることとなる。

アルカ・ノイズの弾丸が命中すると、その部分が風に拐われる霞のように揺らめくも、すぐさま新しい影が被弾部分を覆い、被弾前と何ら変わらない状態に戻ったのだ。

【響】

「効いて、ない?」

【エルフナイン】

「そんな!?有り得ないです!」

アルカ・ノイズの力をこの中の誰よりも知るエルフナインにとって、目の前で繰り広げられた光景はまさに青天の霹靂だった。

謎の存在は、尚も全身を被弾しながらも全く怯まず、立ち並んで液晶ディスプレイのように光る異形の壁に激突した。

『ガアアアアアアッ!!』

敵の布陣を突き崩し、周囲を埋め尽くす雑兵達を引き裂き、噛み砕き、踏み潰す。アルカ・ノイズも解剖器官による攻撃を繰り返すが、パイプオルガン型の時同様、全く効

果がなかった。

複数の人型の個体が、腕を触手状にしてゴジラの首や腕、背鰭に巻き付け動きを封じようとする。しかし、ゴジラの怪力はそれらを容易に振り払うと、その場で身体を回転させ、長い尻尾を更に伸ばしながら振り抜いた。

風切り音を発しながら、尻尾はしゃがんだままの調の頭上を通過するようにアルカ・ノイズを残さず薙ぎ払った。

【藤堯】

「強い……！」

【弦十郎】

「アルカ・ノイズを全く寄せ付けないとは……」

突然の開戦から約2分。その僅かな間にこれまで苦戦を強いられてきた敵を殲滅したゴジラに、S・O・N・Gメンバーは舌を巻く。

だが、その瞳が調を捉えた瞬間、指令室に再び緊張が走った。

【未来】

「に、逃げて、調ちゃん！」

未来が叫ぶも、調は恐怖のあまり身体を震わせるだけだった。

アルカ・ノイズすら屠る存在に襲われれば生身の少女などひとたまりもない。まして

や、暴走により見境がない可能性が高いのだから尚更だ。

しかし、ゴジラは思いも寄らない行動に出る。

調の存在を認識したにも関わらず、襲いかかるどころかその場で反転、少し離れた所に立つミカと対峙した。……まるで、その背に調を庇うように。

【あおい】

「調ちゃんを……守ってる？」

【弦十郎】

「暴走状態なのに、意思があるとしても言うのか？」

【翼】

「……何にしても好機だ。二人の救出に向かうぞ、雪音！」

【クリス】

「えっ？お、おうっ！」

翼とクリスが強化型シンフォギアを手に指令室を出ていく。皆がその背中を見送る間も、響は自分と似て非なる存在から目を離さなかった。

海上自衛隊基地敷地内――

【調】

「……私を、守ってくれるの?」

眼前に背を向けて立つ謎の存在に、調は思わず呟いた。聞こえたのか、赤黒い影は肩越しに振り返り、視線が交錯する。

底知れない畏怖を感じさせる黄色い瞳。でも、自分に対して抱いているものが敵意では無いことだけは、調にも理解できた。

話せば通じるかとも思い、震える身体に濁を入れて口を開こうとした時、視界の隅に赤い光が映る。

【調】

「危な——」

『ガッツ!?!』

叫ぼうとした時には、既に赤い光がゴジラの側頭部に命中していた。派手な音を立てて落ちた物体は、ミカ的主要武器である高圧縮カーボンだった。

【ミカ】

「余所見していると狙い撃つって言ったはずだゾ〜?」

ミカは熊手のような手をわしやわしやと動かしながら、相変わらずの調子で宣った。

しかし、頭部に命中したにも関わらず、ゴジラは軽く頭を振る程度でダメージを負った様子は無かった。逆に、自分に手を出した愚か者を鋭い目付きで睨み付ける。

【ミカ】

「オオツ！オマエ丈夫だな！それでこそ遊び甲斐があるゾッ！」

ミカは楽しげに笑いながら両手からカーボン弾を連射した。

ゴジラは調を庇ってか、その場を動かさず攻撃をひたすら受ける。殆どダメージは無いが、流石に顔面に当たった際は、鬱陶しそうに唸りながら首を振る。

その僅かな隙を狙い、ミカはカーボンを乱射しながら近付くと、

【ミカ】

「ウリヤアアアアア！」

切歌を倒した時のように、腕を突き出しながらパイバンカーの如く高硬度のカーボンを至近距離で射出した。

直後、何かが割れるような嫌な音が辺りに響く。

ミカは、自分の攻撃が相手の顔を粉砕したと思い、嗜虐的な笑みを浮かべる。……しかし、その笑顔はすぐに引き攣ることになった。

完全な不意打ちにも関わらず、ゴジラは放たれた一撃を口で受け止めていた。そればかりか、歯に相当する赤黒い霧がカーボンに食い込み、大きな亀裂を走らせている。

【ミカ】

「ナニヤツ!？」

驚くミカの前で、ゴジラはギアすらも破壊するカーボンを強靱な顎で噛み砕いた。

接近戦は危険と判断し、ミカは後ろに飛んで距離を取ろうとするも、それを見透かしたゴジラはカーボンを吐き捨てながら距離を詰め、右腕を叩き付ける。

【ミカ】

「又ギツ!？」

間一髪、ミカは攻撃を受け止めた。ゴジラはすかさずもう一方の腕を叩き付けるも、戦闘特化型というのは伊達ではなく、ミカはもう一方の攻撃も熊手のような手で受け止める。

ゴジラとミカは互いの手を組合せ、力比べの格好になった。ミカは渾身の力で振じ伏せようとするが、ゴジラの前では自動人形最強のオートスコアラパワーでさえ子供の抵抗に等しい。

体格でも大きく勝るゴジラは、上から思い切り力をかけ、ミカを捻り潰そうとした。

【ミカ】

「ギギギギギ?!……なあんつつて!」

押し込まれ苦しげな表情を見せていたミカが、突如邪気に満ちた笑みを浮かべた。直後、ミカの両手から炎が噴き出し、密着していたゴジラの身体を大火に包んだ。

【ミカ】

「ニハハアツ!引つ掛かったゾ〜!このまま骨まで黒焦げにしてやるゾ〜!」

【調】

「そんなんっ……」

自分を助けてくれた存在が炎に包まれ、調は悲痛な声を漏らす。しかし、彼女に助けられる術はなく、ただ黙って勢いを増す炎を見ていることしかできなかった。

自分の炎に焼き尽くせぬものは無い。ミカは勝利を確信して大声で笑い出した。

……だが、彼女は知らなかった。自分が相手にしている存在が、どのようにして生まれたのかを。

【ミカ】

「アハハハハ、は……あ？」

笑っていたミカは、何かがひしやげるような音に首を傾げた。直後、掌から放射していた炎の勢いが急に弱まる。

自分の意思に反した事態に目を見開き困惑の声をあげようとするが、炎の中から現れたものを見て大口を開けたまま固まった。

目の前にいたのは、変わらず赤黒い影に全身を覆われた謎の存在。しかも、炎が効いている様子が全く無く、逆に規格外の握力でミカの腕を握り潰していた。

核の炎にさえ耐え抜き、その放射能で不死身の肉体を手に入れたゴジラにとって、錬金術が生み出した戦闘兵器の火炎も微風てよかせに等しかった。

『グルウアアアッ!』

ゴジラは、壊れた人形のように口をパクパク開閉させるミカの両腕を引き寄せ、腹部に強烈な前蹴りを見舞った。

【ミカ】

「ゲフェアアアアアアア!?!」

悲鳴に至るまで奇抜な人形は、両腕をもぎ取られ、本体もゴロゴロと転がりながら自分が破壊した施設の残骸に突っ込んでいった。

『ガアアアアアアアオオオオオオウウンツ!!』

ゴジラはもぎ取った機械の両腕を放り捨てると、天に向かって勝利の咆哮を轟かせた。

【調】

「勝った、の?」

調はにわかには信じられなかった。

自分と切歌が協力して挑んで軽くあしらわれた強敵に、力任せの肉弾だけで完勝してしまつた。暴走を差し引いても、自分達とはまるで比較にならない。

【切歌】

「調!」

目の前の存在は、本当に自分達と同じ人間なのかすら疑問に思っていると、傷付いた身体をおして切歌が自分の元に駆け寄ってきた。

迫り着くなり、切歌は調を抱き締めながら両目から大粒の涙を溢れさせる。

【切歌】

「調……、調〜！」

【調】

「切ちゃん……？」

【切歌】

「良かったデス……、無事で。もう、ホントにダメかと思つたデスよっ」

【調】

「……うん。ゴメンね、切ちゃん」

自分の為に泣いてくれる親友に、調も涙を浮かべながら、互いに生あることを確かめるように、抱き合った。

ミカを撃破したゴジラは、最早興味は失せたと宣言ばかりに鼻を鳴らすと、後ろで抱擁を交わす二人の少女の方へ身体を向けようとする。しかし、半身が後ろを向きかけたところで、何かを感じたように動きを止め、蹴散らした人形が埋まる瓦礫の方へ向き直った。

すると、突然瓦礫の山が宙に舞い上がった。瓦礫を巻き上げたのはで緑色の竜巻で、吹き荒れる風と音に調と切歌の二人は驚いて身体を固くする。

ゴジラも最初は空中に注目していたが、やがて何かに気付いたように竜巻の中心に目を向けた。

視線の先、竜巻の中心部には、地べたに座り込むミカと舞踏家のようなポーズでスカート裾を摘まみながら剣を掲げる新たな自動人形オートスコアラの姿があった。

【ファアラ】

「任務が終わって気になって来てみれば、何だかともないことになっているわね」

現れたのは、ロンドンで翼を襲った自動人形オートスコアラ、ファアラ・スーフ。風を操る能力と、『刀剣』と定義される物ならば何であろうと問答無用で破壊する概念武装、《ソードブレイカー》を有する厄介な敵であった。

【ミカ】

「……助かったゾ」

【ファアラ】

「情けない。……と言いたいところだけれど、成る程、アレは想定外ね」

ファアラはミカを一瞥すると、自分達を鋭い視線で射抜く赤黒い影に目を向けた。

【ファアラ】

「ミカ、アレは一体何？」

【ミカ】

「……そんなの、こつちが聞きたいゾ」

【ファアラ】

「でしようね。あなたがそこまでやられるなんて、只者では無いのは確かでしょうけど」

『グウルウウウ……』

今にも飛び掛かってきそうな謎の存在の様子に、ファアラは懐から赤いカプセルテレポトジエムを取り出す。

【ファアラ】

「悪いけれど獣ケダモノの相手をする気はないの。一度退くわよ、ミカ」

【ミカ】

「……分かったゾ。おいつ、オマエ！次会ったら、必ず解体してやるゾ！」

捨て台詞の後、ファアラはテレポトジエムを足許に落とした。2体の人形のいる場所が赤く発光し、空間転移のゲートが開く。

逃走を図っていることに感付いたゴジラは、2体に襲いかかろうとするが、転移の間際、ファアラは巻き上げていた瓦礫をゴジラに向けて飛ばした。

ゴジラは迫り来る瓦礫を尻尾を振るって叩き落とす。しかし、全ての瓦礫を排除した

時には、既に2体の自動人形は姿を消した後だった。

オートスコアラ

【切歌】

「終わった、デスカ？」

オートスコアラ

自動人形の撤退を見て、切歌は呟いた。

アルカ・ノイズも既に一掃され、基地を自分達を襲う脅威は去った。……目の前の存在が、本当に自分達の味方であるのなら。

調を庇った姿は切歌も見ていた。しかし、相手がシンフォギアの暴走体の可能性があの以上、安易に近付くのは危険極まりない。

迷った末、切歌は調の手を引き、静かにその場を離れるため立ち上がろうとした。

その時、自分達に背を向けて佇んでいた存在に変化が起きた。身体を覆う赤黒い霧のような物がザワザワと蠢き、まるで空を覆い尽くす規模の編隊を組んだ鳥のような動きで、膨張と収縮を繰り返す。

そして、その形が丸い球体状になった瞬間、赤黒い霧は粒子となって四散した。

赤い粒子が輝きながら舞い散る。そんな美しい光景が繰り広げられる中、調と切歌はある一点を見て硬直した。

赤黒い影が立っていたまさにその場所。だが今そこには、明らかに人間と思われる浅

黒い肌をした白髪の男性が立っていたのだ。……しかも、着衣を一切纏わぬ全裸の姿で。

【切歌】

「な、な、な……?!」

恥ずかしさのあまり、切歌は顔を真っ赤にして声にならない音を漏らし、調に至っては絶句している。

全裸の男は彼女達の方へ振り向くと、ゆっくりと歩み寄ってきた。

切歌は手で顔を隠しながらも、時折チラチラと指の間から男の方を覗き見る。男は調達の前に立つと、獣を思わせる瞳で二人をジッと見下ろしてきた。

【調】

「——ッ！あ、あの……?」

漸く我に返った調は、胸や下半身を隠しながら声を上げる。すると、突然男は身を屈めると、胸を隠していた調の右腕を掴み、自分の方へ引っ張った。

【調】

「あっ!」

【切歌】

「な、何するデスカ!」

非力な調ではまるで抵抗できず、息がかかるくらいの距離に引き寄せられる。戸惑いながらも切歌が抗議の声を上げるが、男は調の顔を凝視したまま離さない。その様子はまるで観察をしているかのようだった。

程なくして、無表情だった男の顔には焦りの色が浮かんだ。信じられないと言った様子で調の顔を見回し、更には掴んだ腕に顔を近付け、クンクンと鼻を鳴らす。

【調】

~~~~ツ／／／／

切歌はどうしていいか分からずアワアワと狼狽え、調は羞恥に震え涙目になりながら顔を背ける。しかし、男は尚も納得のいつていない様子で、今度は調の顔に自らの顔を近付けようとした――

【クリス】

「ぬぁにやってんだ、このすつとことつこい!!」

【??】

「ガアッ!」

突然の怒声が異様な空気を切り裂いた。直後赤いブーツが男の顔面にめり込み、その身体を吹っ飛ばす。

地面を転がった後、動かなくなった男を見て切歌と調は啞然としていた。

その二人の間に、復活したイチイバルを纏ったクリスが降り立った。

【調】

「クリス、先輩？」

【切歌】

「強化型シンフォギア、完成したんデスね!?!良かつ——」

【クリス】

「バカツ!!」

切歌の安堵の声はクリスの怒号に掻き消された。ビクツと肩を竦ませる二人を、クリスは怒りに満ちた目で睨み付ける。

【クリス】

「お前等！勝手な真似しやがって！」

捲し立てる勢いのまま手を上げる姿に、調と切歌は目を固く瞑った。しかし、直後に二人が感じたのは叱責の痛みではなく、優しい温もりだった。

恐る恐る目を開けると、肩を震わせながらクリスが自分達を抱き寄せていた。

【切歌】

「あ、あの……?」

【調】

「せん、ばい？」

【クリス】

「心配させんなよつ。……本気で、もう、ダメだつて思ったんだぞ？間に合わないつて、……くっ」

【翼】

「……だが、無事で何よりだ」

嗚咽混じりに絞り出すクリスに続いて、空から言葉と共に降ってきたのは、生まれ変わった天羽々斬アメノハバキリを纏った翼だった。

【切歌】

「え、えと……？」

【翼】

「雪音。気持ちは分かるが、二人が困っているぞ」

【クリス】

「う、うるせえな！今は、ダメなんだよつ！」

後輩に涙を見せまいとするクリスに、翼は呆れたような、それでいて優しい笑みを浮かべた後、調と切歌に向き直った。

【調】

「翼さん……」

【翼】

「……言いたいことは山程ある。だが、まずは二人の無事を喜ばねばな」

そう言つて、翼は調の頭に手をやる。

翼の手からもクリス同様、優しい温度が伝わつてきて、二人が心から自分達を心配してくれたことを身に染みて理解した。

【調】

「……ごめんなさい」

【切歌】

「……デス」

シユンと俯いた二人を見て翼は手を離し、クリスも離れながら背を向けて目をゴシゴシと擦つた。

【翼】

「さて、二人の無事は確認できた。……が、流石にやり過ぎだぞ、雪音」

翼は調と切歌から視線を外し、クリスが蹴り飛ばした男を仰ぎ見た。本気は出してないだろうが、生身の人間をシンフォギアを纏つた状態で攻撃するなど、下手をすると相手を殺してしまいかねない。

自分を嗜める翼に、クリスは思い出したように苛立ちを滲ませた表情を浮かべる。

【クリス】

「当然の罰だろ。無抵抗な女に手を出そうなんて下衆野郎は——「……ぐつ？」——な  
!？」

くぐもった声を聞き、クリスは慌てて声のした方を見て目を疑った。

自分の蹴りをまともに受けた男が、よろめきながらも立ち上がったのだ。

【クリス】

「う、そ……だろ？」

【翼】

「アレを受けて立ち上がるのか!？」

クリスと翼が動揺していると、男は二人の方へ振り返った。

【??】

「ヴウウ……ガアアアアッ！」

男の視線は今度は調や切歌ではなく、クリスと翼を捉えると、興奮した様子で猛然と突進してきた。

【クリス】

「こいつ!？」

【翼】

「雪音、任せろ！——ハッ！」

アームドギアのクロスボウを構えたクリスを制し、翼は足のアーマーから短剣を取り出すと、突進してくる男へ向かって投擲した。

短剣は、全く意に介する事なく突進を続ける男の脇を通過し、地面に突き刺さる。だが、これはミスなどではなく、

【???】

「ガッ!?……ギ、ギ?」

男は走る姿勢のまま、不自然にその場で静止した。

忍法、《影縫い》。

その名の通り対象の影を縫い付けることで動きを封じるといふものだが、シンフォギア固有の技ではなく、風鳴一族の守護を生業としていた緒川家の編み出した術である。対象に影ができていなければならないため光源下でしか使えないが、その汎用性の高さから緒川に師事し習得した技であった。

【翼】

「これなら動けまい。この者のことは司令に任せ、私達は二人を——ッ!」

常人にこの術を破ることはまず不可能。そう思っていた翼は、男の様子を見て目を



疑った。

男は無理矢理短剣の楔から抜け出ようともがいていたのだ。筋肉質な身体に血管を浮き立たせながら徐々に身体が動き、刺さっていた短剣が地面から抜けかかる。

【??】

「うがああああああつ!!」

【翼】

「まずい!雪音!」

【クリス】

「チイツ!」

雄叫びと共に《影縫い》を強引に突破した男に、翼とクリスは瞬時に近寄ると、

【翼】

「破あ!」

【クリス】

「こんの、スクリューボールがあ!」

刀の頭部分とブーツ状のアーマーで、それぞれ後頭部と腹部に殴打と蹴撃を食らわせ

た。

【??】

「ガ、ハッ……！」

痛撃をノーガードで受け、男は流石に耐えられずその場に倒れ伏した。

【クリス】

「……何なんだよ……こいつ」

常軌を逸した男のタフさに、クリスは肩で息をしながら呆然と眩いていた。

## #02 撃震—I r r e g u l a r—②

チフオージユ・シャトー——

世界の解体を目論む鍊金術師、キャロル・マールス・デインハイムの根城。その薄暗い玉座の間に、今回の事件の首謀者であるキャロルとその配下の自動人形<sup>オートスコアラ</sup>4体が集結していた。

ミカ以外の自動人形<sup>オートスコアラ</sup>、フアラ、レイア、ガリイの3体は自分達の台座の上でそれぞれ個性的なポーズで待機している。

一方、ゴジラとの戦闘で中破したミカは、主であるキャロルによつて破損状況の解析と戦闘記録の譲渡を行っていた。

【キャロル】

「お前がここまでやられるとはな、ミカ」

【ミカ】

「うう……。面目無いゾ」

【キャロル】

「……まあ良い。コレはオレも想定外<sup>イレギュラー</sup>だった」

珍しくしおらしい様子で項垂れるミカに、赤いワンピースを着た少女、キャロルはそう答えた。

記録に残っていた謎の赤黒い影。数百年に渡って世界を探究してきたキャロルにもそれが何なのか分からなかった。

しかし同時に、ハズレ装者はおろか、これまで倒してきた正規装者をも上回る力で自分の最高戦力であるミカを打ち負かしたこの存在に強い興味を抱いていた。

【キャロル】

「奴等の隠し玉……というわけではなからう」

【フアラ】

「確かに、見たところ装者側も戸惑っていたみたいでしたわ」

【レイア】

「敵ながら派手にやってくれる。……面白い」

キャロルの予想に同調するフアラに続き、ジャズダンサーを思わせる服装のレイア・ダラーヒムが映し出させられた戦闘記録を見て呟く。

黄色をメインカラーとする彼女は、トータルバランスに優れた万能型。何事にも派手に拘る彼女にとって、ミカに完勝したゴジラはお気に召したらしい。

【ミカ】

「アイツは私の獲物だゾ！」

【キャロル】

「お前の修復には時間を要す。暫くは大人しくしている」

【ミカ】

「くっ……、分かったゾ」

【キャロル】

「……ガリイ」

【ガリイ】

「はあい♪」

キャロルはムキになるミカを嗜めた後、青を基調とした少女型自動人形オートスコアラを指名する。

ガリイ・トゥーマーンは、見た目はメイドに似た服を着た可憐な少女だが、性格は悪辣で相手の精神を煽るような言動が目立つ。メインカラーの青に因み、水を操る能力に長けているが、彼女には他にも特化した能力があった。

【キャロル】

「現行の任務は中断。人間共から《想い出》を掻き集めろ」

【ガリイ】

「……尻拭いってわけですか」

【キャロル】

「不服か？」

【ガリイ】

「いいえ、滅相も無いですよお」

ガリイは軽く毒を吐いた後、慇懃無礼な様子で一礼する。

《想い出》とは、その名の通り記憶や知識のことで、錬金術を扱うのに必要なパワーソースとなる。

本来は生きていく中で自然と蓄積されていくものだが、戦闘特化型のミカを除くオートスコアラ自動人形は、人間の粘膜から強制的に《想い出》を採取することができる。

その中でもガリイは、採取した《想い出》を分配する能力を備えており、自力で《想い出》を補給できないミカへの供給を始め、キャロルの計画に必要なエネルギーを集める為に必要不可欠な存在であった。

【ガリイ】

「ではではガリイちゃん、頑張って行って参りま〜す♪」

バレリーナのように爪先立ちしながらスカートの端を持ってお辞儀をすると、ガリイは転移の光の中に消えた。

それを見送ったキャロルは一つ鼻を鳴らすと、空中投影したスクリーンに敵のいる場所を表示する。

【フアラ】

「いかがされるのですか？ マスター」

【キャロル】

「……決まっている。計画が狂ったのなら修正するまでだ」

思わぬ邪魔が入ったことで、目的の一つである電力施設の破壊が為し得なかった。今度こそはそれを為し、『真の目的』も達成させる。キャロルはそう心に誓い、行動を開始した。

S. O. N. G 移動本部 指令室——

ミカの襲撃から一夜明け、戦闘による怪我とLINKEERによる負荷のため医務室で治療中の調と切歌を除くS. O. N. Gメンバーが一堂に介していた。昨日の戦闘による損害の報告と、闖入者に関する調査報告の為であり、装者達は一樣に緊張した面持ちであった。

【弦十郎】

「先ずは施設の損害報告。藤堯！」

【藤堯】

「はい。人的・物的共に相当な被害が出ましたが、発電施設を含む基地機能は通常の50%〜60%で稼働中。現在も復旧作業が行われています」

【マリア】

「調と切歌の頑張りのお陰ね」

【弦十郎】

「……そうだな。だが、命令違反には違いない。皆も無茶や勝手な行動は慎むようにな」  
あの後、本部の医務室に運び込まれた調と切歌には、弦十郎を始め、翼やクリスからも改めて叱責の嵐が飛んだ。二人はそれだけでも大分堪えて只でさえ小さい身体を縮こませていたが、それ以上に効いたのは響や未来、マリアの泣いた顔だった。

自分達のベストを尽くした方法が、大切な人達を心配させ、涙を流させたことに二人はかなり反省しているようだった。

【緒川】

「基地の方は、自衛隊に任せておいて問題ないでしょう。問題は……」

【弦十郎】

「あの男の方だろうか。翼とクリスくんが捕縛した後、とりあえずこちらの医務室に収容したんだが——」



弦十郎が藤堯の隣のあおいに目を向けると、彼女は頷き手元の端末を操作した。

【あおい】

「収容後、念のため拘束をしてからメデイカルチェックを行ったのですが、ベッドに固定した途端目を覚まして暴れ始めまして……」

メインモニターに録画映像が映し出され、獣のように叫びながら拘束具を引き千切ろうとする男の姿が記録されていた。

【あおい】

「拘束具が破られることを危惧した医師が鎮静剤を投与したのですが、大人でも瞬時に昏倒させる代物を投与しても効果が出ず、通常の5倍量を投与して漸く鎮静化しました」

【未来】

「5倍って、大丈夫なんですか!？」

過ぎた薬は毒になる。未来の懸念は尤もであった。

【あおい】

「勿論、普通ならまずいわ。……でも、彼の場合、それだけの量を投与しても眠るまで暫く時間を要した程なのよ」

【緒川】

「プロのエンジニアでも、これ程の薬物耐性を身に付けるのは不可能でしょうね」

【弦十郎】

「だが、お陰で少し話をする事ができた」

【翼】

「話って……、直接お会いになったのですか？」

驚く翼に、弦十郎は静かに頷いて答え、その時のことを語り出した。

……

……

……

【医師】

『危険です、司令！意識は混濁を始めましたが、まだ薬が効ききつた訳ではありません！』

【弦十郎】

『だが、大分大人しくなったんだらう？なら話をするなら今だ。目が覚めてからだとまた暴れるかも知れないからな』

弦十郎は医師の制止を振り切って医務室のドアを潜る。一面白一色の部屋の中央には大型のベッドが鎮座し、その上に男は横たわっていた。

『??』

『くう……ぐつ』

弦十郎の入室に気付いた男は、金属製の拘束具を軋ませ、唯一自由に動く首を入り口の方へ巡らせた。

弦十郎と男の視線がぶつかる。薬の影響で目が若干虚ろであったが、強い敵意の光は少しも揺らいでいなかった。

『??』

『気分は……良いわけ無いよな』

自分で言つて苦笑しつつ、弦十郎はベッドのすぐ横の椅子に腰掛けた。その間も、男は威嚇の唸りを上げて弦十郎を睨み付ける。

【弦十郎】

『そう邪見にするな。俺は話をしに来ただけだ』

そうは言つたものの、弦十郎は一抹の不安を抱いていた。

これまで調や翼からも男が言葉を発した報告を受けていない。まさかとは思うが、もし人語が分からなければ、事態はよりややこしいことになる。

だが、弦十郎の不安は直ぐ様杞憂となった。

『??』

『はな、し?にん、げんと、はなすし、たなど、もたん』

薬のせいで呂律が回っていないなかったが、男は確かに日本語でそう告げてきた。

【弦十郎】

『……これは手厳しいな。だが、君だって人間だろう?』

面食らいながらも問い返すと、

【??】

『おれが、にん、げん?……ちが、うーきさまら、といっしよ……するなっ』

憎しみの籠った言葉が返ってきたが、言い終わるなり男は瞼を開いたり閉じたりを繰り返す。

【弦十郎】

『薬が効いてきたな。続きは起きてからにしよう。……最後に、名前を教えて貰えるか

?』

【??】

『なま、え……?』

【弦十郎】

『……ああ。分かるか?』

【??】

『お、れ…………は…………』

【??】

『クロ、ガネ…………。クロガネ、ゴウ…………』

ハッキリと自らの名を告げた直後、男は静かに眠りに就いた。

……

……

……

【翼】

「クロガネ…………ゴウ？」

【クリス】

「先輩？知ってんのか？」

【翼】

「いや…………だが、しかし——」

男の名前を聞き、首を傾げた翼にクリスが訊ねるも、翼は要領を得ず言葉を濁していった。

【藤堯】

「名前だけしか分かりませんが、外見年齢と特徴を基にあるデータベースを検索

したところ——」

【響】

「あつたんですか？」

藤堯は頷いた後、メインモニターを切り替え、検索結果を表示する。そこには、拘束された男と髪色以外瓜二つの人物が映し出されていた。

【藤堯】

「黒銀轟くろがねこう。日本人で、大戸島に在住していた18歳の青年です」

【マリア】

「大戸島？」

【緒川】

「小笠原諸島に存在する島の一つです」

【翼】

「大戸島……もしや」

【クリス】

「やっぱり知ってんのか？」

クリスの二度目の問いに、翼は頷いた。

【翼】

「ああ。と言っても言葉を交わしたことがあるわけでは無いがな」

翼は当時を思い出すように瞑目しながら語り出す。

【翼】

「あれはまだ立花や雪音と出会う前、私がリディアン音楽院に在学していた頃の話だ」

「……あの日は、所属事務所での打ち合わせを終えて二課に向かおうとしていた。その時、偶然通りかかった部屋から聴こえてきた歌に足を止めたんだ」

翼が部屋を覗くと、そこでは自分よりも年上の青年がギターを片手に熱唱していたという。

【翼】

「その日は、一般公募のオーディションが行われていたらしい。その青年もオーディションを受けに来た一人だったのだが、……お世辞にもプロになれるだけのレベルがあるとは言えなかった」

そう言つて翼は苦笑する。

しかし、当時の翼はその歌を最後まで聴き続けたそうだ。

【翼】

「粗削りだったが、青年の歌には人を前向きにさせるような真摯な想いが込められていた。その想いに私も心打たれてな。オーディション担当者から彼の素性を聞き、いつか

夢が叶うことを願っていた」

【マリア】

「そんな事があつたのね……」

マリアが感慨深げに呟く。アーティストである彼女にも少なからず思うところがあつたようだ。

【未来】

「あの、オーディションの結果はどうだったんですか？」

【翼】

「後々聞いたところ、やはり技術面で落選となつたらしい。だが、有望な人材だと評価する審査員もいて、諦めずにまた応募してくることを期待していたようだ」

【緒川】

「……しかし、その後彼が現れることは無かつたそうです」

【響】

「えっ？ どうして……」

【あおい】

「……記録によれば、オーディションの直後、漁師をしていた父親が海難事故で他界されたりしいわ。彼の家には病弱な母親と借金が残つた。……これは推測だけど、それらが



原因で音楽の道を諦めたのでは無いかしら？」

【響】

「そんな……」

必死に追いかけていた夢を途中で放棄せざるを得なかった。それは、不運という言葉で片付けるには、あまりに酷な現実だった。

指令室に重苦しい空気が漂う。そんな空気を打破するように、クリスが本題に切り込んだ。

【クリス】

「でも、何でそんな奴が海からあんな姿で現れたんだよ!？」

【マリア】

「……それと最初から気になっていたのだけれど、彼の素性に行き着いたデータベースって何？」

クリスと彼女に追従したマリアの問いに、源十郎達大人は複雑な顔をした。装者達は彼等の思うところが理解できず首を傾げるが、唯一未来だけが何かに思い至り、顔を青ざめさせた。

【未来】

「……思い出した。大戸島って確か——」

未来はそこまで言って弦十郎や緒川を見る。彼等の顔は、自分の考えが的を得ていることを暗に示していた。

【あおい】

「……未来ちゃんの考えている通りよ」

【弦十郎】

「——半年前の「ルナアタック」。その時に大戸島は全滅しているんだ。……大気圏で燃え尽きなかった月の破片によってな」

弦十郎の言葉は、響・翼・クリスに大きな衝撃を与えた。絶句する3人に、大人達は更に事実を明かしていく。

響・翼・クリスの3人は、月の破片落下を阻止した後、暫くの間消息不明となっていた。その間に、世界各地では大気圏を突破した小規模な破片による被害が多発したのだ。

大戸島も、そんな被害を受けた地域の一つだった。

【藤堯】

「……小笠原諸島も大きな被害を受けた。その中でも、落下点から最も近かった大戸島の被害は最悪だった」

【あおい】

「衝撃によつて発生した高波は島全体を呑み込んだわ。……2000人の島民の内、死亡が確認できたのは1割にも満たず、残り9割は現在も行方不明のまま」

【マリア】

「それでは、データベースっていうのは——」

【緒川】

「……ええ」

「政府が把握している、被災行方不明者リスト、です」

【響】

「そんな……」

【未来】

「響っ!」

そこまで聞いて、響はショックのあまり座り込んでしまった。未来が寄り添うも、その表情は悲痛に染まっていた。未来が寄り添うも、その表情は悲痛に染まっていた。

無論響も、あの戦いで決して少なくない犠牲が出たことは知っていた。しかし、こうして現実を突き付けられると、どうしようもなく無力感が込み上げてくる。

それは翼とクリスも同様で——

【クリス】

「クソ……。あたしらがもつと上手くやってりや……。！」

【あおい】

「そんなこと言わないで。もし破片が巨大なまま落下していたら、被害の規模は比較にならないかったわ」

【翼】

「それでも、至らぬ剣と罵らずにはいられない……。！」

【緒川】

「翼さん……。！」

悔やんでも後の祭り。それでも、あの時もつとできることがあったのではないか？ 装者3人はそう考えずにはいられなかった。

そんな彼女達を励ますように、自身も世界を巻き込む争乱の渦中にいたマリアが静かに口を開く。

【マリア】

「……。それでも、彼は戻ってきたわ。君達の救った世界にね」

【響】

「マリアさん……。！」

【未来】

「そうだよ、響！響達が頑張ったお陰で、助かった人はたくさんいるんだよ！私だって響に救われたんだから！」

マリアに続いて、親友としてずっと響を見守ってきた未来も彼女達のしたことは無駄じゃないと訴える。

「救われた」、その言葉で響達の表情から僅かだが影が薄れる。それを見計らい、弦十郎は報告を続けるよう藤堯に促した。

【藤堯】

「……彼が大戸島唯一の生還者であることは変わらない。……ただ」

【翼】

「……ただ？ただ何です？」

詰問する翼に、藤堯は迷いながら慎重に言葉を紡いだ。

【藤堯】

「……彼の身体には、その、普通の人間とは異なる部分が多々見られました」

さっきのショックも冷めやらぬ内に告げられた事実、響達は衝撃を隠せなかった。

【クリス】

「ど、どういうことだよ！普通とは違うって！？」

【エルフナイン】

「それは僕からお話します」

クリスの声に、これまで沈黙を守っていたエルフナインが手元の端末を操作した。メインモニターが切り替わり、医務室で拘束されたまま眠る男、黒銀轟の姿と各種データが表示される。

【エルフナイン】

「表示されているのは、精密検査を行った結果です。体組織はほぼ人間と変わりませんが、筋肉や骨の強度は常人を遥かに超えています」

【翼】

「それは、鍛練の末身に付いたものではないのか？」

【エルフナイン】

「弦十郎さんや緒川さんのように特別な鍛練を積んできた方々なら話は別ですが、薬物耐性を含め一般人として生活してきたこのの方が到達できるレベルではありません」

説明を聞く内に、不穏な空気が指令室に流れ始める。エルフナインは一体何を告げようというのか？

【エルフナイン】

「更に血液検査の結果、赤血球や白血球といった血中成分の濃度が人間のレベルを超えている事が明らかになりました。これは、鍛練等でどうこうできるものではありません」

ん」

「……そして極めつけは、この方の身体には、人間のものとは別の、未知の細胞が存在しているんです」

「……未知の細胞!?!?!」

予想だにしなかった言葉に、装者及び未来は驚きの声を上げた。

【響】

「ど、どういうこと!?!」

【エルフナイン】

「……詳しく調べて見ないことには何とも言えません。ただ分かったのは、この細胞には異常な……不死と言っても差し支えない再生能力があるという点です」

【マリア】

「不死?」

【エルフナイン】

「はい。血液中から抽出後、様々な外部刺激を与えてみましたが、傷付いた直後に再生を始め、瞬く間に元の状態に復元しました。……人間は勿論、既知の生物でこれ程の再生力を有する存在は、当然ながら確認されていません」

【クリス】

「じゃ、じゃあ、アルカ・ノイズの攻撃が効かなかったのは……」

【エルフナイン】

「……解剖器官の分解速度を、再生速度が上回っていたためと推測されます」

アルカ・ノイズの恐ろしきを知っている装者にとって、それがどれ程凄まじいことか想像に固くなかった。

エルフナインによって、シンフォギアもバリアコーティングに強化・調整を施され、アルカ・ノイズの干渉破砕効果に対抗できるようになった。しかし、この細胞は元々有する能力だけで万象を塵と帰す効果を跳ね除けて見せたのである。

【翼】

「……ということは、その細胞が彼のシンフォギアなのか？」

人と聖遺物が融合する前例もあることから翼の指摘は尤もだったが、エルフナインは首を横に振る。

【エルフナイン】

「細胞を含め、この方からは聖遺物の反応は見られませんでした。しかし、他にシンフォギアのコアに相当するものを身に付けていない以上、何かの形でこの細胞が関わっていることは間違いのないと思います」

【弦十郎】



「……謎を解く鍵はこの細胞にある、ということか」

きな臭い事実が次々と明らかになり、とても奇跡の生還と喜べる雰囲気では無くなった。受け止めきるには不可思議すぎる現状に、指令室は何とも言えない空気に包まれる。

【エルフナイン】

「……とにかく僕は、データの精査を続けます。今できることは、それしかありませんから」

できることをやる。エルフナインの言葉に響はハッとさせられた。

ひたむきなその姿勢は、自分がシンフォギアを振るう時に抱いていた想いと同じものを感じさせたからだ。

【響】

「……そうだよね。悲しんだり落ち込んだりする前に、今はエルフナインちゃんの言う通り、自分にできることを頑張るしか無いんだ！」

【未来】

【響っ】

【マリア】

「やっと君らしくなったな」

【クリス】

「……つたく、さつきまでシヨボくれてたくせに」

【翼】

「だが、良い切り返しだ」

「これまでどんなに苦しい時も絶やさなかつた笑顔。それが、今この瞬間の嫌な雰囲気も吹き飛ばしたことに、戦友であるクリスと翼、そして自分達も救われた身である未来とマリアにも笑顔が戻った。」

【弦十郎】

「……成長したな」

【藤堯】

「父親みたいな顔になってますよ、指令」

【あおい】

「良いじゃない。ある意味家族みたいなものよ、私達は」

【緒川】

「ですぬ」

幾多の苦難を乗り越え、後悔の中からも自力で這い上がる強さを身に付けた子供達を頼もしく思いながら弦十郎は頷いた。

【弦十郎】

「いつ目覚めるか分からんが、俺ももう一度彼と話をしてみようつもりだ。それまで各員——」

士気が上がったことを見計らい、源十郎が場を締めようとしたその時、指令室にけたましい音が鳴り響いた。

【マリア】

「警報!!」

【弦十郎】

「藤堯、友里!」

【藤堯】 【あおい】

「はい!」

藤堯とあおいは直ぐ様持ち場に着き、コンピュータを操作する。メインモニターが切り替わり、映し出されたのは、復旧作業が始まったばかりの基地内に立ち昇る新たな黒煙だった。

【藤堯】

「この基地が再び攻撃を受けています!」

【クリス】

「また、アルカ・ノイズか!？」

【あおい】

「いえ、この反応は——」

モニターが黒煙に向かつてズームする。黒き帳を風が払うと、中から一つの小さな影が姿を現す。

【エルフナイン】

「そんな、……まさか」

姿を見たエルフナインは驚嘆する。小さな影の正体は彼女と瓜二つの容姿をした少女。

【響】

「キャロルちゃん……!」

一連の事件の首謀者である超常の探求者が、未だ爪痕癒えぬ戦場に降臨した——。

## #03 覚醒—HENSHIN—

S.O.N. G 移動本部 指令室——

昨日の衝撃冷めやらぬ中、突如として来襲した貴族風のローブを纏った少女の姿に、指令室の空気が張り詰めた。

【翼】

「キャロル・マールス・ディーンハイム……!」

【クリス】

「ラスボス本人がご登場かよ!」

思いもよらぬ展開に驚くS.O.N. Gメンバー。そんな彼女達の前で、錬金術師の少女は手元の魔方陣から風や炎を召喚し、基地施設を攻撃し始めた。

【弦十郎】

「くうっ?! 奴やつこさんは、どうしてもこの基地を落としたいらしいな!」

【あおい】

「あの規模の攻撃を受け続ければ、基地は数分と保ちません!」

アルカ・ノイズを上回る破壊力の前に、現代科学の軍施設など積み木の城に等しかつ

た。逃げ惑う自衛隊員を容赦なく爆風が襲うのを見て、響は拳を握りながら決意する。

【響】

「……行かなきゃ」

【未来】

「響？」

【響】

「キャロルちゃんを止めなきゃ！どんな理由があっても、こんなことさせちゃいけない！」

大きな力は、正しく使えば多くの人を助けることができる。それをただ自分のために、他人を傷付けるために使うことを、響は肯定することはできなかった。

【エルフナイン】

「響さん……」

自身の創造主であるキャロルの強大さを誰よりも理解しているエルフナインは不安な表情を浮かべるが、そんな不安を吹き飛ばす笑顔で響は答えた。

【響】

「大丈夫だよ、エルフナインちゃん！私にはエルフナインちゃんから貰った新しい拳があるんだから！」

響は首から下げた赤いペンダントを取り出す。響のシンフォギア、《ガングニール》もエルフナインによって強化・改修を施され、響の元へ戻ってきていた。

【翼】

「拳だけではないぞ。ここには、君に鍛えて貰った新たな剣と弓もある」

【クリス】

「バカばかりに良い格好させちゃ、先輩の面子が立たねえしな」

響に続き、翼とクリスも自身の相棒をその手に取る。

新たな力を得た3つの聖遺物は、装者の気持ちに応えるように煌めいた。

【エルフナイン】

「翼さん、クリスさん……」

【響】

「一人じゃない。みんな一緒」

「だから、へいき、へっちゃらだよっ」

それは、挫けそうになる自分を奮い立たせてきた魔法の言葉だった。

満面の笑みをエルフナインに向けた後、響は表情を引き締めて弦十郎に向き直る。

【響】

「……行きますー！」

【弦十郎】

「……分かった。その気持ちと新たな力、存分にぶつけてこい！」

【響】

「はいっ、師匠！」

響・翼・クリスの3人は指令室を飛び出していく。3人の背中を心配そうに見送る未とエルフナインだったが、マリアは二人の肩に手を置きながら安心させるように微笑む。

【マリア】

「あの3人なら大丈夫。だから、私達は信じて見守りましょう」

【エルフナイン】

「マリアさん……」

【未来】

「……はいっ」

共に戦う事が出来なくとも、せめて想いだけは一緒に。マリアの言葉の中にある想いに気付いた二人はしっかりと頷くと、戦場となるメインモニターに視線を移した。

海上自衛隊基地 敷地内――



【キャロル】

「他愛もない。戯れで散り逝くなど、人もそれが作りし物も何と脆いことか」

僅かばかりの本気も出していないにも関わらず、一国家を守る軍隊が逃げ惑うばかりである現状にキャロルは嘆息した。同時に自らの目的に対し、より価値を見出だす。

こんな不完全な者達の犠牲など、万象を暴くことに比べれば塵よりも小さいと。

【キャロル】

「そうだ。オレは何としても《万象黙示録》の完成に至る。故に世界よ、砕けて滅べ！」

【響】

「そんなことさせないよ！」

答える者などいないはずの戦場で、異を示す答えが返ってきた。

……いや、キャロルは待っていた。自らの前に立ちはだかる者達の存在を。

視線を下に向けると、砕けひび割れた敷地内に3人の少女が立っていた。

【キャロル】

「……来たか」

【響】

「もうやめて、キャロルちゃん！世界を壊して得るものに価値なんて無いよ！」

【キャロル】

「それを決めるのはお前ではなくオレだ。壊し暴いた結果が取るに足らないものだったのなら、この世界はその程度だったというだけのこと」

【クリス】

「そんな興味本意の実験、尚更許す訳にはいかねえな！」

【キャロル】

「お前達の許しなど要らぬ。全てはオレが決め、オレが為す」

【翼】

「あくまで考えを変える気は無いか」

【キャロル】

「知れたこと。ならばお前達はどうする？」

【響】

「……止めるよ。世界が壊れたら沢山の人が死んじゃう。そんなの絶対にダメ！私と私の胸の歌は、誰かを助ける為にあるんだから！」

【キャロル】

「……面白い。なら歌え！オレを満足させられるだけの歌をな！」

話は終わりとばかりに、キャロルは無数のテレポトジエムをばら撒く。

弾けた宝石より溢れた光から、アルカ・ノイズの大群が召喚された。

【響】

「雪辱戦だ。行くぞ、雪音！立花！」

【クリス】

「おうっ！」

【響】

「はいっ！」

(……行くよ。ガングニール！)

「Balwisyall Nescell gungnir tron……」

胸のペンダントを空に掲げ、響は胸に浮かんだ聖詠を口ずさむ。

すると、赤いペンダントが弾け、聖遺物の放つエネルギーが身体を包み込み、それまで着ていた制服を分子分解後、エネルギーは適合者を纏う鎧に姿を変える。

腹部の露出を始め、健康的な身体のラインがはつきり分かる薄手の装束とブースターを内蔵したスカートアーマー、少女が纏うには重々しい印象を与える籠ガントレット手と具レッグアーマー、足、最後に角のような意匠のヘッドギアと2枚の羽のようなマフラーが伸びる。

【響】

「ハアアア……、ハッ！」

功夫のような型を決めた後、気合いの声と共に、白と黄色を基調とした戦姫が戦場に

降り立った。

【響】

(……おかえり、ガングニール)

自分の纏うギアを見て、胸の中で呟く。

たった一週間とはいえ、これまで常に共にあった相棒の不在は、響の胸中に不安と寂しさを抱かせていた。

しかし、完膚なきまでに破壊されながらも自分の元に戻ってきたガングニールは、そんな心の影を一瞬で打ち砕いてくれた。

【翼】

「剣と弓、そして拳が再び揃った」

【クリス】

「新しい力で全部平らげてやる！」

翼とクリスも、それぞれ青と赤を基調としたシンフォギアを纏い、響と並び立つ。

【響】

「守ってみせる！私の、私達の歌で！」

響の言葉を合図に、3人はそれぞれアルカ・ノイズへと向かっていった。

♪限界突破 G | b e a t

正面の敵に突貫しながら、響は胸に浮かぶ歌を熱く叫びながら右拳を突き出し、目の前の人型ノイズ数体をまとめて殴り飛ばした。

撃槍《ガングニール》。

その名の通り、北欧神話の主神、オーディンが携えた神槍を起源とする。しかし響は、歴代の適合者である奏やマリアのように槍のアームドギアを発現させることができない。

無意識下で戦うことを忌避する彼女に、ガングニールは武器の形では応えなかった。しかし、戦うためではなく他者を守るため、救いたい者の手を掴むために、ガングニールは彼女の『拳』に力を与えた。

響の四肢を包むプロテクターには、パワージャッキが内蔵されている。

これを打撃の瞬間にパイルバンカーの如く撃ち込むことで、ガングニールの『投擲すれば万の軍勢をも打ち破る』と云われる無双の一撃を再現できるのだ。

【響】

「打ち破る!!」

響は動きを止めず、周りを囲むアルカ・ノイズに向かって拳を向け、足を振り抜く。

アームドギアに頼らない戦い方を身に付けるにあたり弦十郎から学んだ徒手空拳を、響は完全に自分のものにしていった。

1つの集団を全滅させると、スカートアーマーのブースターを吹かせ、別の一団へ向かい己が拳を振るう。

自分の信じる正義と想いを哀しき世界の破壊者に届けるために、優しき少女は平和を脅かす異形の群れを次々と蹴散らしていった。

S・O・N・G移動本部 指令室――

未来達は、戦闘を開始した響達3人をモニター越しに見守っていた。そこへ、指令室のドアが開き、二人分の足音が駆け込んできた。

【マリア】

「調、切歌?!」

足早に入室してきたのは、入院服を着た調と切歌だった。二人の頭や腕には包帯が巻かれ、可愛い容姿をしているため余計に痛々しい印象を与える。

【未来】

「二人とも大丈夫なの!?!」

【エルフナイン】

「ダメですよ、まだ安静にしていなきや!」

【切歌】

「大丈夫デス！」

【調】

「私達もここにいさせてください！」

【弦十郎】

「ダメだ！お前達の身体は、LINKERの過剰投与で見た目以上のダメージを受けている！無理をすれば戦士としてだけでなく、普通の人間としての生活もできなくなるぞ！」

弦十郎は敢えて大きい声で二人に接したが、調も切歌も一步も引く気を見せない。

【切歌】

「もう勝手なことはしないデス！だから、私達も一緒にいさせて下さい！」

【調】

「私達はちゃんと見届けたいんです！響さん達の戦いを！」

これ程まで二人が食い下がるのには理由があった。

指令室に来る前、二人は病室を抜け出し、出撃する響達の元へ向かっていた。

自分達に力がなく、肝心な時に役に立てないことを謝るために。そんな二人に響は、

【響】

『ありがとう。調ちゃん、切歌ちゃん。私達がこうやってまた戦えるようになったのは、

二人が守ってくれたお陰だよ』

そう笑顔で告げていた。翼もクリスマスも、同じように二人の頑張りを認め、感謝する言葉を贈っていた。そして、

【響】

『だから、今度は私達が二人の分も頑張る！だから、二人は安心して待っていて！』

別れ際のその言葉が、二人には嬉しかった。そして同時に、同じ志を持つ仲間として自分達にできることをしようと思いついたのだ。

共に刃を振るえずとも、心だけ想いだけでも一緒に戦おうと。

【未来】

「調ちゃん、切歌ちゃん……」

二人の想いを聞き、反論する者は誰もいなかった。懇願するような眼差しの調と切歌。それに真つ先に応えたのは、やはりマリアだった。

【マリア】

「……司令、私からもお願いします。この娘達は命懸けで翼達にボタンを繋いでくれた。その成り行きを見守る権利をどうか……」

【未来】

「……私からもお願いしますっ」



【エルフナイン】

「僕も同じ想いです。お二人のお陰でシンフォギアの改修が間に合いました。だから、その功績に報いてあげてください」

【緒川】

「……司令」

弦十郎は腕を組み瞑目していたが、緒川に声をかけられると、溜め込んでいた息を吐き出し、目を瞑ったまま口を開いた。

【弦十郎】

「……勝手にしろ。どうせ言っても聞かんのだからな」

【調】 【切歌】

「——ッ！ありがとうございます（デス）！」

その言葉に含まれた許容の意に、調と切歌は手を取り合って喜ぶと、マリアの近くまで移動しモニターを見上げた。

モニターでは、中央突破をかける響の背中と、左右からアルカ・ノイズを掃討する翼とクリスが映し出されていた。

【翼】

『破アアアアッ！』

## 《蒼ノ一閃》

翼は手持ちの刀を身の丈より遙かに大きい大太刀に変形させると、空中で袈裟懸けに振り下ろす。すると、刀から蒼き光の刃が放たれ、地上のノイズをまとめて消し飛ばした。

絶刀《アミノハバキリ天羽々斬》。

日本神話に登場する大蛇、八岐の大蛇を討ち滅ぼした須佐之男命の剣を起源とする。故にアームドギアは大小様々な刀剣を象り、鋭い斬撃で敵を斬り伏せる他、それに乗せて放つ光刃や炎で複数の敵を纏めて薙ぎ倒すこともできる。

幼い頃から研鑽を続けてきた翼は、これ等の特徴を隅々まで掴んでおり、多種多様な技とその応用で装者中でも最高の戦闘技術を身に付けていた。

翼は地上に降り立つと、大太刀を振るって近くのアルカ・ノイズを纏めて斬り倒す。だが、その後ろから数体の武士を思わせる個体が3体、接近していた。

## 【マリア】

「あれは前に翼のギアを破壊した——！」

ロンドンで天羽々斬を、横浜でイチイバルを破壊したこのアルカ・ノイズは、赤いボディに鬚や着物のような部位を持ち、両腕を鋭利なブレード状に変化させて襲ってくる。その攻撃力は高く、干渉破碎効果も他の個体以上の出力を持っていた。

翼は背後から接近してきた武士型に気付くと、大太刀を盾のように構えた。直後、3体の武士型の刺突が刀の横っ腹に炸裂する。

一度はこの攻撃で手折られた絶刀であったが、武士型のブレードから発せられる分解効果は、刀身表面の不可視のバリアによって阻まれ、本体に届くことはなかった。

【藤堯】

「システムに異常無し！バリアフィールドが解剖器官の攻撃を中和しています！」

【あおい】

「凄い……。これが強化型シンフォギア？」

【エルフナイン】

「そうです。プロジェクト・イグナイトはシンフォギアシステムの修復だけでなく、出力の向上と同時に解剖器官の分解効果を減衰するようバリアフィールドを調整しています」

エルフナインの説明を裏付けるように、翼だけでなくクリスと響も、パイプオルガン型と人型の攻撃を受けてもギアが分解されることはなかった。

【翼】

『これならば……行ける！』

《逆羅刹》

翼は武士型3体を押し退けると、倒立して横回転し、脚部アーマーに備え付けられたブレードで斬り刻んだ。

〔クリス〕

『ドンパチじゃ遅れは取らねえ！』

《BILLION MAIDEN》

翼に続き、クリスも両腕に装備した3銃身ガトリング砲計4門を放ち、アルカ・ノイズを蜂の巣にする。

両腕を左右に開きながら敵の戦列を薙ぎ払うと、今度は腰部アーマーを展開、収容されていた小型ミサイルも同時発射し、響や翼以上の敵を瞬く間に消し炭に変えていった。

《MEGA DEATH PARTY》

クリスのシンフォギア、魔弓《イチイバル》は、響の GANG ニールと同じ北歐神話にその名を残す狩猟・決闘の神、ウルの携えし長弓を起源とする。

その為、本来ならばアームドギアは弓の形で具現化されるはずであるが、クリスは幼少期をゲリラの捕虜として過ごした経験から、ゲリラの携えた銃火器への恐怖と憎しみが深層心理に焼き付き、そのイメージがアームドギアとして反映されている。

それ故に、当初はイチイバルの力を嫌悪していたが、響や翼との出会いを経て、守る

べきものの為に引き金を引く覚悟を持ち、今に至る。

銃火器の形態を取る性質上、遠距離攻撃による面制圧を得意とし、対空戦及び集団戦で多大な戦果を挙げてきた。その火力は、現装者の中でも最強と言って差し支えない。

今回もその殲滅力を遺憾なく発揮し、いち早く自分の割り当てを片付けると、響と翼の背中を守るべく援護射撃を開始していた。

【翼】

『雪音、後詰めは任せた！』

【クリス】

『了解だ、先輩！』

クリスの援護射撃を見てとった翼は目の前の敵を斬り倒すと、残りの敵には目もくれずに大刀を携えて響の方へ走った。

その背中を追おうとするイモムシ型は、クリスの弾幕によって塵へと還る。

【翼】

『立花！』

【響】

『翼さん！』

後ろから声をかけられ振り向いた響は、翼の視線から意図を汲み取って頷く。目の前

の武士型を発勁の要領で吹き飛ばすと、その場から大きく飛び退いた。

【翼】

『ハアアアアアッ！』

《蒼刃罰光斬》

裂帛の気合いと共に、大太刀から新たな刀を居合い抜く。神速の速度で抜かれた十字の斬撃は蒼い光となって空を翔け、キャロルを守る異形の壁を薙ぎ払った。

【翼】

『雪音！』

敵陣に穴が空いたことを見定め翼が叫ぶ。クリスは既に大型ミサイルを2機を両肩に展開、発射体勢に入っていた。

【クリス】

『持っってけダブルだっ!!』

《MEGA DEATH FUGA》

放たれた2発のミサイルは、白き尾を引きながら標的としては不釣り合いな少女へと向かい、直後巨大な爆発に包み込んだ。

【調】

「凄……」

【切歌】

「ナイスな連携アス！」

ユニゾンを主軸とする自分達のお株を奪うような戦い方に、調と切歌も目を奪われていた。

【クリス】

『やったか?!』

確かな手応えに、クリスは爆煙の向こうを凝視する。指令室でも、3人の強化型シンフォギアの確かな威力に期待が高まった。……だが、

【キャロル】

『なるほど。中々どうして悪くない』

煙の中から現れたのは、黄色い障壁で攻撃を防ぎきったキャロルの姿だった。

【マリア】

「無傷?!」

【弦十郎】

「やはりそう簡単にはいかせてくれんか」

【クリス】

『だが、団体さんはいなくなっちゃった!』

アルカ・ノイズは既に殲滅している。数の上では3対1、圧倒的に装者側の優位であった。……にも関わらず、キヤロルは表情一つ変える様子を見せない。

【キヤロル】

『どうと言うことはない。この身一つでお前等3人を相手取るくらい造作もないこと』

【翼】

『その風体でぬけぬけと吠える……!』

錬金術という未知の力を究めていようと、その外見はエルフナインと同じ戦闘には向かない少女そのもの。一撃でも入れば勝負は着くと翼は考えていた。

だがキヤロルは、何が可笑しいのか無表情だった顔に微笑を浮かべる。

【キヤロル】

『そうか。ナリを理由に本気を出せなかったなどと言いつけられる訳にはいかないな』

『——ならば、刮目せよ!』

キヤロルの瞳に強い光が灯った瞬間、翼だけでなく指令室のメンバーにも戦慄が走った。

キヤロルは左腕を突き出し魔方陣を出現させると、その中から何かを召喚する。

現れたのは、紫を貴重とした豎琴（ハープ）であった。豪華な見た目とは異なり、威圧するような雰囲気を持っている豎琴。その弦を、キヤロルは撫でるように弾く。



戦場に流れる麗しき旋律。だが、それは指令室にけたたましい警報を鳴らす引き金となった。

【切歌】

「な、何デスカ!？」

【藤堯】

「……バカな、これは!？」

藤堯は信じられないといった様子で端末を操作し、サブモニターにあるデータを写出す。そこに表れたのは、S・O・N・Gメンバーなら誰もが見覚えのあるものだった。

【弦十郎】

「アウフヴァツヘン、だとお!？」

【あおい】

「……いえ、違います!ですが、非常に近いエネルギーパターンです!」

シンフォギアが放つ特徴的なエネルギー波形。それに類するものが観測されたのは、記憶に新しい。

だが、キャロルの奏でる豎琴から放たれるものは、それとも異なる波形パターンであった。

誰もがその正体を計り知れぬ中、ただ一人、キャロルの分身たるエルフナインが厳しい表情で呟いた。

【エルフナイン】

「《ダウルダブラ》のファウストローブ……!」

《ダウルダブラ》とは、ケルト神話の最高神、ダグザが用いたとさせる豎琴である。その音色は天候を自在に操り、聴いた者の感情に干渉することさえ可能と云われている。

キャロルによって起動されたダウルダブラは、まるで呪われた仮面のような形へと変貌し、更に各部を展開しながら無数の鋼糸を主へと伸ばした。

キャロルの小さな身体は傀儡人形マリオネットのように吊られる。弦が巻き取られ、キャロルの身体は引き裂かれんばかりに引つ張られるが、破れたのは小さな身体を包む赤いワンピースのみで、その下の身体は引かれるままに体積を増す。

見る間に成長を遂げていく肢体に、ダウルダブラは鎧となって各部を覆う。

帽子のようなヘッドギアに4色の宝石が飾られると、キャロルは自らを吊っていた鋼糸を引き千切り、新たな姿で戦場に舞い降りた。

【響】

『シン、フオギア……?』

【エルフナイン】

「……いえ、確かに似ていますが、両者は限り無く近くて遠い存在です。ファウストロウブは、聖遺物の欠片よりもたらされるエネルギーを、錬金術によってプロテクターへと錬成した物。故に起動と戦闘に歌を必須としません」

「更にダウルダブラには、その音色で自然の摂理をも支配下に置く魔力を秘めています。自然を操ることは、すなわち錬金術の基本となる四大元素を掌握するに等しく、キャロルの錬金術をより強大なものにします」

エルフナインによって明かされたキャロルとダウルダブラの超常の力に、先程までの勢いは完全に鎮まりつつある。

聖遺物の中でも屈指の潜在能力を持つと言って差し支えない神器が、最強の敵として今まさに牙を剥こうとしていた。

【キャロル】

『これくらいあれば不足は無かろう？』

【翼】

『大きくなったところで！』

成長した姿を見せつけるように、自らの胸を掬い上げ、不敵な笑みを浮かべたキャロルに、翼が疾風のように斬り込む。それを見たキャロルは、紫のオペラグローブを纏つ

た左腕を振るった。

すると、不可視の何かによって基地の舗装路が膾なますの如く切り裂かれた。

裂波のように迫る斬撃を、翼は間一髪躲す。

【キャロル】

『ウルアツ！』

キャロルは攻撃の手を緩めず、今度は右腕を横に薙ぐ。翼は目を凝らすと、陽光を反射しながら迫る3本の斬糸を認め、その場に伏せた。

風を切り裂きながら頭上を通過したそれは、背後にあつた燃料タンクを裁断し、辺り一面を爆炎で彩った。

【響】

『翼さん！』

【クリス】

『張り合うのは望むところだ！』

翼の逃げる隙を作ろうと響が突っ込み、クリスも両腕のガトリングを斉射する。キャロルは翼からあつさりとした視線を外すと、両肩のパーツを展開、現れた弦を弾く。

すると、キャロルの左右に赤と青の魔方陣が現れ、それぞれから魔方陣と同じ色の火焰を噴出させた。

【響】

『うわあっ?!』

【クリス】

『チイツ!?!』

響とクリスはそれぞれ横に飛び退き難を逃れたが、2色の火焰は基地内を駆け抜け、巨大は炎の壁を立ち昇らせた。

これがファウストローブ、殲琴《ダウルダブラ》のアームドギアに相当する能力。

豎琴を構成する極細の鋼糸を自在に操り、如何なる物をも切断せしめるだけでなく、束ね編み込むことで様々な形へと姿を変える。

その力は攻撃だけでなく防御にも転用でき、本来の弦として用いれば、キャロルの錬金術を強化する増幅機ブースターとしても機能する万能の宝具となるのだ。

【藤堯】

「……歌うわけでもなく、これだけの膨大なエネルギー、一体どこから?」

【エルフナイン】

「《想い出》の焼却です」

【あおい】

「《想い出》?」

【エルフナイン】

「キャロルや自動人形の力の源、脳内の電気信号を変換・錬成したものです。造物である自動人形達は、当然ながら戦闘に足るだけの想い出を有してはいません。故に他者……人間の想い出を奪取し、自身のエネルギーへと変換しています」

【緒川】

「……それでは、最近頻発している変死事件は？」

巷では、まるで生気を吸い取られたように、髪や肌の色を真っ白に染めて息絶えた死体が発見されていた。

因果関係を確かめるべく訊ねた緒川に、エルフナインは首肯する。

【エルフナイン】

「……自分達の活動のため、オートスコアラ自動人形達が想い出を貪っているんです」

【調】

「……酷い」

悲痛に顔を歪める調を見て、エルフナインは俯きながら更なる事実を突き付ける。

【エルフナイン】

「……そんな自動人形達の力もキャロルには遠く及びません。数百年を永らえて相応の想い出を蓄えたキャロルの力は——」

【マリア】

「……より強大な力を秘めている？」

続きを予想したマリアに、エルフナインは頷いた。数百年分に渡り蓄えてきた戦う力。その程度を推し量る術はS・O・N・Gには無い。

改めて明らかとなったキャロルの地力。だが弦十郎には、一つ気掛かりとなることがあった。

【弦十郎】

「エルフナインくん。力へと変えた後、思い出は一体どうなる？」

【エルフナイン】

「……どんな技術でも、無から有を産み出すことは出来ません。絶大な戦闘力へと燃焼された思い出は、文字通り燃え尽き喪われます」

ある種の痛みを伴う表情で告げられた事実、指令室は重い沈黙に包まれた。

自身の記憶を対価とする、その大き過ぎる代償を払うことでもたらされる力が響・翼・クリスを襲う。

近付くことすら叶わず逃げ惑う装者3人。だが、キャロルは容赦なく、六角形の魔方阵を新たに6つ作り出し、そこから無数の光の矢を放った。

【翼】

『うああああっ!?!』

直前の斬糸による攻撃を辛うじて躲していた翼は回避が間に合わず、光の矢の爆発に巻き込まれた。

【クリス】

『先輩ッ!』

【キャロル】

『その程度の歌で俺を満たせるなど!』

【クリス】

『うわあっ!?!』

【響】

『クリスちゃん!』

キャロルは鋼糸でクリスの足場を賽の目に切り刻む。飛び退こうとした時には既に遅く、足場の建物が内側から爆発・炎上し、クリスを地に叩き落とした。

【響】

『てやああああああっ!』

【キャロル】

『フン……』



爆煙を突つ切り、響は両腕のアーマーを組合わせ肥大化させた右拳を叩き込む。

キャロルはそれに対し、右掌から鋼糸を逆巻かせ、ぶつかり合つた強烈な拳打と鋼糸の渦は激しい火花を散らした。

響はブースターを吹かせ防御を穿とうとするが、装者随一の突破力を前にしてもキャロルは表情を崩さなかつた。

涼しい顔のキャロルに対し、響の表情が段々と焦りに染まる。無双の槍拳は徐々に押し戻され、表面に傷を刻んでいった。

【キャロル】

『脆い拳だな。本当の拳突とは、こうやるものだ！』

キャロルは響を弾き返し、鋼糸を自らの腕に巻き付けた。束ねられた無数の糸は、元から一つであつたように形を無し、鈍く輝くドリルへと変貌する。

【キャロル】

『ハアツ！』

ドリルを回転させながら突きを繰り出すと、逆巻く空気が緑の竜巻となつて放たれる。

至近距離で体勢を崩していた響に避ける術はなく、激しい気流の檻に囚われてしまつた。

【響】

『ぐぐつ——ツ!?!』

四肢が引つ張られ、身動きを封じられる響。そんな彼女に向かつて、キャロルは竜巻の中をドリルを構えながら突撃してきた。

気付いた響は、渾身の力で両腕を胸の前でクロスさせ防御の構えを取る。

直後、竜巻を消散させる程の衝撃が襲い掛かり、ガントレットを砕かれた響は為す術なく墜とされた。

【響】

『がはっ!?!』

【未来】

「響ッ!!」

叩き付けられ息を詰まらせる響。強化されたガングニールに助けられ、身体への直撃は免れたものの、視界が歪む程の痛みが全身を駆け抜けていた。

【マリア】

「まだよーまだ立ち上がれるハズよー」

マリアの言葉に応えるように、響は腕を路面に突きながらゆっくりと身体を起こす。

その近くに、腕や腹部を押さえた翼とクリスもふらつきながら近寄ってきた。

【エルフナイン】

「……《イグナイトモジュール》の可能性はここからです」

圧倒的な実力差を見せつけられる中、エルフナインはまだ勝機はあると、強い眼差しを響達に送る。

【翼】

『……大丈夫か？雪音、立花』

【クリス】

『正直しんどいな。……クソツタレ』

【響】

『……でも、まだ倒れる訳にはいきません。エルフナインちゃんから貰った力、まだ全部使えていませんから！』

【キャロル】

『フンツ。弾を隠しているなら見せてみる。俺はお前等の希望を全てブチ砕いてやる！』

地を這う自分達を超然と見下ろし宣う最強の敵。あの高みから引き摺り降ろし、状況を覆す為に残された手は、たった一つしか無かった。

【響】

『翼さん、クリスちゃん!』

【クリス】

『ああつ。付き合つてやるぜ!』

【翼】

『無論。一人で行かせるものか!』

3人は頷き合うと、胸の中央で光る矢尻のような赤い結晶に手をかける。それは、修復によつて形状の変わつたシンフォギアのコアであつた。

この新たなコアには、装者を更なる力を点火せしめる機構が組み込まれている。

【響】

『……《イグナイトモジュール》!』

【響】 【翼】 【クリス】

『『拔剣!!』』

コアの両端を押し込みながら起動トリガーを叫ぶ。『ダインスレイフ!』の電子音と共に装者からコアが分離し、空中で3片の花弁のように展開され、その中心から赤き楔が伸びた。

そして、怪しげな形状に変わった結晶は、適合者である3人の元へ勢い良く舞い戻り、起動前に座していた胸の中心へと突き刺さつた。

【響】

『あ、あ!?!……ア、ア、ア、アアアアアッ!!』

響達はおよそ少女のものとは思えない呻きを上げた。だが、その痛みは胸を貫くモジュールではなく、より身体の奥底から沸き上がっていた。

【クリス】

『私の中で……何かが暴れ狂ってやがる……!』

【翼】

『腸を掻き回すような……これがっ……この力が……!』

3人を襲う赤黒い衝動、それこそがシンフォギアの新たなる決戦機能の根幹を為すものであった。

元々、全てのシンフォギアには共通して3種の決戦機能が存在している。

一つは、装者の生命に関わる負荷バツクフアイアと引き換えに、必殺のダメージを与える《絶唱》。アームドギアを介して放たれる為、各ギアによって特性が異なるものの、自らも滅ぼし兼ねない捨て身の一撃であることに変わり無かった。

2つ目は限定解除、《エクストライブモードx》。

元来シンフォギアシステムには、総数301、655、722種類もの機能制限ロツクが設けられている。XDは、幾重にも束ねられた歌による高レベルフォニックゲインにより

それらの機能を一時的に解放し、文字通りシステムのパフォーマンスを限界まで引き出すことができるのだ。

その出力は《絶唱》を上回り、必殺級の大技をエネルギーチャージ無しで連発できる。

他にも、単体での飛行能力や念話による意思疎通と歌唱中断というシンフォギアの弱点の無効化などメリットを挙げればキリがないが、発動する為には「フロンティア事変」のように70億人の歌が一つとなるような『奇跡』が不可欠であり、戦術に組み込むにはあまりに不確定な機能であった。

そして、最後にしてプロジェクト・イグナイトが着目した機能が《暴走》である。

シンフォギア、もとい聖遺物もたらすものは戦う力だけではない。装者の心に巢食う負の感情や戦闘・破壊衝動をも増大させてしまう。

通常はロックによって制御されているが、何らかの要因で心の闇が限界を超えた時、理性を失い制御から外れた闘争本能の塊と化す。

他の2機能同様、通常時とは比較にならない攻撃力を発揮するも、理性のタガが外れたことで目に写る者を見境なく攻撃するようになってしまう。

プロジェクト・イグナイトは、この《暴走》のメカニズムを解析・応用することで、暴走時の出力を維持しながら理性を保ち、戦術的運用を目指すというものであった。

その為に搭載されたのが《イグナイトモジュール》。聖遺物の一つ、魔剣《ダインスレイフ》を中核としたシステムである。

【エルフナイン】

「ダインスレイフは伝承にある通り、犠牲者の生き血を喰らい、全てを吸い付くすまで鞘には収まらないとまで云われた殺戮の魔剣」

「その呪いは誰もが心の奥に眠らせる闇を増幅し、人為的に暴走状態を引き起こします」  
「無論、このままでは制御は到底不可能ですが、ギアの改修に当たり、暴走を制御するための3段階のセーフティーを増設しています」

【弦十郎】

「後は、人の心と英知が破壊衝動を振り伏せることでできれば……」

【キャロル】

「シンフォギアはキャロルの錬金術に打ち勝てます」

【未来】

「心と、英知……」

イグナイトモジュールを起動させる最大の鍵は、装者の意志の強さにある。これまで幾多の苦難を乗り越えてきた3人なら、魔剣の呪いを屈伏させることは十分可能とエルフナインは踏んでいた。

しかし、苦しむ響の姿に未来は不安を隠せなかった。実際に響の暴走した姿を目にしたことのある未来には、そんな簡単にあの赤黒い衝動を御せるとはどうしても思えなかったのだ。

……そして、その不安は的中することとなる。

【藤堯】

「3人のバイタルに異常！」

【あおい】

「システムから逆流する負荷に、3人の精神が耐えられません！」

【未来】

「響ッ！」

モニタリングをしていた藤堯とあおいから、続けざまに響達の異常が伝えられる。戦場では、3人の装者が更に苦しみながら、各々の抱える闇を吐露していた。

【翼】

『ぐうううっ?!……私の、歌を聴いてくれるのは、敵しかいないのか……?』

【マリア】

「翼!?!」

【クリス】



『守らなきゃいけない、後輩に、守られて……、私なんかが、大切なものを欲しがっちゃ……いけない……、うあ、あ、っ!』

【切歌】

「クリス先輩!?何を言ってるデスか!」

【響】

『……助けるために、握った手、……でも、その手はいつも、誰かの血に……イヤアアアアッ!』

【調】

「響さん!?しつかりしてください!」

マリア達の呼び掛けにも応えず、3人は目を赤く爛々と輝かせながら、心身ともに自らが生み出した影に呑み込まれようとしていた。

【マリア】

「呪いなど斬り裂け!」

【切歌】

「撃ち抜くんデス!」

【調】

「恐れずに碎けばきつと……!」

再度響き渡る仲間の声。しかし、無情にもその声は赤き衝動に掻き消され、3人は全身を影に呑み込まれる。

球体状になった赤黒い影は、まるで胎動するかのように脈打つ。そして、最も大きな胎動を響かせた瞬間、赤黒い影は弾け、内包されていた響達は力なく倒れ伏してしまつた。

【藤堯】

「装者3名、バックファイアによってバイタル低下！フォニックゲインも減衰！」

【あおい】

「これ以上の戦闘続行は危険です！」

【緒川】

「やはりぶつつけ本番では……」

傷付き荒く息を吐く響達の様子に、指令室は騒然となつた。戦場では、キャロルも3人を見下ろしながら『不発？』と眉をひそめている。

3人とも辛うじてギアは纏えているものの、とても戦えるような状態ではなかった。

【翼】

『……剣であるこの身では、愛する者を、抱き締めることもできない……っ』

【クリス】

『一人ぼつちが、温もりを求めたばかりに……つ。残酷な世界が、大切なものを壊して、本当に独りになってしまう……』

【響】

『……やっぱり、私の手は、何かを壊すことしかできない……！……何で、いなくなっちゃったの？……お父さん……つ』

【マリア】

「翼！司令、このままでは3人が！」

【弦十郎】

「藤堯、支援砲撃用意！友里、自衛隊にも救援を要請しろ！その隙に響くん達を撤退させるー！」

【藤堯】【あおい】

「ハイッ！」

マリアの進言に、弦十郎は響達を救助するため動き出す。だが、それを予見したかのように、竖琴の聖遺物を纏った錬金術師が、手を天に翳した。

モニターがキャロルの手の先へスライドすると、上空に巨大な赤い紋章が浮かび上がる。それはアルカ・ノイズ召喚の際に出現するものと同じもので、光の中から脚の無い

豚か糞を思わせる巨大な個体が現れた。

【キャロル】

『立ち上がれぬと言うのなら、その力くらいオレがくれてやる』

【響】

『……キャロルちゃん？何を……』

嫌な予感に響は上空を見上げる。巨大アルカ・ノイズは、脚の代わりの4つの孔から蝙蝠のような小型のアルカ・ノイズを無数に放出し始めた。

【翼】

『空母型？……まさか』

翼は青くなった顔を更に凍らせながら呟く。直後、『正解だ』と言わんばかりに蝙蝠型が身体をドリル状に丸め、近くの市街地に向けて落下し始めた。

建物を穿ち、内側から爆発する蝙蝠型。たちまち市街地は、幾つもの炎の柱に彩られた。

【藤堯】

「基地周辺の市街地、爆撃により被害甚大！尚も範囲拡大中！」

【あおい】

「横須賀市全域に避難勧告発令！しかし、この爆撃の規模では十分な避難は困難です！」

【藤堯】

「……政府より厚木基地航空部隊に緊急発進要請！スクランブル神奈川の各部隊はこれを支援し、本艦も戦列に参加せよとのことです！」

【未来】

「そんな！じゃあ、響達は?!？」

【緒川】

「……最大の脅威の排除を優先、ということでしょうね」

【弦十郎】

「クソツ、俺が話を着ける！回線を繋げ！」

キャロルの暴虐に、指令室も大荒れとなった。

基地内では、クリスがクロスボウを上空に群れるアルカ・ノイズに向けるが、腕が震え、トリガー引き金を引くことができない。

【クリス】

『このっ、生まれよっ！……止まってくれっ』

【キャロル】

『どうした？立ち上がるにはまだ力が足りないか？ならば、分解される者共の悲鳴をもっと聞きたい！』

悪意溢れる笑みを浮かべ、更に爆撃の範囲を広げるキャロル。

破壊されていく街と、塵へと変えられていく人々の叫びに、響達は身体を引き摺りながらも立ち上がる。

【キャロル】

『そうだ、立て。立って歌え！消え逝く者共に贖いたくば、歌ってオレを止めてみるお！』

叫びながら腕を振るい、斬糸を奔らせる。響達の目の前の路面が瞬く間に裁断され、挟り飛ばされた破片や粉塵が3人を呑み込んだ。

【響】 【翼】 【クリス】

『『うあああああああつ!?!』』

【調】

「響さん！」

【切歌】

「ど、どうするデスカ?!このままじゃ……」

再び地に転がされる3人。だが、ギアを破壊された調と切歌には、彼女達を助けることは叶わなかった。

無力感に苛まれ、込み上げる涙に抗うことしか出来ない。……そう思っていた時、調

の中に電撃のような感覚が走った。

途端に浮かんただある閃きに従い、一目散に駆け出す。

【切歌】

「調!？」

【弦十郎】

「お前達、何処へ行く!？」

調の様子に気付いた切歌は彼女を追って走り出す。その背に弦十郎の大声が飛ぶが、構わず走る調に、切歌も足を止めなかった。

【切歌】

「どうしたデスか、調! また勝手なことしたら……」

調の横に並びながら問いかける。昨日の無断出撃でこっぴどく叱られたことを思い出し、切歌は内心穏やかではなかった。

しかし、調はそんなことは頭に無いのかひたすらにある場所を目指していた。

【調】

「響さん達を助ける。自衛隊じゃアルカ・ノイズには敵わない」

【切歌】

「そんな!?! 無理デスよ! 今の私達にはギアも無い! 今度こそ本当に全くの無策じゃない

「デスカ！」

昨日もこうやって走りながら同じやり取りを交わしていた。でも、状況は昨日よりも更に悪い。纏うべきシンフォギアを失った自分達に、戦闘介入は不可能なのだから。しかし――

【調】

「……無策じゃないよ、切ちゃん」

今度も調は、確信を持ってそう告げた。

調の考えにまるで見当がつかない切歌は、困惑しながらも調に追従する。やがて二人が曲がり角を曲がった先に、目的の部屋が見えてきた。

【切歌】

ステイカールーム

「医務室？」

昨日まで響が横たわり、自分達がLINKERをくすねた場所。

調は昨日の部屋ではなく、その隣の部屋に駆け込んだ。……そこにいる、響達を助けられる可能性を持つ人物に会うために。

ステイカールーム  
医務室――

部屋一面が白で覆われ、消毒液の匂いが充満する室内。だが、普段ならそこにいるは



ずの医師や看護師の姿はなかった。

昨日の基地襲撃に際し多くの怪我人が出たことで、S. O. N. G常駐の医療メンバ―も応援に駆り出されていた。

静かに機器の作動音のみがするはずの医務室。しかし、中央に鎮座するベッドの主に  
より、沈黙は破られていた。

【轟】

「があああつ！ガウ！グルウ……！」

ベッドには機械仕掛けの拘束具で男が縛り付けられていた。

黒銀轟。昨日、翼とクリスによって捕縛された謎の青年。

キャロルとの戦闘開始に呼応したかのように目を覚まし、暫くは薬の余韻もあつて大人しくしていた彼だが、響達が危機に陥つたと同時に、自らを縛る戒めを解こうと暴れ始めた。

【轟】

（クソツ！こんなもので俺を縛るとは！人間共め！）

世の中で最も憎悪する存在に怒りを燃やしながら更に激しく暴れるも、拘束具を破る力は今の彼にはなかった。

【轟】

(……早く！早く行かなければ！でない……！)

本能に突き動かされるまま、自分の身が傷付くことも厭わず全身に力を込める。

そんな時、ずっと沈黙を守っていた扉が開き、2人分の足音が駆け込んできた。

轟は動きを止め、扉の方を見る。そこには、昨日居合わせた黒髪と金髪の少女が立っていた。

【轟】

(……昨日の人間？何しに来た？)

疑問に思っただけと見つめると、二人は気圧されたように肩を震わせたが、黒髪の方の少女が意を決した様子で近付いてきた。

金髪の少女が狼狽える中、黒髪の少女は轟の頭の方に回り、備え付けの端末を操作し始めた。

【切歌】

「し、調!?何やっているデスか!?!」

予想だにしなかった行動に出た親友に、切歌は慌てて駆け寄る。調は端末から目を離さずに、自分の考えを口にした。

【調】

「……この人なら、オートスコアラー自動人形にも勝ったこの人の力なら、アルカ・ノイズに勝てる!」

【切歌】

「た、確かにそうデスが……」

調も切歌も、結果だけ見れば目の前の男に命を救われている。しかし、敵を撃退した後、自分達やクリスや翼に襲いかかろうとしたことから、切歌は男を自由にすることに抵抗を覚えた。

【調】

「……他に方法がないもの。このままだと、多くの人達が犠牲になってしまう。そんなのは絶対、ダメだから……！」

【切歌】

「調……」

調の瞳には涙が溜まり、唇はきつく噛み締められていた。

今この瞬間にも、自分達のような咎人にも優しく接してくれた大切な人達と、彼女達が命懸けで護った世界が危機に瀕している。

自分達が戦えなくても何かをしたい。例え無茶なことだとしてもがむしやらに突っ走る。

そんな一生懸命な調が、切歌は大好きだった。

切歌は心を決め、調の横に並ぶともう一つの端末を操作し始めた。

【調】

「切ちゃん？」

【切歌】

「助けたいと思う気持ちは私も同じデス」

「それに、二人でやった方がその分早く先輩達を助けられるデスよ」

そう言つて優しく微笑みかけてくれる切歌。それだけで調の心は軽くなった。

【調】

「……うんっ」

調は微笑み返しながら頷くと、視線を画面に戻し端末操作に集中した。

一心不乱に頭の上で作業をする調と切歌を、轟は暴れるのを止めて窺っていた。

【切歌】

「……あ」

操作の手を止め、切歌が声を上げた。

代わり映えせず文字やグラフが表示されていたディスプレイに、それらとは明らかに違うアイコンが表示されたのだ。

【調】

「切ちゃん！」

【切歌】

「きつとコレ、デスッ！」

勢い良く表示されたアイコンをタップする。すると、機械音を立てて電子ロックが解除され、轟は身体の自由を取り戻した。

【轟】

「——ッ！」

轟はベッドから勢い良く飛び上がり、床に降り立った。

自分の両の掌を見ながら閉じたり開いたりを繰り返す。手首と足首は皮が破れ血が滲んでいたが、痛がる様子はなかった。

【調】

「……あのっ」

身体の具合を確認する轟に、意を決して調が声をかける。

轟は動きを中断し、調と切歌に目を向ける。その視線は鋭く、射抜かれた二人は咄嗟に言葉が出なかった。

【轟】

「何故、俺を自由にした？」

不信任感を隠さない口調で訊ねる。断片的に聞いた限り、自分の力を利用しようとして

いるようだが、人間らしく無理矢理従わせようという感じがなかったことが轟を更に困惑させていた。

一方、切歌達は初めて轟の喋ったところを見て驚いていた。しかし、すぐに自分達の目的を思い出し、絶る想いで切り出す。

【切歌】

「お、お願いがあるんデス！」

【轟】

「願い？」

その言葉からは、やはり無理強いする気配は感じられなかった。しかし、必死に望みを通そうとする感じは伝わってくる。

【調】

「私達の仲間が、アルカ・ノイズに襲われているんです」

【轟】

「アルカ・ノイズ？」

【切歌】

「昨日戦った顔がキラキラ光る敵のことデス！」

【轟】

(奴等か……。確かにうじゃうじゃチカチカと目障りだったな)

轟が心の中で頷いていると、調と切歌は同時に頭を下げた。

【調】

「あなたの力ならアルカ・ノイズに勝てる。お願いします、力を貸してください！」

【切歌】

「このままじゃ沢山の人達が死んじゃうんデス！」

【轟】

「……断る」

轟は首を横に振った。

憎しみの対象でしかない人間を助けるなど有り得ない。寧ろ減ってくれるなら万々歳と思っていた。

断られた調と切歌は悲壮に染まった顔を上げるも、諦めずに瞳に涙を溢れさせながら懇願し続ける。

【調】

「……お願い、しますっ。もう、頼れる人が、他に、いないんですっ！……グスッ」

【切歌】

「私達にできることなら何でもするデスから！……だから、ヒグッ……お願い、デス

……ッ」

【調】【切歌】

「大切な人達の命を、助けてください！」

【轟】

「——ッ！」

調と切歌の大きな瞳から流れた雫と、『大切』、『命』という言葉。それらが轟の心の奥底にあるものを揺さぶった。

嘗て、自分にも命を賭してでも守りたい存在がいた。

臆病だが好奇心旺盛で、自分によく甘えてきた小さき同族。自分にとってその者は、世界で唯一の仲間であり、兄弟であり、息子でもあった。

その者の最も大きな特徴であった愛くるしい瞳。轟には、それが目の前の二人とダブって見えた。

【切歌】

「えっ……」

流れ落ちる涙と共に俯いていた頭に、何かが置かれた感触がして、切歌は声を漏らした。

恐る恐る顔を上げると、さっきまでとても怖い顔をしていた青年が、若干和らげた表



情で自分と調の頭に手を置いていた。

【切歌】

「え、えと……／＼／＼／＼」

突然のことに赤面する切歌だったが、轟の行動はそれで終わりではなかった。

調の目から新たに頬を伝った涙を自らの指で拭い取る。

【調】

「あつ／＼／＼／＼」

熱の籠った肌にほんのり冷たい感触が触れ、調は更に頬を上気させた。

【F・I・S】という名のテロ組織に身を置いていた彼女達にとって、一部の者以外から厚意をもって接されることはなかった。

特に男性は自分達より遥かに歳上の人物としか関わったことが無い。見た目だけは自分達とそう変わらない轟に接されることは、二人にとって初めての経験だった。

火が点いたように赤くなって戸惑う調と切歌。

一方、轟の内には別の感情によって熱い炎が灯っていた。——”怒り”という炎が。

【轟】

「……赦さん」

【調】 【切歌】

「えっ?——あっ!?!」

轟の眩きに調と切歌が顔を上げた時、轟は猛然と走り出していった。

驚く二人を意に介さず、ドアを潜って本能のまま走る。……自らの『敵』の元へ。

【轟】

(あいつを……あいつと同じ眼をした奴等を泣かせる存在は、絶対に赦さない!!)

怒りの炎を更に燃え上がらせ、轟は戦場を目指して疾走した。

海上自衛隊基地 敷地内——

キャロルのダウルダブラの斬撃によって蹴散らされた響達は、何とか身体を起こし、戦う構えを取っていた。

【響】

「……もう、やめて、キャロルちゃん……。これ以上、罪の無い人達を苦しめないで!」

響は傷付いた身体を引き摺りながら、あらん限りの力を宿した瞳で立ちほだかる錬金術師を見据える。

【キャロル】

「オレが虚勢に慄く程度の度量だと思うのか? 吠えるのなら、力を見せてみる!」

キャロルは、今度は魔法で響達を攻め立てた。

3人の頭上に描いた魔方陣から巨大な氷の塊を落下させる。響達が散開して躲すと、路面に激突した氷塊は砕け散り、辺りに冷気を撒き散らした。

【クリス】

「クソツ！いつまでもやられてばっかでいると思うな！」

クリスは両手に携えたクロスボウから赤き光の矢を斉射する。しかし、キャロルは避けることなく、響の時のようにダウルダブラの鋼糸で矢を弾いた。

【キャロル】

「ブンブンと五月蠅いだけの蚊が。その程度でオレの肌を刺すことは叶わんと知れ！」

【クリス】

「お前——！」

【翼】

「やめろ、雪音！熱くなつてはますます奴の思う壺だ！」

がむしやらに飛び出しかけたクリスを翼が嗜める。先輩の言葉に、クリスは悔しがりながらも足を止め、再びクリスボウを構えた。

歴戦の兵<sup>ツツモ</sup>である翼は、3人の中で最も早くイグナイトモジュールの失敗から立ち直り始めていたが、それでもキャロルへの対抗策は全く無かった。

攻めあぐねる装者達に、キャロルは深い溜め息を吐く。

【キャロル】

「……つまらん。少し本気を出せば容易く牙をもがれ、遠巻きに吠えるだけの負け犬と化すとは」

「オレが求めるのは血沸き肉踊る戦いの歌！お前達も自らを戦士と謳うなら、オレに抗う牙を見せてみる！」

【クリス】

「黙って言わせておけば——」

【響】

「違う」

【キャロル】

「……ん？」

キャロルの再三に渡る挑発にクリスが噛み付こうとした時、正面に立つ響が呟いた。訝しむキャロルに、響は声を張り上げ、続きを告げる。

【響】

「私達が歌うのは戦うためじゃない！命を助けるため、人と人との心を繋ぐためだから——」

【翼】

「立花……」

【クリス】

「お前……」

【キャロル】

「何を言い出すかと思えば……。くだらん」

冷たく切つて捨てるキャロルだが、響は訴えることを諦めない。諦めたらそこで何もかも終わってしまう。

これまでの人生を思い返し、彼女はそう強く感じていた。

【響】

「くだらなくなんかない！伝える術があるのにそれを使わず力だけを振るうなんてそんなの虚しいよ！」

「お互いに歩み寄れば、この世界の誰とでもきつと分かりあえる！キャロルちゃんとだって！」

【キャロル】

「……オレと？」

【響】

「そうだよ！だから——」

【キャロル】

「そうか……。ならば、歌え！歌い戦うことこそがオレの望み！歩み寄る術は戦いしか有り得ない！」

【響】

「キャロルちゃん!!」

【キャロル】

「くどい！」

キャロルは怒号を上げると、響の足許に風の魔法を発生させ、天高く放り上げた。

【響】

「うあああつ?!——くっ!」

空中に巻き上げられながらも、響は腰のブースターで姿勢制御を試みる。

しかし、キャロルはそれを許さず、伸ばした鋼糸を響に巻き付け、自分の近くへと叩き付けた。

【響】

「がはっ!?!」

【翼】

「立花!」

【クリス】

「テメー、それ以上は——！」

【キャロル】

「お前達はこいつらと遊んでいろ」

響を助けるために飛び出そうとした翼とクリスだったが、キャロルは彼女達の周りに新たなアルカ・ノイズ群を放った。

【クリス】

「クソツツ！また懲りずにうじゃうじゃと！」

【翼】

「だが、ここにきてこの物量は……」

自分達を取り囲む異形の群れに、翼とクリスは背中合わせに立って武器を構える。その間に響は身体に鞭打って立ち上がるとしたが、その頭をキャロルの足が踏みつけた。

【響】

「うぐっ!？」

【キャロル】

「戦わなければお前も仲間も消えるだけだぞ？」

【響】

「それでも……。言葉を交わさず殴り合うしかできないなんて、そんなの悲しすぎるから……。—」

【キャロル】

「あくまで綺麗事を謳うか。なら、その妄言に殉じるがいい！」

キャロルは響の頭を更に踏みにじると、左腕を鋼糸のドリルに変え、振りかぶった。

【未来】

『響——ッ!!』

ヘッドギアを通して親友の声が届くも、キャロルを振り払うだけの力は出なかった。

殺されることを覚悟し、目を固く閉じた——その時、

【???】

「があああああつ!!」

戦場に獣のような咆哮が響き渡った。

響は驚き目を開けると、翼とクリスを取り囲んでいた一部のアルカ・ノイズがこちらに向かって飛んできた。

自分とキャロルに激突するかと思われたが、キャロルは何の躊躇いもなく自らの呼び出した兵隊を切り刻む。



【キャロル】

「……何だ？」

目を細めるキャロル。

視線の先では群れていたアルカ・ノイズが再び蹴散らされ、視界が開けると、そこには病人服を着た白髪の男が立っていた。

【クリス】

「あいつは!？」

【翼】

「黒銀、轟……?！」

翼とクリスも乱入者の姿を見て啞然とする。

轟は自分よりも大きな鉄骨を軽々と振り回し、アルカ・ノイズを薙ぎ倒すと、響を踏みつけるキャロルに飛び掛かった。

キャロルは響から飛び退くと、入れ替わりに近くへ着地した轟は、手に持った鉄骨をキャロルに向けて放り投げる。

【キャロル】

「フンッ」

飛んできた鉄骨をダウルダブラで軽々と裁断する。その間に轟は距離を詰め、キャロ

ルの顔面を狙って拳を突き出した。

だが、キャラルが目の前に作り出した障壁に、素手の轟は逆に自らを傷つけられキャラルから距離を取る。

【轟】

「ガルウウウ……！」

【キャラル】

「……ミカを退けた獣ケダモノか」

唸る轟を見て、キャラルは合点がいったとばかりに頷く。その間に、翼とクリスは倒れたままの響に駆け寄り、その身体を抱き起こした。

【翼】

「大丈夫か、立花?!」

【響】

「翼さん……、私は何とか。でも……」

響の視線は、自分達に背を向ける青年に移る。

轟は変わらずキャラルと睨み合っていたが、その沈黙を意外なことにキャラルの方が崩した。

【キャラル】

「随分と野蛮な登場じゃないか?……まあいい、それより聞きたいことが山程ある。……お前は何だ?見たところ聖遺物を所持している訳でもない。なのにこのパワー、普通の人間には有り得ん」

【轟】

「……当然だ。俺を下等な人間共と一緒にするな」

【クリス】

「あいつ、言葉を?」

轟の喋ったところを初めて見たクリスは目を丸くする。だが、キャロルは特に気にした風もなく、より轟に興味を引かれた様子だった。

【キャロル】

「ほう、面白い。人間でないなら、お前は一体なんだ?」

キャロルの問いに、クリス達も聞き耳を立てた。謎の多い青年の素性が、本人の口から語られるかと期待してのことだったが……

【轟】

「俺は俺だ。それ以上でも以下でもない」

何とも要領を得ない答えが返ってきた。

【キャロル】

「成る程。なら、質問を変えよう。何故、オレと敵対する?」

キャロルは特に深く追求せずに、新たな問いを口にした。

それを受け、轟は視線に力を込め、目の前の錬金術師を射抜く。

【轟】

「……気に入らない」

【キャロル】

「何?」

【轟】

「気に入らないんだよ。お前もチカチカも人形も。あいつを泣かせ、オレのエサを横取ろうとした。お前達を壊す理由はそれで十分だ」

【翼】

「餌?」

翼は轟が口にした言葉を繰り返す。

『あいつ』も気にはなつたが、それよりも『エサ』という言葉が引つかかった。

【翼】

（自衛隊の基地なのだから食糧は当然備蓄してある。……だが、この者の言う『エサ』はそれとは違う気がする）

【キャロル】

「何にせよ、オレと敵対する意思に変わりはない、ということか。ならば、オレもこれ以上問うことは無い。邪魔をするならば分解せしめるだけのこと！」

キャロルはダウルダブラの弦を鳴らして魔力を増幅させ、頭上に出現させた魔方陣から灼熱の炎を放った。

生身の人間など全身黒焦げでは済まない熱量が迫る中、轟は一瞬肩越しに振り返る。その視線が響と交差すると、轟は胸の前で腕をクロスさせ、防御の姿勢を取った。

【響】

（まさか、私達を庇って？）

「ダメ！逃げ——」

【轟】

「があああああああああつ?!」

響が叫んだ時には、轟は紅蓮の奔流をまともに受けた。激しい炎は薄い病人服を一瞬で灰にし、その下の肉体も容赦なく焼き焦がす。

【轟】

「——がはっ!」

【キャロル】

「この炎で塵と消えぬとは大したものだ。……だが、もう終わりだな」

普通の人間なら影も形も残らない温度の炎でも、轟の身体は原型を保っていた。

しかし、炭化したといっても過言ではないほどの火傷の前に、轟は力なく斃れようとしていた。

【響】

「轟くんっ!!」

調と切歌を救ってくれた青年が、今もまた自分達を身を呈して守ってくれた。響は崩れ落ちる轟の名を呼びながら、その身体を抱き止める。

既に自らを支える力など無い轟の体重が、響の腕にのしかかる。

腕に感じる重みは、轟の命の重さ――。

【響】

「わた、しは……」

また守れなかった。

自分達を助けようとしてくれた人がやられるのを見ていることしか出来なかった。

胸を苛む悔しさと悲しさが、雫となって頬を伝う。

流した涙が焼け爛れた黒い皮膚へと落ち、弾けた……その瞬間、

【轟】

「——ッ!!」

死に体だった轟が、カツと目を見開いた。身体とは対照的に活力に満ちた瞳が響を捉える。

目の合った響も突然のことに驚くが、轟の行動はそれだけに留まらなかった。

瀕死だったのが嘘のような速さで腕を伸ばし、響の胸、その中央に輝くガングニールのコアを掴みながら響の身体を押し倒す。

【響】

「わわっ!?!」

【翼】

「お、おいっ!」

【クリス】

「お前、何やって——!?!」

いきなりのことに面食らっていた翼とクリスは、我に返るなり響から轟を引き剥がそうとその身体に触れた。——その瞬間、

【響】 【翼】 【クリス】

「「あああああああああああああつ!?!」」

3人は、未体験の感覚に襲われた。

【翼】

「なん、だ、これは？——ああっ!？」

【クリス】

「胸が、身体が、熱い……ツツ！」

【響】

「強い、鼓動を感じるっ。これは、轟、くんの……？」

ある種の快感にすら似た感覚に戸惑う響達。

そんな彼女達の前で最強の存在が、復活に向けて胎動を始めていた。

S. O. N. G 移動本部 指令室——

【未来】

「響ッ!!」

【弦十郎】

「翼！クリスくん！」

【調】

「……どうなってるの？」

【切歌】



「あの人、一体何をしているデスか!？」

響達の異変に、指令室も騒然となっていた。

医務室から戻った後、キャロルの業火に斃れる轟の姿に口許を覆っていた調と切歌も、今は目の前の光景に狼狽えている。

そんな中、原因を調査していた藤堯が、装者達のパラメーターを見ながら驚愕した。

【藤堯】

「な、何なんだ、これ!？」

【マリア】

「何が起きているの!？」

【藤堯】

「装者3人のフォニックゲインが低下……いえ、流出していきます!」

【緒川】

「流出?」

【エルフナイン】

「……まさか」

【あおい】

「エルフナインちゃん?」

エルフナインは一つの可能性に思い至った。黒銀轟の語った『エサ』とは、フォニツクゲインを指すのではないかと。

彼が調や切歌、響達を守ったのは、彼女達が自分のエネルギーを産み出す存在だと本能的に察知したから。

突飛な発想かもしれないが、そう考えれば全ての辻褄が合う。

【エルフナイン】

（そうだとしたら、フォニツクゲインを吸収し自らの力に錬成する器官が存在するはず。……考えられるとすれば——）

エルフナインが更に思案を巡らせていた時、傍観に徹していたキャロルが動いた。

【キャロル】

『何を遊んでいる？死に損ないはとつと消えろ！』

叫ぶなり3体のイモムシ型アルカ・ノイズをけしかけた。イモムシ型は車輪のように回転し、解剖器官の刃を唸らせながら迫る。

翼達はエネルギーを吸われているせいで迎撃できない。……そう思われた。

響を見下ろしていた轟が、迫るイモムシ型を見据えた。

その瞬間、指令室の面々とキャロルまでもが寒気のようなものを感じ、たじろぐ。

直後、イモムシ型3体は横から何かに殴られたように身体を押し潰された。

【クリス】

『せ、先輩……』

【翼】

『……雪音も見たのか？今のは、一体？』

臆気ながら見えたもの。それは、巨大な生物の尻尾のようであった。

【キャロル】

『……貴様、一体何をした？』

【響】

『轟、くん？』

全員が戸惑う中、轟はふらつと立ち上がり、響から離れた。数歩歩いた所で止まり、無言で立ち尽くす。

言い知れぬ威圧感に沈黙する戦場。

その沈黙は、唐突に破られた。

【轟】

『うおおおおああああああ!!』

轟は天に向かって野獣のように咆哮した。

すると、焦げていた表皮が弾け飛び、内側から青白い光が溢れ、轟の身体を包み込む。

【マリア】

「何なの、あの光は?!」

【エルフナイン】

「あれは……。そうか、やっぱりそうだったんですね!」

光を見て、エルフナインは得心がいったように叫ぶ。

青白い光は無数の粒子、轟の体内を巡る未知の細胞の集合体であった。

轟の身体を包み込んだ光の粒子は、通常の人間とは異なるシルエットを象ると、手足の先端から轟の身体へと固着していった。

美しい光の演<sup>イリュージョン</sup>出。しかし、S. O. N. Gメンバーは、似た光景を目にしたことが

あった。

それを証明するデータが、指令室のサブスクリーンに表示され、弦十郎は眩いた。

【弦十郎】

「フォニック、ゲイン……」

直後、轟の全身が眩く発光した。全員が視界を奪われ目を庇う。そして光が収まり、モニターに目を戻した全員は言葉を失った。

轟が立っていた場所に佇んでいた存在<sup>もの</sup>の存在。

それは、青白い光とは対照的な漆黒の鎧に身を包んだ「怪獣王」の姿であった。

【調】

「あれ、は……」

【切歌】

「昨日の、きょう、りゆう？」

調と切歌の言う通り、その姿は昨日の赤黒い影と非常に酷似していた。

頭部は顔面に至るまで黒い装甲で覆われ、双眸のみが黄色く輝く。太い四肢の先端には、鉄をも紙切れのように引き裂く鋭利な爪を備え、重厚なボディーはミサイルの直撃にも傷一つ付くことはない。

何より特徴的であったのは、背中に並ぶ剣のような3列の白い背鰭とそれに連なるように伸びた長く強靱な尻尾を持つことであった。

【キャロル】

『……その姿は何だ？お前は本当に、何者なんだ!』

キャロルは明らかに動揺し、目の前の存在に語りかける。そこに、数百年の永き渡つて身に付けた英知を以て、S・O・N・Gメンバーを追い詰めた強敵としての余裕はなかった。

キャロルはまだ知らない。

目の前の存在が、別世界の地球を震撼させた大怪獣であることを。

そしてその姿と力を、フオニツクゲインを基にシンフォギアとして新生させたということ。

【ゴジラ／轟】

『ガアアオオオオオオオオオオオオオオオオウウンツ!!』

キャロルの問いに応えるように、新たな姿へと『変身』を遂げたゴジラは、逆襲の狼煙となる咆哮を天高く轟かせた――。

# #04 革新—Symphogear—

【ゴジラ／轟】

「ガアアオオオオオオオオオオオオオオオオウウンツ!!」

新たな姿を得て天高く咆哮するゴジラ。

その後ろ姿を、響達は信じられないといった様子で見つめていた。

【響】

「轟くん、なの?」

【翼】

「この迸るフォニックゲイン……、やはりシンフォギアか?」

【クリス】

「だとしても変わりすぎだろ!」

ゴジラの全身鎧姿は、クリス達の戦装束とは趣がまるで違う。

クリスの言い分はもつともだったが、異なる姿に変わるという意味合いでは、轟の方がより『変身』と呼ぶに相応しいかもしれない。

【弦十郎】

『響くん、翼、クリスくん!』

【響】

「師匠!」

【翼】

「司令!」

【クリス】

「オッサン!」

ヘッドギアを通して聞こえた弦十郎の声に、響達は三者三様の呼び名で応えた。

3人の声を聞き、通信越しに安堵の声が漏れる。

【緒川】

『3人とも無事みたいですな』

【未来】

『響、本当に大丈夫? 痛いところとか無い?』

【響】

「大丈夫だよ、未来。……でも、ちよつと疲れたっていうか、力が抜けちゃった感じ、かな?」

響は拳を開閉した後、自分の胸に手を当てる。



轟に触れられていた時の胸が熱くなる感じは収まっていたが、代わりに虚脱感のようなものが残っていた。

【藤堯】

『それにしても他者のフォニックゲインを奪うとは……』

【あおい】

『でも、吸収されたのがフォニックゲインだけで良かったわ。ネフィリムのように聖遺物ごと喰らうタイプだったらと思うとゾツとしないもの』

【マリア】

『そう言われれば、ギアの起動に聖詠を用いなかったわね。聖遺物を所持していた訳でもないというし……』

安堵の後、指令室では改めて轟の変身についての疑問が上がる。しかし、そんな話を聞いている時間は無いようだ。

轟の変身に動揺していたキャロルが、テレポートジェムから先程蹴散らされた以上の数のアルカ・ノイズを召喚してきた。その中には、怪獣のような体躯をした大型個体も混じっている。

【キャロル】

「……どうやらそれもシンフォギアらしいな。オレも知らない聖遺物の力……、どれ程

のものか歌って聴かせてもらおうか！」

キャロルの叫びに応え、アルカ・ノイズの群れが一齐に突撃を開始した。それを見たゴジラも、目の前から突っ込んでくる個体群目掛けて突進する。

先手を取ったのはアルカ・ノイズ側であった。

イモムシ型数体が身体を縦に回転させながらゴジラにぶつかる。解剖器官の刃が火花を散らす、漆黒の装甲には傷一つ付けられなかった。

それに対し、ゴジラは両腕を横に思い切り広げ、両側から胸の前に向けて一気に閉じる。

密着していたイモムシ型は、プレス機にかけられたように赤い霞を撒き散らしながら圧殺された。

【ゴジラ／轟】

「グルアアアッ!!」

ゴジラは唸りを上げ、新たな標的を見定める。次に挑んできたのは翼やクリスのギアを分解した武士型個体であった。

武士型はゴジラの右前方から接近し、左腕のブレードによる刺突を繰り返して来る。それを見たゴジラも左腕を振るって真っ向から迎え撃った。

ブレードと裂爪が激突する。

だが、そこに僅かな拮抗も生まれることはなかった。ゴジラは力のままに腕を振り切り、武士型は腕ごとブレードを切り裂かれその場に倒される。

ゴジラはトドメを刺そうと武士型を見下ろすが、後方から10体を超える人型アルカ・ノイズが触手状の解剖器官を伸ばし、ゴジラの身体に巻き付けた。

援護を受けた武士型個体は素早く立ち上がると、残った右のブレードをゴジラの胸に突き立てようと振りかぶる。

【翼】

「あのままではマズイ！雪音、援護——」

劣勢に陥ったと思った翼は、クリスと共に人型の群れを排除しようとする。しかし、ゴジラにそんな必要はなかった。

【ゴジラ／轟】

「ガアアアアアアッ!!」

ゴジラは持ち前の怪力を発揮し、解剖器官の触手を引き千切った。その内の何本かを右腕で掴むと、前方に向かって投げ飛ばす。

投げ飛ばされた人型は前方の群れに激突し、突きを繰り出してきた武士型も振り下ろした右腕に巻き込まれ地面にめり込む。

そこへゴジラは左足で容赦のない蹴りを放ち、めり込んだコンクリートごと蹴り飛ば

された武士型は、仲間にも衝突してもろとも破裂した。

【クリス】

「なんつー馬鹿力……ゴリ押しにも程があんだろ！」

無茶苦茶な戦い方に思わず突っ込むクリスの前で、ゴジラは全身を捻って身体を回転させた。

回転に連動して身長以上の長さを誇る尻尾が唸りを上げる。

尻尾は関節部を伸ばして更に長さを増しながら振り抜かれ、自身を中心に半径10mの敵を全て薙ぎ倒した。

【あおい】

『黒いシンフォギア、エネルギー出力上昇！』

【藤堯】

『歌わずに出力を上げるなんて……』

【キャロル】

「嘗めてくれるな、ケダモノ 獣が！」

【ゴジラ／轟】

「グツツ——!？」

近くの敵を蹴散らしたゴジラに、キャロルは右腕でダウルダブラの斬糸を振るい、左

腕で弦を奏でて光の矢を乱射した。

鋼糸はボディーに当たって火花を散らし、光の矢は数本が顔面にヒットしてゴジラを僅かに怯ませる。

【キャロル】

「解剖出来ぬのならば、その鎧、力づくでブチ砕いてやる!!」

キャロルの声を合図に、パイプオルガン型アルカ・ノイズが頭部の発射管から『赤い』砲弾を斉射した。

解剖器官は効果がないと知りながら繰り出した一手に、響達は首を傾げる。

【エルフナイン】

『違います！あれは——』

唯一キャロルの狙いに気付いたエルフナインの声は、戦場に轟く爆発音に掻き消された。

パイプオルガン型の放った砲弾、それは解剖器官を内包した物ではなく、爆発性の高い炎魔法を凝縮した物だった。

地面やゴジラに当たった瞬間、砲弾は激しく炸裂し、熱と衝撃がゴジラを襲う。

【ゴジラ／轟】

「ギヤアウウウツッ！」

炎と煙の中にその姿が消えても、アルカ・ノイズの砲撃は止まなかった。

【響】

「轟くん！」

【翼】

「待て、立花！今飛び込んだら巻き添えを食う！」

いてもたってもいられず飛び出そうとした響を翼が押さえた。

響達は何もできずに見ている間も、キャロルが手で制すまで砲撃は続いた。

【キャロル】

「逃げもせずにもともに食らうとは。耐えられると思ったのか、それともこの程度の攻撃も避けられない程鈍重なのか……。何れにせよ無傷では——」

確かな手応えにキャロルは笑みを浮かべていたが、最後まで言葉を言いきる前に固まった。

視線の先、黒煙の向こうで何か揺らめく。

キャロルは「まさか……」と呟くと、風の魔法で煙を吹き払う。黒い帳が消えた跡に現れたのは、僅かに砂埃を被っただけのゴジラの姿であった。

【弦十郎】

『あれで無傷、だと？』

【エルフナイン】

『有り得ないです！あの魔力はキャロルが自らインストールしたもののなのに』

誰もが驚愕する中、ゴジラは首を左右に捻りゴキツゴキツと鳴らす。

ダメージとしては効いていなくとも、絶え間なく浴びせられた音と光がゴジラの神経を逆撫でしてしまったようだ。

【ゴジラ／轟】

「——ギンツッ！」

【キャロル】

「——ツッ!？」

強く瞬いた黄色の瞳が自分を捉えた瞬間、キャロルは自分の心臓が痛い程に脈打つたのを感じた。

胸に響く鼓動、それは防衛本能が命の危機を報せるものだ直感する。

【藤堯】

『黒いシンフォギアから今までにない高エネルギー反応！』

藤堯が報告したのとキャロルが目の前に障壁を展開したのはほぼ同時だった。直後、ゴジラが大きく息を吸い込むように身体を仰け反らせる。

3列の背鰭が青白い光を放ちながら激しく明滅した後、クラッシュヤー頭部装甲の口部分が展開し、

マスク  
装甲の下の人間の口部が露になった——次の瞬間、

【ゴジラ／轟】

「ガアアアアアアアアアアアアアアアアアッ!!」

凄まじい咆哮によって、開口したクラツシヤー前面に生じた力場から青白い光が撃ち放たれた。

《放射熱線》

【キャロル】

「これは——ッ!?!ぐあああああああつ!!」

熱線はジェット機のような轟音を上げながら一直線に空を駆け、キャロルの展開した障壁に直撃する。

キャロルは魔力を集中して跳ね返そうとするも、熱線の威力を殺すことは出来ず、障壁は激しい爆発起こし、キャロルも近くの建物の中へ叩き落とされてしまった。

【ゴジラ／轟】

「ガアアアオオオオオオオオオオオンッ!!」

【切歌】

『な、……なん、デスカ、今の?』

【調】



『きれい……』

目の前で起きたことが理解できず、切歌は茫然自失といった様子で眩き、調は圧倒的光景に心奪われていた。

翼や弦十郎といった永きに渡りノイズという異形の存在と戦い続けてきた古参の者達も、言葉を発することが出来ないでいる。

ゴジラ最大の武器は、実際の威力もさることながら、歴戦の戦士の心にまで衝撃を与えていた。

アルカ・ノイズは主がいなくなつたことで、統制が乱れつつあつた。ゴジラはそれを見逃さず、先程の礼とばかりにパイプオルガン型の集団に向かって熱線の第二波を放つた。

集団の左端に着弾するや否や、首を巡らせ熱線を右方向へ薙ぎ払う。

熱線の直撃を受けた個体は赤い塵すら残さず焼滅し、そのまま地面に当たつた熱線によつて引き起こされた爆発が他のアルカ・ノイズも誘爆させていった。

【クリス】

「なんて火力だよ……。まるで《カ・ディンギル》の荷電粒子砲じゃねえか」

着弾点が熔岩の流れた跡のように燃え爛れる様を見て、クリスは「ルナアタック」事件の首謀者であるフィーネが建造した超兵器を想起した。

【あおい】

『……威力、熱量ともにクリスちゃんのイチイバルを遥かに上回っています！』

【マリア】

『そんな攻撃をほぼチャージ無し、インタクトル間隔も殆ど空けずに連射できるなんて……』

【エルフナイン】

『最早、シンフォギアシステムの範疇を逸脱しています』

クリスの眩きを大袈裟と否定する者は誰もいなかった。

有り余る熱線の威力によって、アルカ・ノイズは怪獣や巨人を思わせる大型個体と少数の小型個体を残すのみとなってしまった。

最早勝負あったと思われた時、突っ込んだ建物を吹き飛ばし、キャロルが舞い戻ってきた。

【キャロル】

「……お前のような者にオレが土を付けられるとは——！」

(オレの計画に、こいつは邪魔だ。何としても今日この場で葬り去る！)

ゴジラ必滅を決意したキャロルは、ダウルダブラで四肢と触角が生えたナメクジのような怪獣型を吊り上げ、ゴジラに向けて投下した。

20mはあろうかというナメクジ型は、小型個体とは比較にならない重量と解剖器官

でそのまま巨大な質量兵器と化し、ゴジラにのし掛かる。

だが、ゴジラはその巨体を片腕一本で受け止めると、もう一方の腕で腹部を突き上げ、背部まで貫通する大穴を穿った。

ナメクジ型は雨のように赤い塵を撒き散らして消える。消えた先にあるのは、戦場には似つかわしくない青空……のはずであった。

ナメクジ型の消えた上空、そこには無数の小さな黒点と巨大な白い塊が浮遊していた。

【あおい】

『飛行型アルカ・ノイズ、横須賀基地上空に集結！その数……1万以上!』

【弦十郎】

『迎撃に出た空自はどうした!』

【藤堯】

『厚木から急行した先遣隊は、全機撃墜された模様です!』

リーダーに映った敵影の数に、あおいは驚愕の叫ぶを上げた。

藤堯の報告にあった通り、政府の要請で緊急発進した空自の航空部隊は、アルカ・ノイズの物量の前にろくな戦果も挙げられずに敗北していた。

巨大な空母型の4つの孔からは、今もなお蝙蝠型の小型個体が排出され続けている。

【キャロル】

「炎が効かぬ貴様にも、1万を超える質量弾の雨に無傷ではおれまい?」

自身の上空を埋め尽くした飛行型を仰ぎ見て、キャロルはほくそ笑んだ。

内心、これだけの数で圧しても倒せるとは思っていない。だが、僅かでも綻びが生じれば、そこに自分の最大火力を叩き込む算段をつけていた。

創造主の意を汲んだ有翼の殺戮者達は、地上に立つた一つの目標に向かって降下し始めた。

蝙蝠型の群れは「「rb:楔型」>「アローヘッド」」に並んで突っ込み、目標を射程に収めると翼で胴体を包んだドリルのような形態となって特攻した。

【ゴジラ】

「ガアアアツ!!ガアオオオオオオオンツ!!」

ゴジラに直撃、或いはその周囲に着弾した蝙蝠型は、玉砕しながら路面を抉り、装甲表面で火花を散らした。

地震のような断続的な震動が続く間も、蝙蝠型はシャワーのように絶え間なく降り注ぐ。

【緒川】

『これは、流星にまづいのでは?』

【弦十郎】

『藤堯、援護だ！殲滅できなくて良い！逃げられるだけの間隙を作れ！』

【クリス】

「先輩ッ！」

【翼】

「ああっ、私達も！」

弦十郎は艦の垂直発射装置からアルカ・ノイズに向けてミサイルを射出、翼とクリスも地上から光刃と小型ミサイルを放って蝙蝠型を撃ち落とす。

爆発と吹き荒れる爆風により蝙蝠型の隊列が乱れ、僅かだが特攻に間隙が生じた。

【響】

「今だよ！轟くん、早くにげ——」

チャンスを見逃さず響が叫ぶ。しかし、その言葉の途中で、ゴジラはまた背鰭を青く発光させ始めた。

【切歌】

『さ、さっきのをまた撃つつもりデス!?!』

【エルフナイン】

『確かにあの攻撃は強力ですが、あの細いビームで飛行能力を持つ敵を殲滅することは

不可能です！」

エルフナインの言う通り、熱線の発射体勢と見て取った飛行型個体は隊列を解き、散開を開始していた。

確かに、熱線で一匹一匹撃ち落とそうと思えば、ゴジラの方が先にガス欠になるだろう。

【調】

『……ちがう』

【未来】

『調ちゃん？』

【切歌】

『どうしたデス、調？』

【調】

『……さつきと違う。光っている時間が長い』

全員がゴジラの背鰭に注目する。

調の言う通り、先程は発光後間もなく激しく明滅していた背鰭が、明滅せずにつと発光を続けていた。

いつまでも攻撃が来ないのを見たアルカ・ノイズは、散開を中止して再び特攻の雨を

降らせようと動き出す。

そのタイミングを待っていたかのように、ゴジラは身体を反らし、背鰭を先程以上に激しく明滅させた。

【ゴジラ／轟】

「ゴオオオオアアアアアアアアアアアアアアアアアッ!!」

ゴジラは前の2発と同じモーションで熱線を放つ。しかし、その規模は全く比較にならないかった。

《ハイパー熱線》

長い溜めを経て放たれた熱線は、通常の熱線の3倍以上の太さを誇り、発射の反動で周囲の瓦礫片が吹き飛ばされる。

極太の熱線に呑み込まれた飛行型アルカ・ノイズは、赤い塵すら残さず消え去り、僅かに掠めただけの個体も炎を吹き上げながら墜ちていく。

2発目同様、ゴジラは熱線を横方向に薙ぎ払い、小型個体を一掃すると、最後にそれらを生み出す空母型に熱線を向けた。

飛行船以上の巨体に灼熱の蒼き奔流が襲いかかる。

大型種の中でもトップクラスの体躯を持つ空母型の身体は、ひび割れるように崩壊していき、最期は空に巨大な炎の花を咲かせた。

【あおい】

『……飛行型アルカ・ノイズ、反応……消失ロストしました』

【弦十郎】

『……何という』

レーダーにひしめいていたアルカ・ノイズを示す光点が、僅か数秒で影も形も残さず消え去った。

上空を映し出したモニターは、昼間の晴天下とは思えない炎と黒煙に覆い尽くされている。

あれだけの数、万全な状態の装者達も総力戦を強いられるだろう。それを一撃で殲滅した破壊力は、一国家の軍事力に匹敵する。弦十郎はそう推察し慄いていた。

煩わしいハエのような敵を排除したゴジラは、大きく息を吐くと次の敵へ向かおうとする。

その身体を、四方から張り巡らされた極細の糸が縛り上げた。

【ゴジラ／轟】

「グウツ？」

【キャロル】

「油断したな。あれだけのエネルギーの放出、そうそう連射は利くまい？」



キャロルの言う通り、ハイパー熱線は絶大な威力と攻撃範囲を誇る反面、エネルギー消費が激しくチャージに時間を要するため連射が利かない弱点があった。

更にキャロルは、ゴジラの装甲にダウルダブラの『斬撃』は効かないが、身動きを封じる程度は可能であるとこれまでの手合いで見切っていた。

事実、不意を突かれたゴジラは、自らを拘束する鋼糸を振り払えずにいた。

これを好機と捉えたキャロルは、残存のアルカ・ノイズをゴジラに向けて突撃させた。人型、イモムシ型、武士型等見慣れた個体が多い中、最も目を引くのが首の無い胴体に顔があるような異形の巨人型3体。体高10mと怪獣型に比べて見劣りするが、二足歩行で突っ込んでくる様は大きさ以上の迫力があつた。

【キャロル】

「遠近共に破壊力絶大。だが、身動きが取れぬ今は格闘戦能力半減だ！」

【ゴジラ／轟】

「……フウウ」

キャロルが叫んだ直後、ゴジラは背鰭を発光させ、熱線の発射準備に入った。

【キャロル】

（やはりそう来るか。だが、それくらい想定内だ。身動きが取れぬ以上、お前の切り札は真正面にしか吐けまい！デカブツ1体を捨て石に、他の個体で蹂躪してやる！）

キャロルは手元の鋼糸を引きながらアルカ・ノイズが腕を、刃を振り上げるのを口許を吊り上げて見ていた。

ゴジラは、キャロルの見立て通り首を巡らせることが出来ずにいた。……だが、もし首が自由に動いたとしても、ゴジラには熱線を吐くつもりはなかった。

この時、キャロルはもつと疑うべきであった。——熱線を吐くにしては、あまりにも敵を引き付けていたことに。

【ゴジラ／轟】

「ガアアアアアオオオオウウンツ!!」

アルカ・ノイズの攻撃がヒットする直前、ゴジラはクラツシャーを閉じたまま天を仰いで咆哮した。

《体内放射》

熱線の時同様、背鰭が激しく明滅する。だが、ゴジラが放つたのは自身を中心に放射状に発する衝撃波であった。

【キャロル】

「なにっ!？」

熱線が来ると思い込んでいたキャロルは完全に不意を突かれる形となった。

全身から発せられた衝撃波は、ゴジラの立つ場所をクレーターのようにに陥没させる。

そして、身体に巻き付いていた鋼糸をズタズタにし、至近距離まで近付いていたアルカ・ノイズ群を吹き飛ばした。

純粋な破壊の波動のみを放つこの技の前では、如何なる防御手段も意味を為さない。まさに、ゴジラの接近戦における切り札であった。

【ゴジラ／轟】

「ガアツツ！」

【キャロル】

「くっ、あああああっ?!」

体内放射によって束縛から解放されたゴジラは、空中に漂う千切れたダウルダブラの鋼糸を掴むと力任せに引っ張り、本体を背負うキャロルを自らの後方に向かって投げ飛ばした。

【キャロル】

「がはあっ?!」

瓦礫の山に背中から落とされ、キャロルは息を詰まらせる。

苦しみながら、追撃を警戒し直ぐ様身体を起こしたキャロルだったが、当のゴジラはキャロルに目もくれず、腕や足を千切り跳ばされながらも生き残っていた巨人型を屠っていた。

【キャロル】

「……オレなど眼中に無いとでも言うのか？」

巨人型の身体を引き千切るゴジラの後ろ姿に、鬼の形相で絞り出す。

プライドを傷付けられたキャロルは、今出せる最大の力で以てゴジラを殺す決意を固めた。

両肩の弦を掻き鳴らし、魔力を爆発的に増幅させる。更にダウルダブラの鋼糸を、目の前で螺旋状に編み込んだ。

【キャロル】

「炎の破壊力と風の速度、そして鋼糸の切断力。その全てを束ねたこの一撃に貫けぬ物は無い……!!」

「この一撃で、原形残さず分解バラされろお!!」

増大したエネルギーを感じたゴジラがキャロルに向き直った時、キャロルは錬成した魔力と鋼糸を解き放った。

束ねられた鋼糸に沿うように風と炎が入り乱れる。風の力によつて炎はより激しさを増し、鋼糸の切れ味を研ぎ澄ます。

その様は、神をも穿つ滅槍の如し。直撃すればゴジラもただでは済まなかった。……直撃すれば。

【ゴジラ】

「グウウウウウ……！」

キャロルの最大破壊攻撃を前に、ゴジラも自身の最大の武器で応じようとしていた。背鰭を発光させ、エネルギーをチャージし、そこから更にエネルギーを一点に凝縮し始める。

発射の直前、背鰭が激しく明滅するが、加えて今度は強烈な電撃も迸る。

キャロルの滅槍がゴジラの眼前に迫った刹那、ゴジラは大きく胸を張り——

【ゴジラ／轟】

「ガアアアアアアオオオオオウウウンッ!!」

咆哮と共に“渦巻く紫電”を纏った熱線を放射した。

《スパイラル熱線》

完全に出遅れたタイミング。眼前まで迫った攻撃を押し返すことは本来なら不可能だろう。

だが、螺旋を纏った熱線は、激突した竜巻の槍を瞬く間に綻ばせ、僅かな抵抗も許さず押し返していった。

【キャロル】

「ぐううう!?!ば、バカな……！」

キャロルは更に魔力を込めるが、熱線の勢いが衰えることは無かった。逆にダウルダブラの方が負荷に耐えかね、弦が切れ、フレームがひび割れる。

【キャロル】

「ぬううう——!? ああああああああつ!!」

抵抗虚しく、キャロル渾身の一撃は儂く砕かれ、キャロル自らも紫電迸る蒼き閃光を浴び、激しい爆発に呑み込まれた。

【響】

「……勝っちゃった? たった一人で、あのキャロルちゃんに?」

キャロルが爆発に巻き込まれたのを見て、響は呆然と呟いた。

自分達が束になって手も足も出なかった相手を、轟は全く寄せ付けなかった。

同時に1万を超える軍勢をも屠り去った力。

だが響にとって、それは奇跡エクストライプの跡のような神聖なものとは全く異質のものに思えた。

【ゴジラ／轟】

「——ッ!」

【藤堯】

『目標の反応、健在!』

ゴジラが双眸を光らせたのと、藤堯が叫んだのはほぼ同時だった。爆発の煙が晴れ、視界が開ける。

現れたのは、元の少女の姿に戻ったキャロルの姿だった。

キャロルは左腕を押さえ、頭からは血を流している。

【緒川】

『あの攻撃に耐えるとは……』

【エルフナイン】

『寸前に身を捻って直撃は回避していたみたいです』

【弦十郎】

『それでも、無事では済まなかったか』

【あおい】

『はい。アウフヴァアツヘンが消失している点から見ても、彼女の聖遺物は恐らく——』

あおいの推察通り、ダウルダブラは熱線のダメージで損傷、ファウストローブとして機能させることが不可能な状態になっていた。

【キャロル】

『……やってくれたな。ここまで俺を追い詰めるとは……ゴホッ』

咳き込み膝を折りかけるキャロルだったが、何とか堪えると、口許に笑みを作った。

【キャロル】

「だが、お陰で目的は果たした」

【マリア】

『何を言ってる——ッ?!』

キャロルが呟いた直後、基地全体を揺るがすような轟音が響いた。

音の発生源はキャロルの後方——この基地の発電施設からであった。

【切歌】

『な、何が起きてるデスか!?!』

【藤堯】

『発電施設の制御システム大破！送電停止しました!』

【調】

『まさか、さっきので?』

【あおい】

『おそろくね……。施設内で火災発生！防災装置作動しません!』

何枚ものソーラーパネルを備えた施設は、各部から爆発や炎が上がっている。スパイラル熱線がキャロルに直撃しなかったことで、後方の発電施設にまで被害が及んでしまったのだ。



……勿論、キャロルはそこまでを見越した上で射線上に施設が来るポジションから攻撃をしていた。

【キャロル】

「……しかし、払った代償はデカかったか。これではその歌女共ウタメの相手も出来ん。……今日のところは、大人しく退くとしよう」

キャロルはそう言うのと、懐からテレポトジエムを取り出した。

ミカとファラが逃げた際のことを思い出し、キャロルが逃走を凶ろうとしていることに気付いたゴジラは、逃がすまいと熱線の発射体勢に入る。

【翼】

「やめろ、黒銀！今撃つては——」

【ゴジラ／轟】

「グウウアアアアアアアッ!!」

翼の制止に耳を貸さず、ゴジラは追撃の熱線を放った。

基地敷地を挟りながら迫る青白い光を見て、キャロルはほくそ笑みながら手に持った結晶を砕く。

【キャロル】

「また会おう、黒き獣よ。次会う時は、必ずお前の正体を暴いてやる！」

そう言い残し、キャロルは転移の光に消えた。

直後、振り上げるように放たれた熱線はキャロルが消えた場所を通過、炎を上げる発電施設を1階から最上階まで駆け抜け、発電施設を完全に破壊・崩落させた。

【あおい】

『キャロル・マールス・デインハイムの反応、消えました』

【藤堯】

『周辺に敵残存勢力の反応も認められません』

【弦十郎】

『……終わった、か』

【ゴジラ／轟】

「ゴウウウン……。ガアアアアオオオオオオウウンツ!!」

キャロルを取り逃がしたことに納得はいかなかったものの、降りかかる火の粉を排除したゴジラは、廃墟然となった基地内で勝利の咆哮を轟かせた。

【クリス】

「ガオー、じゃねえよ！お前！敵に勝つても、基地を守れなきや意味無えじゃねえか！」

【翼】

「止せ、雪音！」

【クリス】

「止めるな、先輩！一発ガツンと——」

殴りかかる勢いのクリスを翼が止めていた時、咆哮を終えたゴジラが、身体ごとゆっくりとクリス達の方を向いた。

視線に気付いたクリスは騒ぐのを止めるが、ゴジラは彼女達の方へ歩み出す。

【クリス】

「な、何だよ!?!」

【マリア】

『まさか、次は翼達を?!』

クリス達は身構えるが、今までの戦いぶりを見せられた後では、到底太刀打ちできる気がしなかった。

熱線を一発でもまともにもらえばそれで終わり。装者達の緊張が張り詰めるが、ゴジラは特段攻撃する素振りを見せなかった。

響達が身動きが取れない中、ゴジラは彼女達のすぐ近くで立ち止まった。尻尾がゆらゆらと揺れる以外、全くアクションを起こさず、戦慄するような殺気も怒気も消えていた。

【響】

「びい、轟くん？」

【翼】

「待て、立花！迂闊に近付いては——」

沈黙に耐えかねた響が歩み寄ろうとするのを、翼が止めた。——その時、

【クリス】

「ッ!?先輩!」

異変に気付いたクリスの声に、響と翼はゴジラに目を向ける。

視線の先では、ゴジラが立ち止まったまま全身から青い光を溢れさせていた。

【弦十郎】

「さっきの範囲攻撃か!?3人とも、すぐに距離を取れ!」

体内放射の予備段階と予測した弦十郎の叫びがヘッドギアから流れるが、既にゴジラの発する光は最大に達していた。

退避は間に合わない、響達は防御の姿勢を取る。——しかし、それは杞憂に終わることになった。

激しい衝撃が予想された中、ゴジラを包んだ光は無数の粒子となり、光蟲のように四散していった。

響達は、顔を庇っていた腕を退ける。光が消えた跡、そこにいたのは黒い鎧を脱ぎ

去った青年の姿だった。

【藤堯】

『フォニックゲイン、及びアウフヴァアッヘン、消失しました』

指令室から藤堯の報告が入るが、女性陣の中で耳に入ったものは誰もいなかった。

人間態に戻った轟の身体からは、キャロルから受けた傷はきれいさっぱり消えていた。しかし、治っていたのは身体『だけ』で、服は炎によって燃え落ちたまま、下半身が辛うじて隠れているだけであつた。

【マリア】【調】【切歌】【未来】

『』……………／／／／『』

【翼】

「な、ななな…………ツ／／／／」

【響】

「う、うわあ／／／／

【クリス】

「…………お前は。また、んな格好になりやがって……ッ！／／／／」

【響】

「おおお落ちて着いてクリスちゃん！／／／／」

年頃の少女達が皆顔を赤らめる中、羞恥に加えて怒りで顔を真っ赤にしたクリスは、轟に詰め寄りながら、拳を振りかぶった。

響の制止も振り切り、生身の顔面に全力の右ストレートが炸裂！……かと思われたが、クリスのパンチがヒットする前に、轟は前のめりに倒れ伏した。

【クリス】

「あ、あれ？」

【翼】

「雪音！お前、また！」

【クリス】

「ち、違うって！当てる気だったけど、まだ当たってねえよ！おいつ、しっかりしろよ！」

【響】

「轟くん!？」

響と翼が駆け寄り、殴ろうとしたクリスも戸惑いながら屈みこむ。

見た目無傷とはいえ、激しい戦いで身体が限界を迎えたと思った翼は、救護班を手配しようとして通信を開く。

【翼】

「司令、至急救護班を！黒銀が意識ふめ——「ぐううううううう——……い」

切羽詰まった翼の声は、何とも間の抜けた音に遮られた。

翼・響・クリスの3人はキョトンとした顔を見合わせると、視線をゆっくり、同時に下へとスライドさせる。

半裸で横たわる謎多き青年は肩をゆっくり上下させており、加えて再度大きな音を発する。

音は、彼の腹部から聞こえてきていた。

【弦十郎】

『……翼。念のため確認するが、黒銀の容態は一刻を争うものか？』

【翼】

「……………いえ」

顔は見えなくても、弦十郎が額に手を当てる様子がありありと想像できた。姪の翼も、同じように眉間に指を当てている。

【エルフナイン】

『……そういえば、昨日から何も口にされていませんでしたね』

【マリア】

『生理現象なのだから仕方無い……仕方無いのだけど……ッ』

【響】

「あ、アハハ……」

先程までの緊迫した空気は何処へやら。しかも、それを打ち破ったのが脅威の戦闘能力を見せた本人なのだから、皆笑うか頭を抱えるしかなかった。

【クリス】

「……こいつは、どこまで人騒がせなんだああああ!!」

【響】

「わああああつ!!クリスちゃん、抑えて!!」

全身をふるふる震わせながら激昂するクリスを響が必死に押さえる。その間も、怪獣王の魂の器は、穏やかな寝息を立てていた。



## #05 異質—Stranger—

S.O.N.G 移動本部 指令室——

ゴジラとキャロルの激闘から一夜明け、主要機能を失った横須賀基地に停泊する司令本部に、装者達は集められていた。

弦十郎から状況の整理と重要な案件の為としか聞かされておらず、装者達の表情には固さが見て取れた。

【弦十郎】

「全員揃ってくれたな。先ずは連日の戦闘、ご苦労だった」

【クリス】

「前置きはいからさつさと本題に入れよ」

劳いの言葉よりも、用件が気になって仕方無いクリスが急かす。だが、その本音は、劳いの言葉が心苦しいからに他ならなかった。

基地を守るために戦ったのに、キャロル一人に手も足も出ず、結局敵を追い払ったのは、謎多き青年が纏う黒いシンフォギアだったのだから。

【弦十郎】

「まあ、そう慌てるな。一つ一つ順番に、な。まずはイグナイトモジュールについてだ。  
——エルフナインくん」

【エルフナイン】

「はい」

イグナイトモジュールについての話題に、響と翼が僅かに身を乗り出す。制御に失敗し、暴走まではいかなかったものの闇に吞まれかけた新たな切り札。昨日の戦闘後、メデイカルチェックと同時にエルフナインが改めてギアのデータを収集していた。そこから、制御の為のヒントが得られるかと期待を込めていたのだが——

【エルフナイン】

「データを分析しましたが、モジュールに不備は見られませんでした。ただ僕が思っていた以上に、ダインスレイフの呪いが皆さんの心に与える影響が強かったようです」

【マリア】

「新しいコアには呪いを抑制するリミッターが付けられていたはずよ？それをもっと強くすることは出来ないの？」

マリアの至極尤もな指摘に、エルフナインは首を横に振った。

【エルフナイン】

「リミッターは破壊衝動だけでなく、モジュール起動後の出力にも影響します。今は全

3段階のセーフティーで成り立っていますが、それを増設することは——」

【翼】

「ギアの出力を下げ、戦力増強という本来の目的を果たせない、か」

【エルフナイン】

「その通りです。……でも、何より問題は」

エルフナインは翼の言葉に頷きながら、キャロルに似た顔を陰らせ、続きを口にする  
ことを躊躇した。

【響】

「エルフナインちゃん？」

【弦十郎】

「……大事なことだ。遠慮せず事実を話してやってくれ」

【エルフナイン】

「……分かりました。……問題の根幹は、皆さんの心にあります」

【調】

「私達の」

【切歌】

「心、デスか？」

首を傾げる調と切歌。エルフナインはまだ言うのを憚っていたが、弦十郎の言葉を思ひ出し、装者6人に鋭い言葉を投げ掛ける。

【エルフナイン】

「皆さんは、それぞれトラウマとも呼べる心の闇を抱いていますよね？犯した罪や一人残された境遇、どんなに時を経ても決して褪せることの無い暗い過去を引き摺っている」

その言葉は、響達全員の胸に突き刺さった。

エルフナインの言う通り、6人の心にはどんなに強くなるうとも消えない傷が刻まれている。逆に言えば、彼女達が戦姫としてこの場に立っているのも、その傷が切っ掛けであったのだ。

【エルフナイン】

「心の闇を乗り越えない限り、どれだけシステムを見直しても、皆さんに暴走を、イグナイトモジュールを制御することは出来ません」

【未来】

「で、でも、響は何度も暴走から立ち直ってきたよ!?昨日はダメだったけど、次はきつと——」

未来は、響が完全聖遺物《テュランダル》を手にした影響で暴走しかけた時、自分や

友人達の声で正気を取り戻したことを思い出した。今回は失敗したけれど、次こそは必ず成功してくれる。未来は親友の心の強さを疑わなかった。

だが、そんな未来の希望を、エルフナインはまたしても首を横に振って否定する。

【エルフナイン】

「ダインスレイフの呪いは、手にした者の心を侵食します。まるで悪魔の囁きのように、心の隙間から奥へ奥へと入り込んでいくんです。その魔手は外部からは決して阻むことは出来ません」

「ダウンスレイフに打ち勝つには、皆さん個人の心の強さで、己の弱さをはね除けなければならぬんです」

【響】

「心の、強さ……」

響達は揃って胸に手を当てる。確かに伝わってくる自分の鼓動。自分達の向き合うべきものは、この胸の更に深奥にある。

これまでも決して楽な道じゃなかった。寧ろ、苦難の方が遥かに多かったに違いない。それらを仲間と共に乗り越え、自分達は今ここにいる。

しかし、それが自分の弱さから目を背けることになっていたのでないだろうか？ 助け合うつもりで、実は傷を舐め合っていたに過ぎないのでは無いのだろうか？

自分の弱さ、脆さを自覚しているだけに、そんなマイナスの考えが頭の中をぐるぐる  
と回っていた。

【弦十郎】

「……ということだ。とんだじゃじゃ馬な切り札となつたが、だからこそ使いこなす価値がある！」

「大体、奥義や切り札が一朝一夕で身に付いたのなら、今頃世の中達人だらけだ」

弦十郎は、努めて明るい調子で語った。功夫映画やその類いのノリが好きで彼らしい  
励まし。それで心の闇が晴れるわけではないが、少なくとも今この瞬間の装者達の心  
は、確実に軽くなった。

【翼】

「全く、叔父さまは……」

【響】

「良いじゃないですか！それでこそ、師匠ですよ！」

【弦十郎】

「おつ、流石に分かっているな、響くん！よしっ！ここは一つ心身を鍛え、モジュールを  
ものにする為にとつ——」「特訓はしないからな！」——……おう」

暑苦しいノリの行き着く先を予見したクリスによって、弦十郎は閉口させられた。

眉根を下げた姿を見て、不機嫌そうに眉を潜めていたクリスを含む全員が笑い声を上げる。

【藤堯】

「……良い感じだな」

【あおい】

「フフツ。司令には申し訳無いけどね」

【弦十郎】

「オホンツ。あく、何にせよだ。課題があるならそれを解消する為に力を尽くすしかない。焦らず、出来ることからな」

「『『『『『ハイツ!!』』』』」

照れ隠しの後、司令として、少女達を導く大人としての顔に戻った弦十郎の檄に、響達6人はしつかりと頷いた。

【弦十郎】

「うむ。じゃあ、この話は一旦ここまでにし、次の話に移ろう。……黒銀についてだ」

活力が表れた装者達だったが、轟の名前が出た途端、その表情は不安や戸惑うの混じった微妙なものとなった。

昨日の戦闘後に倒れてから本部に收容されて以降の状況を、装者達は誰も知らない。

【弦十郎】

「こちらについては色々話題が多いが、先ず容態は全く問題ないとのことだ」

【響】

「そっか。良かった……」

気がかかりの一つであった青年の安否が判明し、響は胸を撫で下ろした。

【エルフナイン】

「やはり極度の空腹状態にあったようです。恐らく一昨日以前から何も食べない状態が続いていたんでしょうね」

「収容後、メデイカルチェックと並行して栄養剤の投与を施し、まもなく通常の食事も可能になりました」

【藤堯】

「そこからが大変だったみたいだけどな……」

【切歌】

「どういうことデスか？」

【あおい】

「念のため、最初の食事は消化の良い病人食を少量提供したらしいんだけど、全然食欲が満たされなかったみたいでね……」



【藤堯】

「追加に次ぐ追加で食堂は戦場だったらしい。終わってみれば10人分を超える量を平らげ、緊急で食料を補充することになった」

【未来】

「そんなに!?!」

【弦十郎】

「ああ。会いに行つた時には、食器が山積みだった。食い方も荒々しくて、殆どが手掴みだったらしい」

「戦闘だけでなく食事も常識外れとは思わなかつただけに、少女達は報告を聞いても啞然とする以外なかつた。」

【エルフナイン】

「でも、その甲斐あつて、あの方は肉類を嗜好することが分かりました」

【響】

「そこ重要なんだ!?!」

【エルフナイン】

「勿論です! 小さな発見が大きな結論を導き出すことだつてあるんですから!」

大真面目に語るエルフナイン。その目は完全に研究者のそれで、今にも科学や錬金術

に関する講義が始まりそんな勢いだった。

勉強が苦手な響と切歌は本能的にそれを察知して、何とか話題を変えようと頭を回転させる。そんな時、切歌の隣の調が手を挙げた。

【調】

「あのつ……、今あの人はどうしてるんですか？」

【響】

（調ちゃん!!）

【切歌】

（グッジョブデス!!）

心の中で称賛の叫びを上げる二人の視線に、調は小さくVサインで応えた。だが、轟のことを気にする気持ちも本物で、エルフラインと弦十郎を交互に見やる。

【弦十郎】

「飯を食い終わるなりメデイカルルーム医務室で爆睡だ。お陰で大して話も出来ず終い。今も緒川に確認に行かせているが、まだ眠ったままのようだな」

【調】

「そうなんですか……」

【クリス】

「随分残念そうだな？」

肩を落とした調にクリスが訊ねると、調は切歌の手を握りながら口を開いた。

【調】

「……私が今もこうして切ちゃんと一緒にいられるのは、あの人のお陰ですから」

【マリア】

「調……」

【未来】

「調ちゃん……」

言いながら調の手は震えていた。

一昨日、もし轟の乱入が無かったら、調はアルカ・ノイズによって惨殺されていただろう。調を喪ったなら、切歌も今までのような明るい性格ではいられず、深い深い闇の底へ落ちていたかもしれない。

偶然だったとしても、今この瞬間ここにいられることに調は心から感謝していた。そして、それは切歌も同じ。

【切歌】

「そうデス！それに、あの人は私と調のお願いを聞いて、ちゃんと先輩達を助けてくれたデス！」

【調】

「切ちゃん……」

【切歌】

「私も調と同じ想いデス。ちよつと怖いデスけど……あの人はきつと良い人デスよ！」

思い出すのは、医務室でのやり取り。無力さに涙する自分達を撫でた大きな手と優しい瞳が轟の本当の姿だと、二人は信じていた。……だが、

【エルフナイン】

「……そう結論付けるのは危険だと思えます」

まさかのエルフナインが、調と切歌の考えを否定した。

【切歌】

「ど、どうしてデスカ!？」

【調】

「悪い人なら、身体を張って見ず知らずの私達を守ろうなんてしないはず！」

納得できない、と切歌と調も反論するが、エルフナインの表情は変わらなかつた。その様子からは、確固たる理由を持っていることが伺え、翼達は黙ったまま成り行きを見守っていた。

【エルフナイン】

「……あの方、黒銀さんが皆さんを助けたのには、ちゃんと理由があるんです」

【翼】

「理由？」

【エルフナイン】

「はい。彼が皆さんを助けた理由——」

「それは、皆さんがシンフォギア装者だったからです」

エルフナインの語った理由に、響達は驚きを隠せなかった。

【響】

「ど、どういうこと、エルフナインちゃん!?なんで、私達がシンフォギアを使えることが、轟くんが私達を助ける理由になるの!？」

【エルフナイン】

「それを説明するには、先ずはこれを見て頂く必要があります」

そう言つて、エルフナインは手に持った端末を操作する。すると、指令室のメインモニターに映像が映し出された。

【エルフナイン】

「これは一昨日、調さんと切歌さんの前に黒銀さんが乱入した時の記録です」

【マリア】

「例の暴走状態で現れた時ね」

モニターの中で暴れまわる赤黒い影を纏った轟を見ながらマリアが言うが、エルフナインは首を横に振った。

【エルフナイン】

「あれは恐らく、暴走ではありません」

【クリス】

「何だと？」

【翼】

「バカな。あれは間違いなく聖遺物の暴走だ。私と雪音が見間違うわけがない」

【エルフナイン】

「そのことについては、もう少し後で触れます。今は続きを見てください」

響の暴走を実際に目の当たりにしてきた翼とクリスは納得のいかない様子だったが、とりあえずエルフナインの仮説を聞くことにした。

モニターでは轟に一蹴されたミカが、フアラに救出され離脱する。その後、轟を包んでいた赤黒い影が消え去り、一糸纏わぬ姿となった青年は調と切歌に近付いていった。

【調】

「~~~~~  
／／／

【切歌】

「はわ／＼／／／／」

近付いた轟は調の腕を引き寄せ、顔を近付け匂いを嗅いだりしている。

当時のことを思い出し、調は真つ赤になりながら俯き、切歌は手で顔を覆いながら、指の隙間からその様子を覗き見ていた。

【エルフナイン】

「この時、黒銀さんは調さんの身体を見て触れて、何かを確かめていました。そして、自分の求めていたものが無いと分かり、焦りを露にしたんです」

【マリア】

「そう言えばそんな感じだったわね」

マリアが頷く中、モニターでは漸く到着したクリスが、轟の画面に強烈なキックを見舞っていた。

【翼】

「……あれは本当にやり過ぎだぞ、雪音」

【クリス】

「し、仕方ねえだろ!? 後輩達を襲こいつらっているようにしか見えなかったんだから!」

【響】

「ま、まあ、結果的に轟くんは何とも無かったんだし、良かったんじゃないかな」  
【エルフナイン】

「……そもそもその時点でかなり異常なのですが、それは一旦置いておきましょう」  
「次に注目してもらいたいのはここです。立ち上がった黒銀さんが、駆け付けたクリスさんと翼さんを捉えた瞬間、二人に猛然と飛び掛かっていきました」

【未来】

「言われてみれば、反応が違うね。調ちゃんの時みたいに戸惑う様子が全然無い」

【エルフナイン】

「それもそのはずです。お二人は既に、黒銀さんの求めるものを身に付けていたのですから」

【藤堯】

「それが、シンフォギア？」

【あおい】

「確かに、調ちゃんと切歌ちゃんは自動人形オートスコアラにギアを破壊され、一時的とはいえ装者では無くなっていた」

【響】

「でも、これだけで目的がシンフォギアっていうのは……」



【エルフナイン】

「いえ、間違いありません。極めつけとなる映像が、これです」

エルフナインは映像を昨日のものに切り替えた。

キャロルの炎に焼かれた轟は抱き留めた響を押し倒し、二人を引き離そうとした翼とクリスが肩に触れる。その瞬間、3人は揃って声を上げ始めた。

【エルフナイン】

「この時、響さん達のフォニックゲインが流出を始めました。流れ出したエネルギーの行き先は一つしか考えられません」

【翼】

「黒銀に、吸収された？」

【エルフナイン】

「そうです。そして、エネルギーを吸収した後、黒銀さんはシンフォギアへと変身を遂げました」

モニターではゴジラへと変身した轟が、覚醒の咆哮を轟かせていた。

【クリス】

「自分が変身する為の力をあたし等から奪ったってことかよ！」

【マリア】

「シンフォギアとしては異質ね。装者のフォニックゲインではなく、他者のフォニックゲインを起動トリガーとするなんて」

【未来】

「でも、事前の検査では、この人はシンフォギアを持っていないって話だったんじゃない……」

【エルフナイン】

「そこです！」

未来の一言にエルフナインは強く反応した。エルフナインは映像を巻き戻し、轟が青い光に包まれ、ゴジラへと変身する瞬間を映し出す。

【エルフナイン】

「ここを見てください。黒銀さんを包んだ光、よく見ると小さな粒子の集まりなんです」  
映像を止め、一部を拡大する。拡大部をトリミングすると、確かに光は無数の蛍火のような光源が集まった物であることが分かる。

【調】

「これがシンフォギアの正体？」

【切歌】

「でも、どこから出てきたデス？」

【エルフナイン】

「……この光の正体、ボク達は既に知っていたんです」

エルフナインは端末を操作して、別のデータを映像の隣に出した。それは、轟のメデイカルチェックの結果。その中から色分けされピックアップされていたのは……

【クリス】

「こいつは……」

【翼】

「黒銀から見つかった、未知の細胞？」

【エルフナイン】

「そうです。当初の予想通り、これが黒銀さんのシンフォギアを形成していました」

エルフナインの答えに、指令室は驚きに包まれた。響という聖遺物との融合症例はあるものの、全身に、細胞レベルで融合しているなど到底信じられることでは無い。

【響】

「でも、エルフナインちゃん言ってたよね？この細胞からは聖遺物の反応はしないって」

【エルフナイン】

「確かに、シンフォギアを発現した今も、黒銀さんの身体からは聖遺物の反応は見られませんでした。これが指すところは只一つ」

「黒銀さんのシンフォギアは、シンフォギアであってシンフォギアではない。聖遺物とは異なる超常を起源とする力なんです」

エルフナインの出した驚愕の結論に、響達は言葉を失うしかなかった。

【弦十郎】

「聖遺物とは別の、人知を超えた力、か」

【エルフナイン】

「僕も信じられませんでしたが、こう考えるのが一番現実的なんです。事実、黒銀さんの変身した姿や能力に該当する存在は、どの神話や伝承にもありませんでした」

【藤堯】

「となると、聖遺物と区別するために何かしらの呼称が必要になりますね」

【弦十郎】

「そうだな。エルフナインくん、何か良い案はないかね？」

【エルフナイン】

「……実は、データ収集にあたってボクの方でつけた名前があるんです」

エルフナインは遠慮がちに呟きながら、モニターに細胞のデータファイルを表示した。ファイル名をあおいが読み上げる。

【あおい】

「《Generate X》？」

【エルフナイン】

「ハイ。『シンフォギアを超えるエネルギーを生成する未知の細胞』という意味です。ボクは《GX細胞》と呼んでいます」

【翼】

「GX細胞……」

聖遺物以上の謎と力を内包する物質。

その正体が《G細胞》<sup>ゴジラ</sup>の変異した物だということを、流石のエルフナインでも知る由が無かった。

【切歌】

「何だか色々いきなり過ぎて、頭が付いていかないデスよ〜!!」

【マリア】

「でも、これで一つハッキリしたわね」

【調】

「マリア？」

混乱して頭を抱える切歌を置いて、マリアは厳しい顔だった。調が問いかけると、マリアは彼女と騒ぐのを止めた切歌を見て一瞬躊躇したが、キツと瞳に力を戻して口を開

く。

【マリア】

「あの男が調と切歌を助けたのは、単純な善意からではない、ということよ」

【翼】

「……黒銀自身も言っていたな。私達を指してハツキリ『餌』と。全ての行動は、フォニックゲインという自身のエネルギー源を得る為だった」

【マリア】

「そう。だから、直前までフォニックゲインを発していた調と切歌に危害を加えようとした自動人形オートスコアラやアルカ・ノイズに、敵意を剥き出しに襲いかかった」

【クリス】

「そしてそれは、あたし達の時も同じってことか」

【エルフナイン】

「皆さんの推察通りだとボクも思います。特に、最初に姿を現した時は、エネルギーが尽きかけ、かなり切迫した状態だったはずですから」

【クリス】

「そうか。あれは暴走じゃなくて……」

【翼】

「鎧を形成するだけのエネルギーがなく、GX細胞の固着が不安定になっていたから、というわけだな」

【切歌】

「そんな……」

マリア達の話に、切歌はショックを受けている様子だった。

轟は、ヒーロー……とは言えないかもしれないけれど、それでも身を呈して自分の、自分達の大切な人を守ってくれた。でも、それは優しさや正義等ではなく、ただ自らの欲求を満たす為だったと言われ、切歌の心にはこれまで自分達を散々利用しようとして来た大人達に抱いた想いと同じものが膨らみ始める。

【エルフナイン】

「以上のことだけでも、黒銀さんへの対応は慎重を期す必要があると考えます。……キャラクターの元にいたボクが言えた立場ではありませんが、安易に仲間と判断し、あの強大な力が皆さんに向いたらと考えるとゾツとしません」

【弦十郎】

「その事だが、エルフナインくん。君の所見では、仮に黒銀が敵に回った場合、俺達の戦力で対抗できると思うか？」

弦十郎の言葉に、エルフナインは僅かだが言葉を詰まらせた。そして、弦十郎と装者

達を交互に見やった後、一つ息を吐いてから告げる。

【エルフナイン】

「……不可能です。昨日の戦いを見るだけでも、キャロルと同等以上の力があるのは明らか。加えて、フォニックゲインをエネルギー源とする以上、シンフォギアの攻撃では、逆にエネルギーを与える結果になりかねません。……キャロルのダウルダブラが打撃を与えていたことを考えると、一応ダメージは通りそうですが」

【クリス】

「ラスボスと同等クラスの戦闘能力に加えてネイリムに似た特性とか、チートかよ……」

【翼】

「だが、昨日の戦いを見ればそれも納得せざるを得ない」

【弦十郎】

「イグナイトモジュールの発現に成功した場合はどうだ？」

まだ成功もしていない切り札を算段に入れることは現時点では無意味だが、仮に勝率が上がるのならば、制御を目指す上でモチベーションの向上になると弦十郎は考えた。

しかし、エルフナインは無常にも首を横に振る。

【エルフナイン】



「仮にダメージが通るといふ仮定もプラスして見積もつても、状況は変わらないでしょう。lv51で黒銀さんを倒すことはまず不可能。……おそらく、希望的に見積もつて、イグナイト状態の装者3人がかりでやっと互角かと」

切り札を実現させたとしても及ばない戦力差を突き付けられ、装者達は重苦しい緊張感に押し黙った。

だが弦十郎は、エルフナインの分析結果をある程度予測していた。現時点では轟が味方と断じられないこと、敵対した場合の力の差が歴然であることを敢えて装者達に突き付けたのは、これから出す提案の応否を彼女達に委ねようと思つたからに他ならない。

【弦十郎】

「ここまで聞いた上で、諸君に聞きたい。黒銀を仲間として、共に戦つてくれるよう頼むか、それとも敵或いはそれに類するイレギュラーとして警戒対象とするか」

【翼】

「……叔父さまは、黒銀を仲間に取り入れたいとお考えなのですか？」

【弦十郎】

「ああ。キャロルは元より、今の戦力では自動人形オートスコアラに対抗することも難しい。イグナイトモジュールが使えない以上、それに代わる切り札は必要だ」

キャロル一派は、S・O・N・Gや世界に対し、明確な敵意を示している。底知れぬ

彼女達の錬金術に対抗する力を得ることこそ、防衛の要である自分達には急務。大局を見据えた上で、弦十郎はそう考えていたが……

【クリス】

「冗談じゃねえ！あたしは絶対反対だ！」

真つ先に拒否を示したのは、クリスであつた。

【弦十郎】

「理由は？」

【クリス】

「言わなくてもだろ！あいつ、自分を満たすためにあたし達を利用しただけじゃねえか！仲間にしても、あたし達を燃料タンクとして扱うに決まってる！そんな女を食い物にするような奴に背中なんて預けられるかよ！」

烈火の如く捲し立てるクリス。そこには、轟個人に対して以外の思いが渦巻いているように見えた。

それを感じたのか、翼が冷静な口調でクリスに同意する。

【翼】

「……司令、私も雪音と同意見です」

【響】

「翼さん……」

感情的になつてゐるクリスは仕方ないにしても、冷静な翼まで轟との共闘に難色を示した。

【翼】

「確かにあの力が味方になつてくれれば、キャロル達との戦況は飛躍的に好転するだろう。だが、それは極めて危うい賭けだ」

「雪音の言うように戦闘中にフォニックゲインを吸収されれば、私達はすぐには身動きが取れなくなる。それは立花も分かっているだろう？」

【響】

「それは……。でも、翼さん！轟くんの歌を聞いて、真摯な心を持つ人つて思ったんですよね？それでも信じることは出来ないんですか？」

【翼】

「確かに、嘗て黒銀の歌を聞いた時はそう思った。……だが、あの時の黒銀と今の黒銀は、どこか違う気がする。姿は同じでも、魂こころにあの時の面影を感じ得ない」

翼自身、歌から伝わってきた黒銀轟という人間の印象から、彼を仲間として信じてみたい気持ちはあつた。しかし、昨日の獣もかくやという暴れっぷりに、今はその気持ちが揺らいでいる。

実際、翼の抱いた印象は的を得ていた。

轟の中にあるのは、夢を追いかけていた若人ではなく、自らの運命を振じ曲げた人間げんきようへの怒りを燃え盛らせる破壊神なのだから。

【未来】

「マリアさんはどう思っているんですか？」

クリス、翼と共に轟への警戒を露にしていたマリアに、未来は敢えて問いかけた。

マリアは、これまでの話の流れですっかり俯いてしまっている調と切歌を悲しげな視線で一瞥しながらも、自分の抱いている想いを偽ることなく吐露した。

【マリア】

「私も翼やクリスと同意見よ。調と切歌を助けてくれたことには感謝しているし、信じてみたい気持ちはある。……でも、昨日の彼の戦い方、周囲への被害を全く考慮に入れていなかった」

「おそらく、彼の目に写っているのは、倒すべき敵の姿とエネルギー源であるシンフォギアのみ。それ以外のものはどうなろうと気にも留めない。例え敵を倒せたとしても、もたらされる代償は大きなものとなる。……そんな気がする」

【切歌】

「マリア……」

【マリア】

「切歌、調、あなた達の気持ちも分かるけど、彼には人としての信念が感じられない。ただ暴虐の限りを尽くすなら、それはノイズやキャロル達と変わらないわ。そんな相手と私は手を取り合うことはできない」

翼と同様、マリアの意見は冷静に轟の戦いを見た上でのものであった。感情に流されない正論に対抗できるだけの材料は今のところ見当たらない。

内容だけで判断すれば、クリス・翼・マリアの意見で方針は決まったと言って良いだろう。

しかし、人間は感情の生き物なのだ。例え論理に欠け、説得力が無くても、感情の籠った力に人の心は動かされる。

【調】

「……それでも」

静まった指令室に、これまで俯き沈黙を守っていた調の声が響く。親友を含めた全員の視線が集まる中、最も小さな装者は揺るぎない自分の想いを打ち明けた。

【調】

「それでも、私はあの人を信じたい」

【切歌】

「調……?」

【クリス】

「お前、まだあいつが助けにくれたって思ってるのか!? あいつが助けようとしたのは——」

【調】

「私のシウルシャガナ。そうだったとしても、あの人は私を守ってくれました！ 切ちゃんだけを助けて、私を見殺しにすることも出来たのに」

【切歌】 【響】

「——ツ!!」

調の言葉は、心に靄のかかった切歌と響にとつては黎明に等しかった。

あの時、戦場にいたのは調と切歌の二人。調はアルカ・ノイズに取り囲まれていたが、切歌はそこからかなり離れた所で倒れていた。

調を気にせずにミカと戦っていれば、余計なエネルギーや時間を使うことなく、切歌はイガリマというエネルギー源をもものにも出来たにも関わらず。

【エルフナイン】

「それは、より多くのエネルギー源を確保する為だった、とも見れます」

【調】

「そうかもしれない。でも、そこに汚い感情は無かったと思う。……マリアはあの人に信念は無いって言ったよね？あの人の瞳、強くて鋭くて怖かったけど、欲望にまみれた嫌な感じはしなかった。自分の目的のためにただ純粹に行動する、それって昔の私達と同じだと思う」

【マリア】

「調……。そう、かも知れないけれど。でも——「……私もあの人を信じるデス」——切歌……」

もつと慎重になるべきと諭そうとしたマリアの言葉を遮ったのは、調によって自分の心に踏ん切りがついた切歌であった。

【切歌】

「何でみんな、あの人の悪いところばかり見るデスか？確かに発電施設を壊したりしたけど、人を傷付けたりはしてないデス！」

【翼】

「それは結果論だ。偶々、施設からの避難が完了してただけで、避難が間に合っていないければ——」

【切歌】

「それこそ”たられば”話じゃないデスか！」

【調】  
「切ちゃん……」

【切歌】

「……あの人は、調を助けてくれたデス。偶然でも何でも、それが全てデス！」

切歌は感情のままに想いの丈をぶつける。

元々感情表現豊かな彼女が放つ感情論。それは、この場では正論以上の熱となってマリア達の心に訴えかける。

【切歌】

「……それに、あの人は優しかったデス。クリス先輩達がやられそうになって、でも私達には何も出来なくて。自分達の無力に泣く私達のお願いを聞いてくれたデス！」

昨日の医務室でのことを話す切歌に、調も追随する。

【調】

「……私達を撫でてくれたあの人の手から伝わってきた温もりは、きつとあの人の心の温度だと思う。……もしかしたら、私達の姿を誰かと重ね合わせていたのかもしれない。それでも、それはあの人が、他人を思いやって行動できる人だつてことの証だと思  
う！」

【クリス】



「お前等……」

【響】

「……自分の感じたことが全て。そうか、そうだよね……」

【未来】

「響？」

【響】

「私も信じたい。……ううん、信じる！轟くんのこと！」

後輩二人の訴えに、響も自分の心が感じた印象を信じる決心を固め、それを全員の前で打ち明けた。

【翼】

「立花……、お前のそういう姿勢は今までも私達の気持ちの一つにしてきた。だが、今回は——」

【響】

「違うんですよ」

翼の言葉を取引き、否定した後、響は更に自分の想いを語り続ける。

【響】

「調ちゃんとか歌ちゃんの言う通り、轟くんは二人を、そして私達を守ってくれた。その

事実に変わりはありません！」

【調】

「響さん……」

【響】

「それに私も轟くんの目を見たとき、感じたんです。私達と同じ、何かを必死に守ろうとしていた強い意思を！」

「今は分からないことも多くて、すれ違うこともあるかもしれないけど、きつと分かりあえる！一緒に戦う仲間になってくれるはずですよ！」

響の言葉に、翼達は何も返すことが出来なかった。今まで和解など不可能と思われた自分達を繋いでくれたのは、他でもない響だったのだから。

【未来】

「……もう、相変わらずなんだから」

親友の言に一瞬苦笑した後、未来はいつの間にか固く拳を作っていた響の手を握る。

【響】

「未来？」

【未来】

「……私も信じてみる。黒銀……くんのこと。正直、あの人のことは全然分からないし、

危ない気もするけど、響の人を見る目は確かだもんね」

【響】

「未来ツ！ありがと〜！」

お礼を言いながら抱きついた響を、未来は照れながらも抱き返す。先輩二人が味方になつてくれたのを見て、切歌と調も表情を明るくした。

【切歌】

「デスデス！私達だつて散々すれ違つたけど、最後にはこうして仲良くなれたデス！」

【調】

「そうだね、切ちゃん。……あの時は響さんがきっかけを作ってくれた。今度は、私達も頑張らないと！」

【響】

「うんっ！」

【切歌】

「デスツ！」

後輩二人と領きあつた後、響は未来から離れ、弦十郎を真つ直ぐ見据えて、

【響】

「私達は轟くんを信じます！一緒に戦つてくれるように、話をさせてください！」

と告げた。

反対派の翼・クリス・マリアはその様子を黙って見つめる。あおいや藤堯、エルフナインが沈黙を守り続ける中、腕を組んだ弦十郎はフツと口許を緩ませた。

【響】

「師匠？」

【弦十郎】

「響くんならそう言うと思っていた。……4人とも、黒銀が目覚ましたら、俺と一緒に話をしに行こう」

【響】

「師匠！」

【翼】

「司令!？」

【クリス】

「本気かよ、オッサン!？」

弦十郎の言葉はつまり、轟を仲間にする方針に決定したと言っているのと同義だった。これには流石に、翼達反対メンバーは抗議の声をあげる。

しかし、弦十郎はそれを片手で制し、言い聞かせるように語り出した。

【弦十郎】

「翼達の懸念も分かる。だが、響くん達が言うように、俺達は黒銀轟という男のことを知らなすぎる。それで敵と、危険と決めつけるのは早計だろう?」

【マリア】

「だからと言つて、仲間としてすぐに信用するのは迂闊です!」

【弦十郎】

「確かに。なら、マリアくんは、何時になれば黒銀を信用していいと思える?」

弦十郎の返しに、マリアは言葉に詰まってしまった。

【弦十郎】

「信頼とは時間をかけて培われていくものには違いない。しかし、それがいつ確かなものへと醸成されるのか、それは誰にも分からない」

「ただ一つ言えるのは、スタートが遅くなればなるほど、信頼を確立する時は遠ざかっていく。なら大事なものは、始めの一步をどれだけ早く踏み出せるかじゃないか?」

若者を導く大人としての意見。それに反論できるほど、クリスは勿論、翼もマリアも人生を歩んではいかなかった。

【マリア】

「……エルフナイン、それに藤堯さんと友里さんはどう思っているの?」

【エルフナイン】

「……ボクはあくまで慎重に対応する必要があります。しかし、さつきも言いましたように、ボクもキャロルの下から逃げてきた身です。だから、黒銀さんのことを好きに言える立場にはないです」

【藤堯】

「俺達は司令に一任しているよ。……というより、昨日の内に皆の反応を見て対応を決めようってことで話は着いていたんだ」

【あおい】

「あくまで戦うのは皆だものね。私達にはバックアップしか出来ない。……でも、嘗てクリスちゃんやマリアさん達がそうだったように、黒銀くんが心強い仲間になってくれたらって思っているわ」

エルフナインは同じ境遇として、藤堯とあおいは弦十郎とは違った角度から、大人として少女達の判断を見守るつもりでいる。

よって、轟を巡る話し合いは装者十未来の7名に託され、賛成4、反対3で決着を見ていた。

【弦十郎】

「……ということだ。納得がいかなければそれでも構わん。だが、先ずは歩み寄ってみ

るという方向でいかないか？」

各々の意見が出揃った上で、弦十郎は翼・クリス・マリアに最後の確認を取る。

クリスは明らかに不満そうな表情を崩さなかったが、翼とマリアは瞑目してから深く溜め息を吐いた。

【翼】

「司令が決めたのであれば、私は従うだけです。元より、立花が賛成に回った時点でこうなるとは思っていました」

【響】

「翼さんー！」

翼が賛同してくれたことに、響は表情を輝かせる。それに釣られて、翼も幾分か表情を緩くした。

【翼】

「だが、私は正義を貫く剣！黒銀が正義にもとる行いをしたなら、防人として奴を斬る！……それを忘れるなよ？」

【響】

「はいっ！分かってますとも！」

不敵な笑みの翼に敬礼で答える響。装者の中では最も長い付き合いとなるは二人の

様子を見て、マリアもフツと笑みを溢した。

【マリア】

「全く……。多数決なら仕方無いわね」

【調】【切歌】

「マリア!!」

不安そうだった調と切歌と笑顔を浮かべ、マリアも本来の優しい表情で応えた。

【マリア】

「司令の言う通り、一步踏み出さなければ始まらない。それに、いくらすれ違っていて、ちゃんと向き合えば分かるって、私達は教えられたものね」

【調】

「うんっ」

【切歌】

「デスツ！」

頷き合う3人の視線の先、そこには自分達に大切なことを教えてくれた日だまりのよ  
うな「[r b :少女 > ひびき]」の笑顔があった。

これで残すところ反対の意を示すのはクリス一人となった。

【弦十郎】



「クリスくん、君はあくまで反対か？」

【クリス】

「あ、当たり前——」

【響】

「クリスちゃん……」

【調】 【切歌】

「クリス先輩……」

【クリス】

「うっ……」

意地を貫こうとした矢先、後輩3人にとても切なげは視線を向けられ、クリスは言葉を詰まらせる。

【マリア】

「もう良いんじゃない？」

【翼】

「雪音。どうしても黒銀が信じられないのなら、それでも良い。その代わり、あの男に手を伸ばそうとしている立花達を信じてやらないか？」

【クリス】

「先輩……。……ああつ、もう！分かったよ！」

何だかんだ言いながらも仲間への情が最も厚いクリスが、仲間を信じろと言われて断れるわけもなかった。

腕を組み、そっぽを向きながらも了承したクリスに、響達は悲しげな表情から一転、嬉しそうに笑顔を綻ばせる。

【響】

「クリスちゃん！」

【クリス】

「べ、別に納得した訳じゃねえよ！……ただ、あいつが後輩達を助けてくれたのは事実だからな」

【未来】

「フフツ、素直じゃないんだから」

【クリス】

「う、ウルセー！」

顔を赤らめながら怒鳴るクリスを見て、指令室は笑い声に包まれた。

【弦十郎】

「よし！何はともあれ、これで方針は決まったな！先ずは話し合いだ。緒川から連絡が

入り次第、全員で黒銀に会いに行くぞ」

【響】

「了解です、師匠！よろしく、絶対轟くんと友達になりますよ！」

【未来】

「もう、響ったら」

明るい調子で音頭を取る響を先頭に、装者6人と未来、弦十郎、エルフナインの9人が指令室を後にしようとした——その時だった。

【??】

『黙って聞いていれば、随分勝手なことばかり言ってくれるじゃないか』

突然、指令室のドアの向こうからそんな声が聞こえ、全員が歩みを止める。

視線が閉ざされたドアへと集まる中、突如自動スライド式のドアが、響達に向かって吹き飛んできた。

【未来】

「きゃっ!？」

【響】

「未来ッ！」

【弦十郎】

「ヌウウウンッ！」

悲鳴あげた未来を響が庇い、それを守るように弦十郎が岩盤すらも穿孔する掌底で受け止める。

【響】

「大丈夫、未来?!」

【未来】

「う、うん。ありがとう、響」

【翼】

「皆、怪我はないか!」

翼の声に、全員が頷いて返した。それを見て、弦十郎は一瞬だけ安堵の息を漏らした後、すぐに表情を引き締め、受け止めたドアを床に下ろす。

開けた視界の先、そこに立っていたのは――

【轟】

「流石は傲慢な人間様だな。……反吐が出る」

今まさに会いに行こうとしていた黒銀轟本人であった。

【翼】

「黒銀轟!？」

まさかの本人の登場に、翼も取り乱していた。だが、当の轟も、呼ばれた自分の名前に首を傾げる。

【轟】

「クロガネ、ゴウ?……それは俺のことか?」

【響】

「え?」

【クリス】

「何言つてやがる! テメー、昨日自分で名乗ったんだろ?」

【轟】

「俺が?」

(……もしや、この器にんげんの名前か?)

「……まあ、そんなことはどうでもいい」

当初は認められなかったものの、ゴジラは何故か自分が人間の姿になってしまっていることを自覚していた。

何故こんなことになっているのか? 疑問は尽きないが、考えても拉致が明かないこと

と、轟は早々に深くは考えるのを止めていた。

轟は指令室へと一歩踏み出してくる。それを見た弦十郎は、内心の焦りを押さえながら気掛かりを問いただす。

【弦十郎】

「何故ここにいる!? 緒川はどうした!？」

【轟】

「オガワ? ……ああ、俺を見張っていた奴のことか? 人間にしては骨があったが、俺の敵ではない」

そう言つて轟は手首を撫でる。よく見ると、検査着の袖からは血が滴っていた。

【翼】

「まさか、緒川さんを!？」

【未来】

「そんな……」

最悪の事態を想像し、轟以外の表情が強張る。そこへ、本部内からの通信を告げる電子音が鳴り響いた。

警戒しながらも藤堯が通信を開くと、頭から血を流し、肩を押さえたスーツ姿の男性が映し出された。

【響】

「緒川さん！」

【弦十郎】

「緒川！無事だったか！」

【緒川】

『……申し訳ありません、司令。彼が一向に目を覚まさず、不審に思っていたら、急に心拍停止を報せる画面が出まして、それで……』

暴れ出した時のことを鑑み、医師や看護師といった非戦闘員は轟から遠ざけ、装者と弦十郎を除けば最も戦闘能力の高い緒川を様子見に向かわせていた。

故に、咄嗟の事態に対応できる者が緒川しかおらず、轟を収容した医務室のロックを解除してしまっただった。

【轟】

「コソコソと目障りだったんでな。潰す前に道を開けてもらった」

【エルフナイン】

「まさか、自分で心拍を停止させることが出来るなんて……」

【緒川】

『迂闊でした。何とか初撃を躲して、《影縫い》で押さえようとしたのですが——』

【轟

「そうそう。その青いのが前に見せたのと同じ技を使ってきたな」

轟は言いながら翼を血に濡れた指で差す。流血の理由は、翼の時のように縫い付けられた影を無理矢理引き剥がした為であった。

【轟】

「人間にしては大したものだだったが、所詮は小細工。二度は通じない。さつさと振り払ってブツ飛ばしたから、てつきり死んだと思っていたが生きていたとは。褒めてやる」

【クリス】

「テメー、何をいけしやあしやあと！」

全く悪びれた様子イの無い物言いに、クリスは我慢の限界とばかりに胸元から赤い結晶イを引き抜く。

それを見た翼と弦十郎は、クリスを止めようとするが、それよりも早く動いた者がいた。

【クリス】

「——ッ！うわっ?!」

クリスが気付いた時には、轟が目の前に立っており、その目は握り締めるイチイバル



のコアに注がれていた。

轟は素早い動きでクリスの手からコアを奪い取ると、空かさず飛び退いて距離を取る。

【切歌】

「クリス先輩のイチイバルが！」

【クリス】

「テメー、返しやがれ！」

クリスは轟に駆け寄り様に殴りかかる。しかし、クリスの拳を脇腹に受けながらも、轟は気にも留めずに目の前にぶら下げたイチイバルを覗き込んでいた。

【マリア】

「まさか、シンフォギアを奪いに来たというの!？」

【轟】

「……コイツだ。この匂い、間違いない。コイツさえあれば——」

【エルフナイン】

「無駄ですよ」

イチイバルからフォニックゲインを吸収する轟の目論みは、エルフナインの静かな一言に遮られた。

【轟】

「無駄、だと? どういう意味——お前!」

エルフナインの顔を認めた瞬間、轟の放つプレッシャーが鋭くなった。キャロルと瓜二つの容姿に、轟は意識を戦闘モードへシフトさせる。

途端に指令室の空気が重苦しいものになる。しかし、それは長くは続かず、轟は何かに気付いたように殺気を収めた。

【轟】

「……違う。お前は昨日のガキじゃない。普通の人間とも違う。……お前は何だ?」

一目で、エルフナインがキャロルとは別人であることだけでなく、ただの人間ではないことに気付いたことに、S・O・N・Gメンバーは驚きを隠せなかった。

【エルフナイン】

「……ボクはエルフナインといいます。あなたが昨日戦ったキャロル・マールス・デインハイムによって生み出されたホムンクルスです」

【轟】

「ホムン、クルス?」

【エルフナイン】

「……錬金技術の奥義が想像した、人工生命体。それがボクです」

【轟】

「人工……。フンツ、ようは紛い物か」

【エルフナイン】

「——ツ」

【調】

「エルフナイン……」

【マリア】

「……よくもそんな酷いことが言えるわね。撤回しなさい！」

【轟】

「酷い？笑わせるな！」

悲痛に顔を歪めるエルフナインを見て、マリアが険しい顔で声を荒げる。しかし、それ以上の怒りを轟は吐き出した。

【轟】

「命の創造だと？命は自然より生まれ出でる神聖なものだ。それを自分達の手で生み出した？そんなもの自然に対する冒涇だ！」

「俺が酷い？ならお前達人間はおぞましいな！自分達の思うままに命を弄ぶ。……変わらない。お前達は、あの時から全く変わっていない！」

轟の剣幕に、マリアは反論することが出来なかった。

轟の脳裏に浮かぶもの。それは嘗てゴジラであった……いや、ゴジラになってしまった時の記憶。

【轟】

「……やはり、お前達人間はこの星の為に滅ぶべきだ。俺の力で、全てを焼き尽くし、無に還してやる！」

そう言うのと、轟は奪ったイチイバルのコアを握り締めた。怪獣時代のように、東京を、日本を火の海に変えるべく、その力を引き出そうとする。

しかし、どれだけやっても、イチイバルからエネルギーが流れてくることは無かった。

【轟】

「……何故だ？何故力が流れてこない？」

【エルフナイン】

「いくらやっても、シンフォギアから直接エネルギーを得ることは出来ませんよ。あなたの求めるフォニックゲインは、シンフォギアと装者、この2つが揃って初めて引き出されるのです」

【轟】

「シンフォギア？装者？」

やはり、その辺りの知識は有していないらしく、エルフナインと藤堯、あおいの3人は、シンフォギアと装者について簡単に解説した。

【轟】

「……そうか。つまり、昨日のように、響<sup>そら</sup>等が着込む姿にならなければ、コイツはただの石ころ同然ということか」

【エルフナイン】

「そういうことです。コアをシンフォギアの姿に変換するためには、装者の強く欲する想いが必要。更に、あなたがフォニックゲインを吸収するには、いくつかのパターンと条件があるんです」

【轟】

「条件?」

その事については、弦十郎を含めS・O・N・Gメンバーも初耳であった。エルフナインは、昨日轟の変身の際に得た仮説を元に、エネルギー獲得方法について確証に足る結果を得ていた。

説得の際、材料<sup>カード</sup>の1つとして提示するつもりでいた為、「ちようど良い」とこの場で説明を開始する。

【エルフナイン】

「黒銀さんがフォニックゲインを得る方法は、主に3つ。先ず1つ目は、昨日のようにギアを纏った装者に触れることです」

【響】

「触るだけで良いの？」

響の質問にエルフナインは頷く。

【エルフナイン】

「歌によって変換・生成されたシンフォギアはフォニックゲインの塊。それに直接触れることで、GX細胞が鎧からフォニックゲインを吸収します」

「直接エネルギーを獲得する為、吸収効率が良く、変身可能状態に至るまで数秒しかかかりません。昨日は響さん、翼さん、クリスさんの3名から同時に吸収した為、より短時間で多くのエネルギーを獲得しました」

【あおい】

「待って、エルフナインちゃん。昨日の響ちゃん達は、イグナイトモジュールの起動に失敗してフォニックゲインがかなり減っていたのよ？そんな状態からアルカ・ノイズやキャロルを撃退できるだけのエネルギーを得られるものなの？」

装者のステータスをモニタリングしているあおいには、戦闘すらままならない3人から莫大なエネルギーを得ることは不可能と考えていた。

【エルフナイン】

「確かに元となったフォニックゲインはお世辞にも多量とは言えませんでした。吸収したフォニックゲインをそのまま使うのであれば、あれだけの戦闘を行うことは不可能でしょう」

「しかし、GX細胞にはそれを可能にする特性があるんです」

【弦十郎】

「特性？」

【エルフナイン】

「はい。GX細胞はフォニックゲインを吸収し、それを更に増幅させ、自身のエネルギーとして生成します」

「つまり、ある程度のフォニックゲインを得られれば、それを起爆剤として戦闘が可能な程のエネルギーを生み出すことが出来るんです」

多種多様な特性を持つGX細胞。それは全て、元となったゴジラ細胞から継承・発展した脅威の能力であった。

GX細胞の万能性に全員が息を飲む。しかし、完全無欠というわけではなく、エルフナインはその事についても語り出した。

【エルフナイン】

「勿論、弱点もあります」

「戦闘中にエネルギー補給を行おうとすれば、数秒とはいえ、明確な隙を作ることになります」

「特に吸収される装者側は、フォニックゲインが減少することで戦闘力が一時的に低下してしまいます」

【響】

「その事なんだけど、キャロルちゃん。昨日轟くんに触られた時、力が抜けるような感じ以外に、その……へ、変な感覚がしたんだけど、それって何だったのかな？」

響の質問に翼は頷き、クリスは顔を赤くして俯いた。

フォニックゲインを吸収されるという体験もこれまで無かったが、響達を感じた別这种感觉は、ある種の高揚をもたらすものであった。

【エルフナイン】

「……それについては当事者でない僕には何とも言えません。ただ、あくまで仮説の域ですが、シンフォギアと皆さんが適合、つまりはある種の一心同体関係にあることが起因しているのではないかと……」

響の質問に、エルフナインも答えを濁すしか無かった。しかし、シンフォギアは適合者の心の影響を多分に受ける。



槍の聖遺物であるガングニールを纏う響に槍のアームドギアが発現せず、弓の聖遺物であるイチイバルを携えるクリスのアームドギアが主に銃火器の形を取ることからもそれは明らかであつた。

【藤堯】

「何にせよ、戦闘中のフォニックゲイン獲得は、命取りになる可能性があるつて訳か」

【切歌】

「あと2つはどんな方法デス？」

思案顔になつていたエルフナインは、切歌の声で我に返り、自分の発見した残りの方  
法について説明を始める。

【エルフナイン】

「2つ目は、戦闘によつて発生した、フォニックゲインの残滓を吸収する方法です」

【調】

「残滓？」

【エルフナイン】

「はい。翼さんの光刃にしても、クリスさんのミサイルにしても、フォニックゲインを攻撃用に変換したものです。これ等は役目を終えて消えたとしても、暫くの間、周囲の空气中に滞留します」

「それを、黒銀さんのシンフォギア、つまりはGX細胞は呼吸などと同じ生命活動の一環として、自動的に吸収することが出来るんです」

【マリア】

「そういえば、昨日の戦闘中にも、急にフォニックゲインが上昇した時があったわ」

【エルフナイン】

「それこそ、第2の方法によるものです。昨日は黒銀さんの参戦前に、響さん達が大規模な戦闘行動に出ていましたから、大気中のエネルギー残滓も多かったものと推察されます」

「それを吸収し、増幅<sup>ブースト</sup>することで、急激な出力アップを果たしました」

【藤堯】

「その方法であれば、隙を見せずに戦闘中でもエネルギー補給が可能だ」

【あおい】

「でも、それなら何故、最初から変身した状態でキャロルに挑まなかったのかしら？」

あおいの疑問は尤もであった。最初から変身した状態で戦えば、無用な傷を負う必要など無い。

【エルフナイン】

「変身しなかったのではなく、出来なかったんです。そしてその理由こそが、第2のエネ

ルギー補給手段の弱点」

「この方法は確かに隙は少ないですが、大気中のフォニックゲイン残滓は言葉の通り量も力も微弱です」

【マリア】

「そうか、分かったわ。大気中のフォニックゲインだけでは、シンフォギアを起動するだけの量には至らなかったのね？」

【エルフナイン】

「その通りです。お世辞にもエネルギー効率が良いとは言えないため、余程大きなフォニックゲインが照射でもされない限り、急激なエネルギー回復は望めません」

【轟】

「大きなフォニックゲイン……」

轟の脳裏に朧気な光景が蘇る。光すらも射さない海の底で眠りに就いていた自分を目覚めさせた、温かく力強い命の歌。轟はそれを求めて世界を放浪した。

【轟】

（あの力をもう一度浴びれば、俺は元の力を取り戻せる。……だが、昨日のこいつ等から得た力は、アレには到底及ばない。どうしたら、もう一度あの力に巡り会える？）

【響】

「轟くん？」

考え込んできたところに声をかけてられ、轟は思考の海から浮上すると共に、大きな瞳で自分を見る少女を睨み返した。

【轟】

「……気安く呼ぶな。馴れ馴れしい」

【響】

「ざ、ざめん……」

明るい雰囲気似合わずシュンとシヨボくれる響を見て、何故か轟の心はざわつく。戸惑いつつも、振り払うように鼻を鳴らすと、響から視線を外し、エルフナインに目を向ける。

【轟】

「で？今ので2つ目だろ？最後の方法ってのは何なんだ？」

轟の質問に、他のメンバーの視線もエルフナインに向けられる。しかし、これまでは勧んで判明した事実を披露してきたエルフナインは、集まった視線から目を背け、明らかに言い淀んでいた。

心なしか、その頬が僅かに朱に染まっているようにも見える。

【調】

「エルフナイン？」

【切歌】

「どうしたデスカ？」

【エルフナイン】

「あつ、え……とです。その……」

【クリス】

「何だよ？ 勿体つけずに教えろ、よっ！ ああもう！ いい加減返せよっ！」

話の合間に何度かギアを奪い返そうとして、身長差もあつてあしらわれ続けていたクリスは苛立ちを滲ませながら問い詰める。

エルフナインは、遠慮がちに装者達の顔を見やると、ブツブツと消え入りそうな声で話始めた。

【エルフナイン】

「さ、最後の方法は、実証もしていないですし、あくまで分析をする中で浮かんだ仮説でしかないのですが……」

「GX細胞には、他の細胞に干渉する作用があり、それによって黒銀さんはギアを纏わなくても超人的な身体能力を発揮できることが分かりました」

【翼】

「纏う前から影響を及ぼすとは……。驚異的な治癒力もその為か」

【クリス】

「でも、んなこと話すのに躊躇ってた訳じゃねえだろ？」

【マリア】

「しかも、エネルギー獲得とは関係無いわよね？」

止まない追及に、エルフナインも腹を括るほかなくなり、半ば破れかぶれになりながら最後の方法を明かした。

【エルフナイン】

「干渉できるのは黒銀さんの細胞だけでは無いようです。他者の細胞と結び付き、その力を得ることも出来ると推察されます。この方法でエネルギーを吸収する場合、その効率は前者2つの比ではありません」

「そ、そして、肝心なその方法は……」

【未来】

「方法は？」

【エルフナイン】

「うう……。ね……」

【響】

「ね？」

【エルフナイン】

「粘膜接触。……つ、つまり、キス……です」

【クリス】

「な、っ!!?／／／／／」

【調】

「キス……／／／／／」

【切歌】

「デス!?!／／／／／」

エルフナインの語った最後の方法は、予想外どころか、突拍子もない、ともすればブツ飛んだ方法であった。

当然、装者全員は赤面し、エルフナインを問い詰めにかかる。

【クリス】

「テメー、な、何トンチキなことぬかしてやがる!?!」

【翼】

「ゆ、雪音の言う通りだ！そ、そそそんな破廉恥な方法があるものか!／／／／／」

【マリア】

「だ、大体、全くシンフォギアと関係無いじゃないの！／＼／＼／」

【響】

「み、みみ皆さん、ちよつと落ち着きましょう!!／＼／＼／」

【未来】

「ひ、響も動揺し過ぎだから！／＼／＼／」

【響】

「み、未来だつて顔真つ赤じゃん！／＼／＼／」

年頃の、それも同年代の男子とはあまり接点の無い少女達の取り乱し方は尋常ではなかつた。

エルフナインが自身の羞恥心以外に、こうなることを予見して憚つていたことを知り、弦十郎やおおい達大人は納得しつつも、嘆息せずにはいられなかつた。

【弦十郎】

「……エルフナインくん。君のことだから何の確証も無しに発言した訳ではないと思つているが……、マリアくんの言う通り、そういう行為とシンフォギアがどう関係する？」

弦十郎の落ち着いた口調に、色めき立っていた少女達も若干の落ち着きを取り戻し、再び視線をエルフナインに向ける。

【エルフナイン】



「し、シンフォギアは聖遺物と歌によって成り立っています。歌は、身も蓋もない言い方をすれば空気の振動。それが特定の波長パターンを形成したものになります」

「空気の振動は、ごく一部の物を除いて、その透過性を妨げられるものはありません。それは、生物の身体も同じです。音は表皮を通過し、その奥に眠る細胞にも届きます。そしてその結果、細胞に影響を及ぼすこともあるんです」

【マリア】

「つまり、シンフォギアを運用する際の私達の歌が、知らず知らずの内に私達の身体にも影響を及ぼしていると言うの?」

【エルフナイン】

「はい。……突拍子の無い話に聞こえるかもしれませんが、似た事例は近代科学の分野でも多々報告されています」

「例えば、こんなお話を聞いたことはありませんか? 植物を育てる時、水や太陽の光以外に音楽を聞かせるようにすると、成長が早く、花を咲かせる種ならより綺麗な花を咲かせる」と

【未来】

「……そう言えば、人間だって、赤ちゃんがお母さんのお腹にいる時にお話や音楽を聞かせると良いって言うよね」

【あおい】

「それと同じことが、シンフォギアでも起きている?」

【エルフナイン】

「そうです。更に聖遺物も、人との融合が可能という事例があります」

エルフナインの言葉に、視線が響へと集まる。聖遺物と人間の生体融合。その生き証人の一人が、ガングニールを纏って戦う響その人であった。

【エルフナイン】

「以上のことから、シンフォギア装者の皆さんの細胞は、知らず知らずの内にシンフォギアとの親和性が高まり、フォニックゲインを内包できるようになっていた」

「そして、それがGX細胞と接触した時、膨大なエネルギーを生成する最強の起爆剤として作用する。……今あるデータから、ボクはその可能性を見出しました」

装者達は一様に無言となった。

当初は全く意味不明に思えたエルフナインの説も、深く聞いてみれば一応の筋が通ってしまっている。

シンフォギアという神秘の力と、GX細胞という未知の力。この二つの前に、彼女達の常識など到底通用するはずがなかった。

【エルフナイン】

「……ですが、この方法は現時点では実現不可能と言って良いでしょう」

何とも言えない沈黙が指令室を包む中、それを打ち破ったのは、沈黙の原因を唱えたエルフナイン本人であつた。

【弦十郎】

「まあ、確かに。この説を実証するのは中々……いや、かなりハードルが高いな」

弦十郎は、装者達の気持ちの問題が立ちはだかると考えたようだ。確かに、思春期真っ盛りの少女に、異性とのキスはハードルが高過ぎる。

しかしエルフナインは、「それもあります……」と、弦十郎の懸念では不十分と考えているようだった。

【エルフナイン】

「おそらく、ただ単に細胞同士を接触させただけでは、エネルギーを得ることは出来ないでしょう。この方法の最も重要な鍵は、黒銀さんと皆さんの心が通い合っている必要があります」

【クリス】

「ハアツ!？」

【轟】

「心を通わす……いつ等と？」

く。  
あからさまに嫌そうな顔をするクリスと轟に、エルフナインは至つて真面目な顔で頷

【エルフナイン】

「先程も言いましたが、シンフォギアは装者の心に反応し、起動します。つまり、気持ちが通じあつた状態でないと、そこにフォニックゲインは生まれません」

【クリス】

「それこそ何の証拠も無いんじゃないかねえのか!？」

【エルフナイン】

「いいえ。古来より、キスという行為は親愛を相手に伝える手段。その起源は先史文明以前にまで遡ると言われています」

【翼】

「先史以前……。聖遺物の起源もまた——」

【エルフナイン】

「そうです。奇しくも、同じ時代から現代まで残っているもの。心に起因するシンフォギアと気持ちを重ねるキス、その因果関係は決してこじつけ等ではないとボクは思っています」

【弦十郎】

「……また凄い話になってきたな。……なら、エルフナインくん。もし片方、或いは双方が気持ちを無視した状態で行為に及んだ場合、何か影響は？」

【エルフナイン】

「……おそらくシンフォギアと同じ。バックファイアによつて、心身に深刻なダメージを負うことになるでしょう」

呈示されたデメリットに、再び指令室は静まり返る。ハードルも高ければデメリットもデカイ。しかも本当に力を得られる確証もないとなれば、エルフナインの言う通り、実現も出来なければ試そうとも思えないだろう。

心を通わす。長年苦楽を共にしてきた仲間ならいざ知らず、これまでの経緯や目的も不明瞭、そして仲間ですらない男とキス——。

装者全員が、「そんなこと無理」と頭の中で想像しては、それを振り払った。

それと時を同じくして、白髪の青年は不意に溜め息を漏らす。

【轟】

「……無理矢理、力尽くで従わせても意味はない、か。……チツ」

轟は盛大な舌打ちをかますと、奪ったままだったイチイバルをクリスに投げ返し、その場を後にしようとして身を翻す。

【弦十郎】

「待て、黒銀！何処へ行く!？」

弦十郎の制止に轟は足を止め、肩越しに振り返った。

【轟】

「お前達にエサとしての価値は無いのだろうか？なら、ここにいる意味は無い」

これまでの話から、無理強いしてもエネルギーを得ることは出来ない、轟は悟っていた。仮にこの船を沈めると脅したところで、それは自分のエサを海に葬ることになる、とでも返されるだけだろう。

そして轟が我慢ならなかったのは、3つ目の方法だった。

【轟】

（人間なんかと交わるだど?……想像しただけで吐き気がする。死んでもそんなおぞましい真似出来るか!）

怨敵である人間と信頼関係を築くことなど、あり得ない。クリス達以上に、轟は第3の方法に拒否反応を示していた。

言い終わるなり、もう話すことは無いと立ち去ろうとする轟。その背中に、先程とは異なる制止の声がかけられる。

【響】

「待って、轟くん!」

【轟】

「あ、？」

苛立ちながらも再び立ち止まり、振り返る。自分を呼び止めた声の主は、先程も馴れしく自分の……ものらしい名前を呼んだボブカットの少女であった。

【轟】

「何だ!？」

【響】

「あつ……えつと、ど、何処に行くの?」

引き留めて何を聞くかと思えば、何とも下らない質問に、轟は更に苛立った。

【轟】

「お前に言う必要など無い」

【響】

「そう、かもしれないけど……。行く所あるの?行く所ないなら、ここにいない?」

【翼】

「立花!？」

【クリス】

「お前、まだ!？」

緒川に暴行をくわえ、自分達をエサとしてしか見ていないと分かつてもなお、響は轟を説得する気であった。

翼とクリスが止めようとするが、弦十郎も当初の方針に従うつもりのもので、二人を制止自らも一歩進み出る。

【弦十郎】

「響くんの言う通りだ。……言いにくいことだが、お前の故郷は壊滅している。他に親類もいないお前に行く宛など無いだろう？」

【轟】

「こいつ等——俺の棲む場所を奪ったのは自分達だろうが！……いや、こいつ等が言っているのはこの人間の棲み処のことか？——ええい、紛らわしい！」

轟はゴジラであった時の記憶と、僅かに内に遺る生前の黒銀轟としての記憶が自身の中で混在していることに、困惑と苛立ちを禁じ得なかった。

【弦十郎】

「……ここで、暮らすつもりは無いか？不自由の無いように、出来るだけ便宜を図ろう。そして、願わくば俺達と共に戦って欲しい。——この世界を守るために」

その様子を行く宛がなく迷っていると見て取った弦十郎達は、当初とは大分予定が狂ったが、轟をS・O・N・Gへと勧誘しよう話を持ちかけた。



【轟】

「世界を、守る?」

【弦十郎】

「——ああつ、そうだ!」

引つ掛かったワードを繰り返した轟に、弦十郎は現在自分達が置かれている現状を説明した。

【轟】

「世界を壊す……。それが、昨日のガキの目的か」

【エルフナイン】

「そうです。世界の分解装置、チフォージユ・シャトーが完成してしまえば、この世界とそこに生きる全ての生命は無に帰してしまいます!」

【響】

「私達は何としてもキャロルちゃんを止めないといけない!でも、今のままじゃ力が足りない……。だから、轟くんの力を貸して欲しい!一緒に戦って欲しいの!」

【未来】

「お願い!響達の力になってあげて?……私には戦う力が無い。響達が苦しみながら戦うのを見ていることしか出来ない!そんな私がこんなことを言う資格なんて無いけど、

あなたの力で皆を守ってあげて欲しい」

【マリア】

「私も同じよ。……嘗て大罪を犯し、その贖罪すらもままならない私。出来ることならこの身を賭して悪と戦いたい。……でも、それすらも叶わなず、大切な家族をまた目の前で喪いそうになった」

「そんな時、二人を助けてくれたのがあなただった。どんな目的があつたにせよ、見ず知らずの調と切歌を助けてくれたあなたを私も信じたい！……お願い、力を貸して！」

響に続いて、未来・マリアの二人が轟に訴えかける。

相変わらず不機嫌そうな表情を変えない轟。そこへ昨日も自分に泣きながら懇願してきた幼い雰囲気を残す少女二人が、またしても頭を下げながら頼み込んできた。

【調】

「……昨日は、私達のお願いを聞いてくれてありがとうございます」

【切歌】

「デス。……例え私達をエネルギー源としか見ていなかったとしても、約束を守ってくれたことには変わりないデス……嬉しかったデスよ、とても」

【調】

「……これからも力を貸してくれませんか？私達も今はギアを持っていません。でも、

ギアが直ったなら」

【切歌】

「私達のこと、エサとして、自由にして構わないデス！だから——」

【調】【切歌】

「私達と一緒に戦ってください。お願いします（デス）！」

昨日は健気な二人の様子に心動かされた轟。しかし、今日は頭を下げる小さな戦姫を見ても、心が揺れ動くことはなかった。

【轟】

「お断りだ。世界を壊すだの救うだの……、そんな下らないこと、お前達人間同士で勝手にやれ」

「俺には関係無い——！」

一切の遠慮なく吐き捨て、轟は今度こそ指令室を後にしようと身を翻した。

本当に世界の、人類の行く末などどうなつても構わないといった態度に、人類救済、ひいては正義を重んじるマリアは表情を険しくした。

【マリア】

「下らない？ 関係無い？ よくそんなことが言えるな？！」

「お前には守れるだけの、戦えるだけの力があるのだろう！？ 何故それを、正義を貫く為に

使おうとしないんだ？」

【轟】

「正義？……ハッ、笑わせてくれる」

そう言いながらも、轟の顔には笑みではなく、どうしようもない嫌悪感が溢れた険しい表情を浮かべていた。

轟は半身を振り向かせると、まだ食って掛かろうとするマリアに、鋭い一言を投げかけた。

【轟】

「そんな血塗られた」力で、何を守れると言うんだ？」

”血塗られた”。その言葉に、装者達は息を飲んだ。

最初は、殺戮の魔剣にしてイグナイトモジュールの根幹たるダインスレイフのことを指しているのかと思った。

しかし、シンフォギアのコアを見ながら轟が続けざまに放った一言はそれを否定すると共に、装者達の心を無慈悲に斬りつけることとなった。

【轟】

「言っていないが、ソイツからは血生臭い匂いがポンポンする。正義の為とソイツを振るい、その度に幾多の血が流れてきたからだ。違うか？」

「「「「「ツ!!」」」」」」

【轟】

「凶星、みたいだな」

悲痛に歪み、青ざめた装者達の顔を見て、轟は呆れた様子で呟いた。

装者達の脳裏に浮かんだのは、助けられなかった大切な人や巻き込んでしまった者達の顔と流れる血。

自分達の力シンフオギアは、数多の人々の犠牲を糧としている。……実際はそんなことはなく、助けられた者達も大勢いるのだが、彼女達の脳裏にハッキリ浮かぶのは、助けられなかった者達の顔であった。

【轟】

「世界を壊すあのガキも、それを止めようとするお前達も、所詮は自分達のエゴを正当化するために力を振るうことに変わりはない」

「それを正義と、大切な者を守るためと嘯くのは勝手だが——」

「それに、他者おれたちを巻き込むな——!」

鋭い瞳で装者達を射抜いた後、轟は彼女達に背を向けて歩き出す。その歩みを止めようとする者は、今度は誰もいなかった……。

【響】

「轟くん……」

立ち去った青年の後ろ姿を思い出し、響は弱々しく呟いた。

結局、まともに話すことも出来なかった。轟の心は固く閉ざされていて、自分達の入る余地など無い。そればかりか、自分達のしてきたことをただのエゴとして切り捨てられた。

打ちのめされ、肩を落とす響に、優しく声がかけられる。

【翼】

「立花」

【響】

「翼さん……。私……」

言いたいことは分かっているとしても言うように、翼は響の肩をポンポンと叩く。

【翼】

「そう、落ち込むな。……あの男は、人間というものを嫌悪している。何故なのかは分からないが」

【クリス】

「どのみち、あんな訳分かんねー野郎と一緒に戦うなんて無理なんだよ……所詮、あい

つも薄汚い男の一人ってことだろ」

【響】

「クリスちゃん？」

最後の部分は聞き取れなかったものの、クリスの態度は最後まで頑なだった。

正直、響も自信を無くしつつあった。轟とは友達になるとか分かり合うとか以前に、そもそも価値観が違いすぎる。人間同士のはずなのに、全く違う存在を相手にしているような気さえする。

そんな相手と、仲間になることなんてやはり無理なのだろうか？

【調】

「……諦めちゃうんですか？」

俯く響の耳に、静かだが意思の強さを感じられる声が届く。視線を巡らせると、声の主である調は響の元へと歩み寄り、優しくその手を取った。

【調】

「……響さん。私達も、最初は敵同士でしたよね？お互いに背負うもの、信じるものが違っていて、そのせいで戦って……。私は、響さんに酷いことも言いました」

【響】

「調ちゃん……。いいんだよ、そんなこと！私だって、迷ってた。自分のしてきたことが

本当に正しかったのかなって。……調ちゃんに言われて、それが自分の戦う理由を見つめ直すきっかけになった」

「それがあつたから、こうして響ちゃんや切歌ちゃん、マリアさんとも友達になれたんだもん！」

【調】

「なら、今度だって諦めないでください！」

自分の手を握り返す響に、調は瞳に力を込めて訴えかけた。

目を瞬かせる響。そこに、切歌も調と同じように響の手を包みながら自分の気持ちをぶつけてきた。

【切歌】

「そうデス！一回ダメだったからって諦めるなんて、響先輩らしくないデスよ！」

「私達の知っている響先輩は、諦めが悪くて、学習能力が無いのかってくらい、私達との和解を諦めなかったデス！今回も、拒絶されたって何度も何度も話しかけるべきデスよ！」

「当たって砕けろ、デス!!」

響の諦めの悪さに、自分達も救われた。その事を自分の持てる最大限の言葉で伝えられた。



言い終わった後、切歌は内心自信を持ってそう思っていた。……しかし、

【響】

「ううくく。切歌ちゃ〜ん……」

【切歌】

「あ、あれ？何で泣くデスカ、響先輩!？」

【調】

「……切ちゃん」

情けない涙目の表情になった。何故響がそんな顔になったのか分からない切歌は慌てるが、彼女以外の全員が、励ましの言葉以上に彼女の心を抉るような単語が多かったからだ、内心溜め息を吐いていた。

【マリア】

「全く……。励ましてるのか貶してるのか、分からないじゃない」

見かねたマリアが3人に歩みより、切歌の脳天に軽いチョップを振り下ろした。

【切歌】

「あうっ!?!……うう、ごめんなさいデス」

反省する切歌を見てマリアは苦笑すると、次に涙目のままの響の頭に手を置き、その柔らかい髪を鋤くように撫で始める。

【響】

「マリア、さん？」

【マリア】

「……正直、さっきのを見た限りじゃ、私も翼やクリスマスと同じ想いになるのを禁じ得ないわ」

「マリアもやはり轟との和解が難しいと考えていることに、響はまた視線を落としかける。しかし、マリアの言葉はそこで終わらなかつた。

【マリア】

「でも、そんな状況を変えられるのが、君という人間だとも思っている」

「落としかけた視線を上げた響の目に写ったのは、慈しみに溢れたマリアの優しい笑顔だつた。

【マリア】

「君の言動は、凍てつき閉ざされた心の扉さえも溶かし、こじ開けるだけの熱を秘めている。それを私達は身をもって知っている」

「マリアの言葉に、調と切歌も頷いた。

【マリア】

「だから、それが届くまであなたは声を上げ続けなさい。生きること諦めないように、

分かり合おうとする気持ちを諦めないで！」

『生きることを諦めないで』。

それは、響が奏から受け継いだ、そして今の自分の信念にもなっている言葉だった。

ハッとさせられる響。そこに、彼女の背中をいつも押してくれるかけがえのない存在の声が届く。

【未来】

「皆の言う通りだよ、響」

【響】

「未来……」

【未来】

「人間、すぐには分かり合えないよ。どんなに仲の良い間柄だって、擦れ違つて、傷つけちゃうことだってある。……私達だってそうだったでしょ？」

嘗て、響がシンフォギア装者として覚醒したばかりの時、国家機密であったシンフォギアに関する情報は、身内にさえ明かすことは出来なかった。当然、親友である未来にも……。

そのせいで、仲の良い二人の間に些細な誤解が生まれ、それは一時、深い確執となつて二人の心を遠ざけた。

【未来】

「それでも、今私達は、これまでと変わらない親友であり続けている。ちよつとのきつかけがあれば、人と人は分かり合えるんだよ」

【響】

「……でも、私、轟くんのこと、ほとんど知らない。何を考えているのか全然分からない……！」

【未来】

「そんなの、これから分かっただけじゃ良いんだよ！」

未来は瞳の顔を両手で挟み、自分の方を向かせた。まだ自信が取り戻せない響の瞳と、彼女を信じる未来の瞳が交差する。

暫く視線を交わしあつた後、未来は唐突に、響の額に自分の額をコツンと合わせた。

【響】

「あうっ——」

【未来】

「もう、難しく考えないの！……響、いつも言っているでしょ？どんなに大変なことに直面しても、それを切り抜ける魔法の言葉」

「そう言われ、響の頭に浮かんだ言葉は一つ。」

『生きることを諦めないで』。それよりも昔から自分の中で息づく、立花響を奮い立たせる聖詠。

【響】

「……へいき、へっちゃら？」

【未来】

「もつと元気良く！はいっ！」

【響】

「へ、へいきへっちゃら!!」

【未来】

「そう！……それでこそ響だよ？挫けそうになってもその言葉と私が響を支えるから。だから、響は自分の想う通りにやってみて！……ね？」

【響】

「未来……。ありがとうっ」

込み上げてきた熱いものを、両目を擦って拭い去る。

未来の皆のお陰で思い出せた。自分がシンフォギアを纏って届けたいのは拳ではなく、心であることを。例え弾かれても、何度も何度も、心の殻を破るまでぶちかまし、自分の想いを届ける。

そうやって、自分はこれまで戦い続けてきたのだ。

【響】

「……そうだね。今回がダメなら次に！100回やってダメでも、101回目はこの気持ちが届けば良いんだ！」

何をするにも遅いことなんて無い。大切なのは、ちゃんと相手に伝えられるかどうか。

思い返してみれば、助けて貰ったお礼もちゃんと伝えていない。それを含めて、自分の気持ちを伝えよう。響は、そう心に誓った。

【響】

「よし！じゃあ、善は急げ！轟くんの後を追いかけるな！」

【翼】

「今から追う気か!? 流石に逸りすぎではないか？」

【響】

「何言ってるんですか、翼さん！轟くんが何処に行くか分からないんだし、見失ったら次がいつになるか分からないじゃないですか！」

【弦十郎】

「確かにそうかもしれんが——」

【???】

『なら、響さんの言う通り、早めに動くのが吉ですね』

突如響いた若い男性の声。先程の轟の声とは違う、柔和で穏やかな声の持ち主。弦十郎達に心当たりは一人しかいなかった。

指令室の扉があつた場所。そこに立っていたのは、

【翼】

「緒川さん!?!」

頭に包帯を巻き、右腕を吊つた痛々しい姿をした緒川であつた。

【弦十郎】

「緒川!」

【未来】

「怪我は大丈夫なんですか!?!」

【緒川】

「ええ。多少の不都合はありますが、大事には至っていません。……彼、そうならないように配慮したようにも感じられました」

緒川は真面目な顔で告げた。その気になれば自分を即死させることも簡単だったと。それを敢えてしなかつたとなれば、轟はただの暴虐な人物ではないはずである。

その言葉は、轟を信じる響や調の背中を押す。

【調】

「響さん、私も行きます!」

【切歌】

「皆で頼んだ方が上手くいくデスよ!」

【緒川】

「彼の所在を掴んでおくことは、今後どう転ぶにせよ必要です。そしてその役目は、エー  
ジエントである僕が適任のはずです」

【マリア】

「……司令!」

【弦十郎】

「……分かった。緒川、響くん達を連れて黒銀を追え!」

【翼】

「正気ですか、叔父さま!?!緒川さんは手負いの身!にも関わらず隠密としての責務を果  
たせなごと——」

【クリス】

「止めとけよ、先輩。……さつきと同じで、こうなったら止められねえよ」



【翼】

「雪音……、ならば私も行きます！護衛は多いに越したことはありませんから！」

家族同然の存在である緒川の身を慮り、翼も同行を進言すると、弦十郎は深く頷いた。

【弦十郎】

「クリスくん」

【クリス】

「分かつてるって。……こいつ等だけじゃ不安だからな。あたしがお「r b : 守 >

も」りしてやんねーと」

【弦十郎】

「頼む……！」

「良いか!?接触したら先ずは交渉だ。それで決裂、向こうが実力行使に出た場合、即座に退け。キャロル戦で消耗しているだろうが、それでもあの力は脅威だ」

【緒川】

「そうなった場合は、僕達情報部が秘密裏に彼を追跡します」

【響】

「分かりました！よし、行きましょう！」

段取りを決め、響達は轟を追うべく走り出す。しかしその時、指令室に非常事態を報

せる警報が鳴り響いた。

【弦十郎】

「どうした!? 今度は何があつた!？」

弦十郎の声に慌てて状況把握にかかる藤堯とあおい。

轟の追走に動き出そうとしていた装者達の前に、新たな脅威が立ちふさがろうとしていた——